令和元・２年　文部科学省委託事業
これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究

戸田市版
カリキュラム・マネジメントの手引書

令和３年３月
戸田市教育委員会

はじめに

変化の激しい将来の予測が困難な時代において、これからの時代を生き抜く子供たちには、自ら課題を見付け、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する資質・能力を育まなければなりません。中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（令和 3 年 1 月 26 日）においても、一人一人の興味・関心や特性、学習進度等に応じた「個別最適な学び」、また多様な他者とともに持続可能な社会の創り手に必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」の実現から、全ての子供たちの資質・能力を確実に育成することが求められています。その観点においても、各学校のカリキュラム・マネジメントの充実は不可欠であると言えます。

このような中、本市においては、「世界で活躍できる人間」の育成を目指し、子供たちに育むべき資質・能力ルーブリックの作成や教科等横断的なカリキュラム開発の研究に取り組んで参りました。また、産官学民の知のリソースを積極的に活用したカリキュラム・マネジメントにより、教科等横断的な学びを一層充実させ、戸田型 PBL といった新たな学びにも挑戦しております。これらは、まさに、各学校が主体的に子供たちの実態等に応じて、教育課程を編成・見直し・改善し続けている姿であると言えます。本手引書は、その取組及び成果と課題をまとめたものであり、今後の本市のカリキュラム・マネジメントのさらなる充実に向け、本手引書の活用を図っていきたいと考えます。

結びになりますが、本事業におきまして、御指導を賜りました全ての皆様にこの場を借りて心から御礼申し上げます。

令和 3 年 3 月

戸田市教育委員会教育長　戸ヶ﨑　勤

目　　次

Ⅰ　カリキュラム・マネジメントの進め方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

1　カリキュラム・マネジメントを進める上で大切にしてほしいことについて

2　子供たちに育むべき資質・能力について

3　単元配列表の作成について

4　「PDCA サイクルの確立」について

5　人的・物的資源等の活用について～産官学民の知のリソースを活用して～

6　アクティブ・ラーニングの視点による授業改善

7　コロナ禍におけるカリキュラム・マネジメント

Ⅱ　実践校における取組①　戸田第二小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

＜a 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究＞

Ⅲ　実践校における取組②　美笹中学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53

＜b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究＞

Ⅳ　実践校における取組③　新曽小学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77

＜c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究＞

Ⅰ　カリキュラム・マネジメントの進め方

1　カリキュラム・マネジメントを進める上で大切にしてほしいことについて

（1）カリキュラム・マネジメントとは

教育課程とは、学校教育の目的や目標を達成するため、教育の内容を子供の心身の発達に応じて、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画であり、その編成主体は各学校である。各学校では、学習指導要領等を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実状等を踏まえ、各学校が設定する学校教育目標を実現するため、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していかなければならない。これが「カリキュラム・マネジメント」である。

戸田市教育委員会　「これからの時代に求められる資質・能力を育むためのカリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究」コンセプトマップ

（2）カリキュラム・マネジメントの目的・効果について

カリキュラム・マネジメントとは、前述のように、学校が教育課程の編成、実施、評価、改善を計画的かつ組織的に進め、教育の質を高めることを意味している。新学習指導要領において示されている『学習の基盤となる資質・能力』（言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等）や、『現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力』の育成のためには、教科等横断的な学習を充実させ、教育の質を高め、学習効果の最大化を図るカリキュラム・マネジメントが鍵を握る。

これまでも教育課程の編成は各学校で行われてきているが、変化の激しい現代社会において、学年や教科等の壁を越えた学校全体でのカリキュラム・マネジメントの確立は不可欠である。育成すべき資質・能力を育成するため、カリキュラム・マネジメントを充実させ、全教職員が持ち味を活かしながら力を合わせ、自校の教育課程を全教職員が語れる学校づくりを通して社会に開かれた教育課程の実現を目指していくべきである。

(3)カリキュラム・マネジメントと『社会に開かれた教育課程』について

子供たちに資質・能力を育むためには、よりよい学校教育がよりよい社会を創るということを共有しておかなければならない。Society5.0 や With コロナ時代が到来する等、我々の社会は、今後一層、変化の激しい時代を迎える。このような中、子供たちに育むべき資質・能力を確実に身に付けることができるよう、学校の教育目標や目指す子供像等を地域社会と共有し連携・協働を進めていくことが重要である。各学校の教育計画や教育課程を軸とし、学校の教育活動の質的向上を図っていく。つまり、学校の教育資源（人、物、環境、情報、時間･･･） を上手に活用し、地域社会の協力を得ながら、地域社会と共に子供の成長を支えていくことが望まれる。

(4)「カリキュラム」と「教育課程」の違いについて

学術的な「カリキュラム」が行政用語としての「教育課程」よりも広い概念であることに注意する必要がある。簡単にいえば、「カリキュラム」においては、ヒドゥン・カリキュラムのように、教育の目的・目標に向かって明示的・暗示的に取り組まれる教育活動すべてが編成の対象となる。一方「教育課程」は、学習指導要領において教科や特別活動等の教育活動を編成対象として特化しており、「カリキュラム」より狭義と捉えることがある。（ヒドゥン・カリキュラムのようなものは対象とされていない）

なお、「教育課程」の編成の対象は、学校教育法施行規則第五十条（小学校）、第七十二条（中学校）において定められており、教科だけでなく、教科外の特別活動などまで含めた「教育活動」全体を対象とする。

(5)もとにすべきこと及びカリキュラム・マネジメントの３つの側面について

これまでのことを踏まえ、各学校でカリキュラム・マネジメントのもとにするべき、考えておくことは、以下のとおりである。

①学校教育目標を達成するために、子供たちに身に付けさせたい力や目指す子供の姿を考えること。
②学校や地域の実態、特色を考えること。

また、中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）においては、カリキュラム・マネジメントの３つの側面について以下のように示されている。

①学校の教育目標等（目指す子供たち像や教育課程編成の重点など）の実現に向け、重要となる各教科等の内容を選択し、選択した内容について各教科等相互の関連を図りながら配列し、適切な授業時数を配当するなど、学校の教育目標との関係を意識しながら、**各教科等の教育内容を教科等横断的な視点で組織**すること。

②教育内容の質の向上に向け、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る**一連のＰＤＣＡサイクルを確立**すること。ＰＤＣＡサイクルとは、Plan（計画）→Do（実行）→Check（評価）→Act（改善）の ４段階を繰り返しまわすことによって、業務を継続的に改善することであるが、カリキュラム・マネジメントでは、計画（P）を「編成」、実行（D）を「実施」と置き換えて捉える。

③教育活動の実施に**必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用**しながら効果的に組み合わせること。

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月 21 日）より

これらについては、各学校でカリキュラム・マネジメントを進めていく際に考慮すべきポイントとなる。また、これらの視点に基づき、マネジメントを進めていくことが重要であると捉える。

２　子供たちに育むべき資質・能力について

（1）育成を目指す３つの資質・能力とカリキュラム・マネジメント

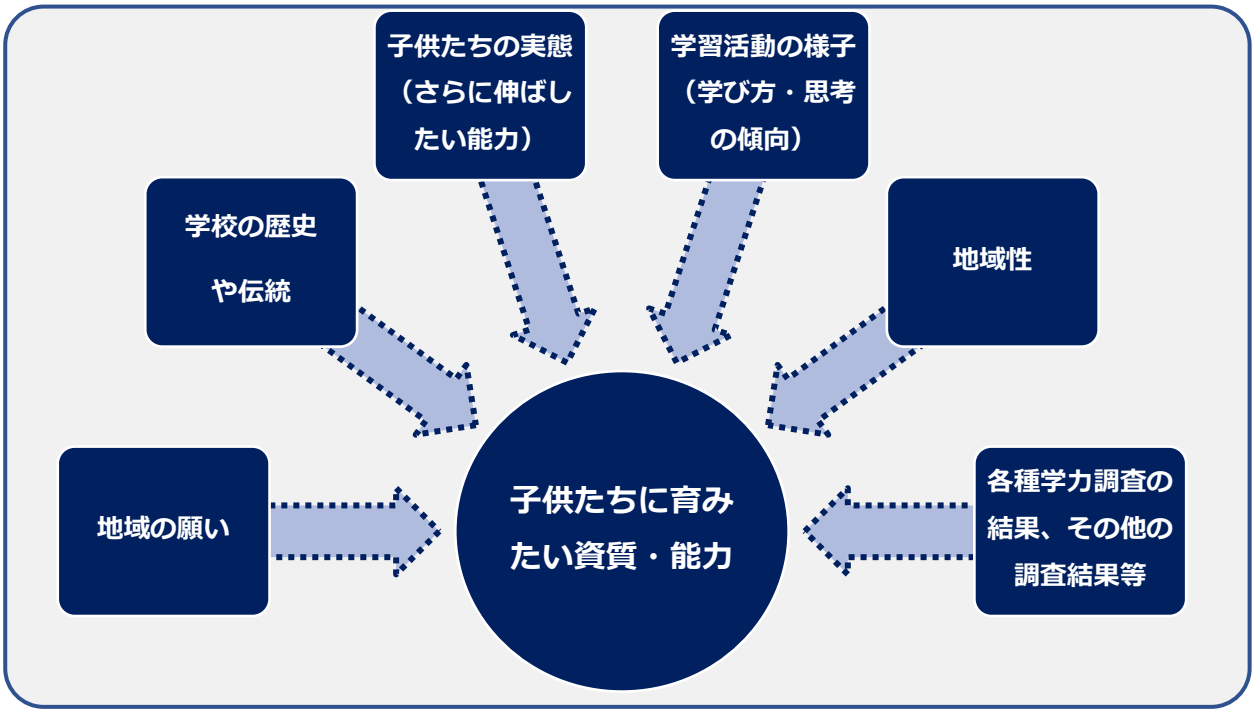
新学習指導要領において、全ての教科等の目標及び内容は「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」の三つの資質・能力で整理されている。教育課程の編成にあたっては、三つの資質・能力を踏まえつつ、教育内容を明確にするとともに、総合的な学習の時間との関連付けることが示されている。学校の教育目標は、その学校の歴史や伝統、地域性、子供たちの実態、地域の方々の思いに基づいて、共有されてきているものである。目標を見つめなおし、学校教育目標を、「育成を目指す三つの資質・能力の柱」と擦り合わせながら、育てたい子供たちの姿を具体的に描いていくことが大事である。（資料１）

このような、教科等の枠を越えて全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力についても、資質・能力の三つの柱に沿って整理し、教科等の関係や、教科等の枠を越え、重視すべき学習活動との関係を明確にし、教育課程全体を見渡して組織的に取り組み、確実に育んでいくことができるようにすることが重要である。なお、この際、長期的な目標（いわゆる学校目標）と、短期的（２～３年）な「育成を目指す子供の姿」を区別しておくとよい。また、学校で育成を目指す子供の姿を『〇〇力』と表す際、育成すべき三つの資質・能力と、それぞれが別々の位置付けになっているように、ダブルスタンダードにならないよう留意する必要がある。

（2）戸田市立各小・中学校における学力向上プラン

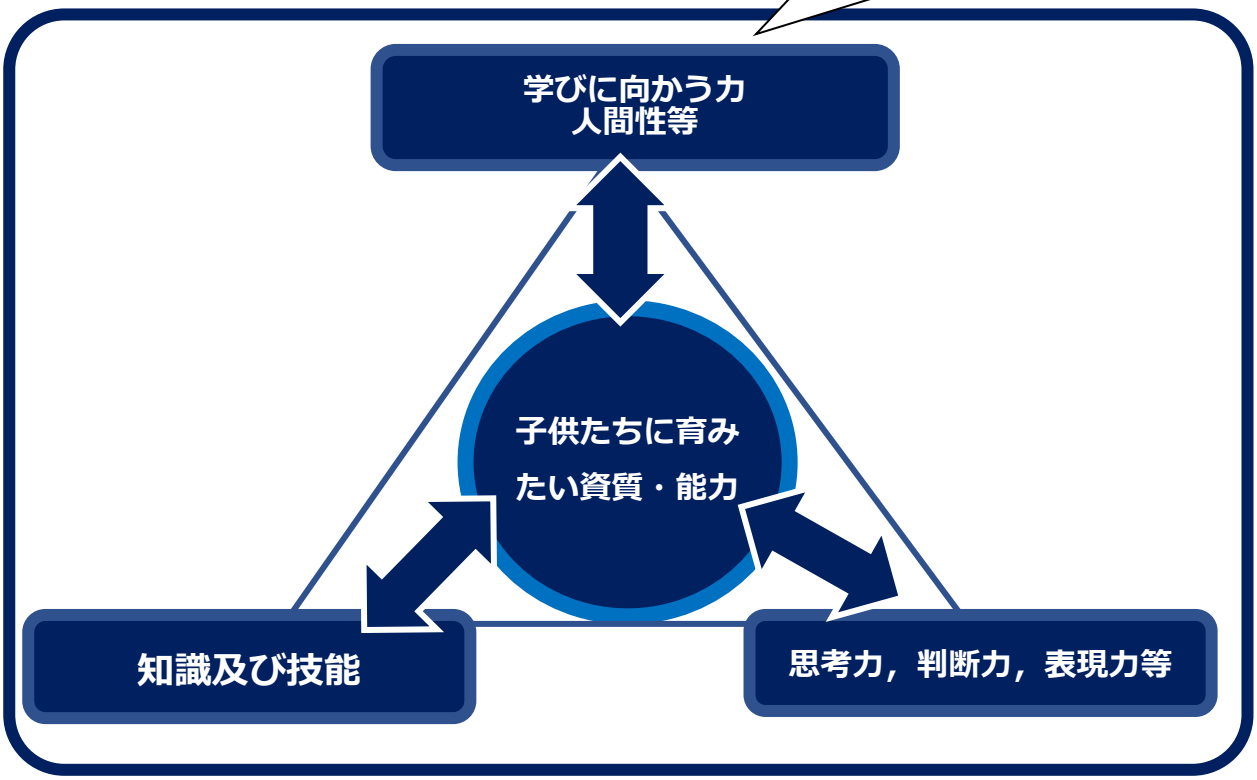
学力向上プラン（資料２）については、各学校でそれぞれ念頭に置いてきたものはあったが、抽象的・一般的なものであったり、必ずしも学校内の全教職員が意識するものではなくなっていたりしているという現状があった。そのため、本市では平成 30 年度より改めて、「授業力」向上プランとして、作成し直している。各学校の現状と課題を学力・学習調査等の結果をもとに洗い出すようにし、それをもとに改めて学校の具体的な教育目標、すなわちその学校での教育を通じて子供たちにどのような力を身に付けさせたいかを考えてもらうプロセスをとった。このプランは、①学校教育目標、②課題、③具体的取組の３つの要素からなる。目標には、「これからの時代を子供たちが生き抜くためにはどのような力を身に付けさせることが必要であり、その学校では特に何を育てたいのか」を示してきた。これらを図等でデザインし、管理職を含めすべての教職員がこれについて問題意識を持つとともに認識共有をし、日々の学校運営や授業改善に結びつけられるようにしている。また、このプランでは、客観的な学力の伸びの指標として、埼玉県学力・学習状況調査を取り入れている。

資料１



子供たちに育みたい資質・能力は、３つの柱と関連付けて位置付ける。

このことにより、教科等横断的な視点からのカリキュラム・マネジメントが可能となる。



資料２

令和２年度 戸田市立戸田第二小学校

『授業力』向上プラン

心豊かに 21 世紀を たくましく 生き抜く 子

主体的に学び続け、他者と協働し、新たな価値を生み出すことができる児童の育成

課題①

粘り強さ

― 教室を科学する ―

- EdTech の推進
  - 「LOiLO」の思考ツール
  - 「Qubena」の活用
  - 企業との連携
- ICT 環境の効果的な利活用
- 産官学民との連携

― データを科学する ―

- レーダーチャートによる可視化
- EBPM の推進
  - R-PDCA 指導サイクル研究
  - IGS(GROW)
  - DQ 利活用
- ICT 環境の効果的な利活用
- 産官学民との連携

創造性

論理力　学ぶ主体性

育てたい３つの資質・能力

課題②

自己有用感

課題③

学びに向かう力 メタ認知

授業改善①

カリキュラムマネジメント

ＰＢＬの推進

EdTech と創造性を融合し、社会的課題を解決する活動を通して、新たな価値を生み出すことができるよう、教科等横断的な視点で学習を展開する。

授業改善②

コラボレーションマネジメント

学級力向上プロジェクト

コーディネート発問 ICT

学級に主体的に関わろうとする態度及び望ましい人間関係力を育て、自己有用感を育む。

授業改善③

評価マネジメント

戸二小ルーブリック評価

指導用ルーブリック

e-ポートフォリオの活用

変容を見取る振り返りや客観的な自己評価によって、児童のメタ認知・学びに向かう力を促進する。

(3)資質・能力ルーブリックについて

本市が平成 28・29 年度に受けた委託事業「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の工夫改善のための実践研究」では、３種類のルーブリックを作成することが目的の一つであった。それらは、教師が主に授業づくりの際に利活用する「指導用ルーブリック」、子供たちが自身の学びを振り返るために用いる「自己評価用ルーブリック」、そして授業をとおして身に付けさせたい資質・能力を明確化する「資質・能力ルーブリック」（資料３）である。この「資質・能力ルーブリック」をもとに、目指すべき子供たちの姿がより明確化され、カリキュラム・マネジメントを進める際の拠り所となっている。

３　単元配列表の作成について

学校としての全体計画作成後、「単元配列表」と具体的な「単元計画」を作成する。前述のように、三つの側面「カリキュラム・デザイン」「PDCA サイクル」「内外の資源の活用」があるが、単元配列表はおのずと全てに関わっていく。

各教科等の年間指導計画を一枚の図に表していく。バラバラになっていた子供たちの学びの中にもつながりが見えてくる。（点と点が線でつながっていくイメージ）このように「単元配列表」を描くと、資質・能力をどのような教科等の学びの中で、どのように活用・発揮していくことができるのか、具現化され分かりやすくなる。このように子供たちの知識がある教科・単元だけのものならず、汎用性をもつことで、繋がる・使える「知識」になっていく。（資料４）

例えば、社会科で学習した「水」を理科や総合的な学習の時間等でも関連付けたりすることをイメージする、いわゆる学習で取り扱う内容を関連付けることである。しかし、単元配列表の作成をとおし、繋ぐ視点は、「育成を目指す資質・能力」であり、その視点で繋いでいくことが大切である。

例えば、国語（中学年）の資質・能力として、「相手や目的を意識して、経験したこと等から書くことを選び、集めた材料を比較したり分類したりして、伝えたいことを明確にする」ことを挙げているとする。この資質・能力を、国語科のどの単元で育成するのか、またその単元で育まれた力をその後、どの学習（教科等横断的な視点で）のどのような学習活動の中で、どのように活用・発揮させようと計画しているのか、というように配列を考えていかなければならない。（※資料４参照）

資料３

			レベル１ 概ね小１～２
学びに向かう力・人間性	主に １，２【目指すべき目標の・評価規準の設定】【主に主体的な学びの視点】 と関わり	自律的活動 （好奇心）	・身の回りのことについて、「知りたい」「不思議だな」と思う。 ・「なぜ？」「どうして？」と言葉に出して尋ねたり、自分で調べてみたりする。
		自律的活動 （目標をもつ）	・自分が達成したいことへの見通しや意思を自覚するようになる。 （比較的短期のこと）
		自律的活動 （挑戦）	・自分の得意・不得意を自覚しながら、できることは進んで挑戦する。 ・失敗しても大丈夫だと感じて、少し苦手なことにも挑戦してみる。
	主に ３，４「主に対話的な学びの視点」「深い学びの視点」 と関わり	自己理解 （主体性・自立）	・自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組む。 ・自分の考えたことを、人に確認しながら（必要なヒントはもらいながら）実行する。
		文化理解・社会倫理	・具体的な活動や体験を通して、ごく限られた身近な家族や身の回りの生活の範囲において、関心を示す。（学校とその周りの地域社会）
	主に ４，５「深い学びの視点」「学びの評価・振り返り」 との関わり	学習観	・できないことでも学習したり努力したりすれば、少しずつできるようになることを知る。 ・分かること、できることが「おもしろい」と感じることができる。
思考力・判断力・表現力等（教科等の本質に根ざした見方・考え方等）	主に ３「主に対話的な学びの視点」 との関わり	コミュニケーション方略	・教室など1対多数の場面で、本人が伝えたい気持ちを、聞き手に伝わるように動作や言葉で表す。
		チームワーク行動力	・身近な友達との遊びや生活の場面において、遊びをもっと楽しくするために一緒に工夫をしたり与えられたグループワークに取り組む。
	主に ２「主に主体的な学び」 との関わり	発想	・思いつきで、より工夫して活動を楽しむ。 ・もっとおもしろくなるように、活動する。
	主に ４「深い学びの視点」との関わり	問題発見・課題認識	・身の回りの自然や生活を遊びや活動を通して五感で感じる。 ・身の回りのものをよく見て、どうなっているのか、どうしてそうなのかなど、違和感や疑問を言う。 ・上手くいかない理由をこれまでの経験や学習内容から考えられる。 ・自分のしたいことをするために、今必要なことは何か考える。
		推論 （論理的思考力）	・具体物や身の回りのもののつくりや構造に興味を持ち、考える。 ・物事の順序を考える。 ・自分の体験をもとに考える。 ・どうやって調べたのかを知ろうとする。 ・両面的な見方をしようとする。
（生きて働く）知識・技能		知識・技能	

上記の戸田市アクティブ・ラーニング資質・能力ルーブリックについては、ベネッセ教育総合研究所版コンピテンシー・フレームワーク及びコンピテンシー・スタンダードを参考とし、市内研究員の授業研究会を基に作成しました。

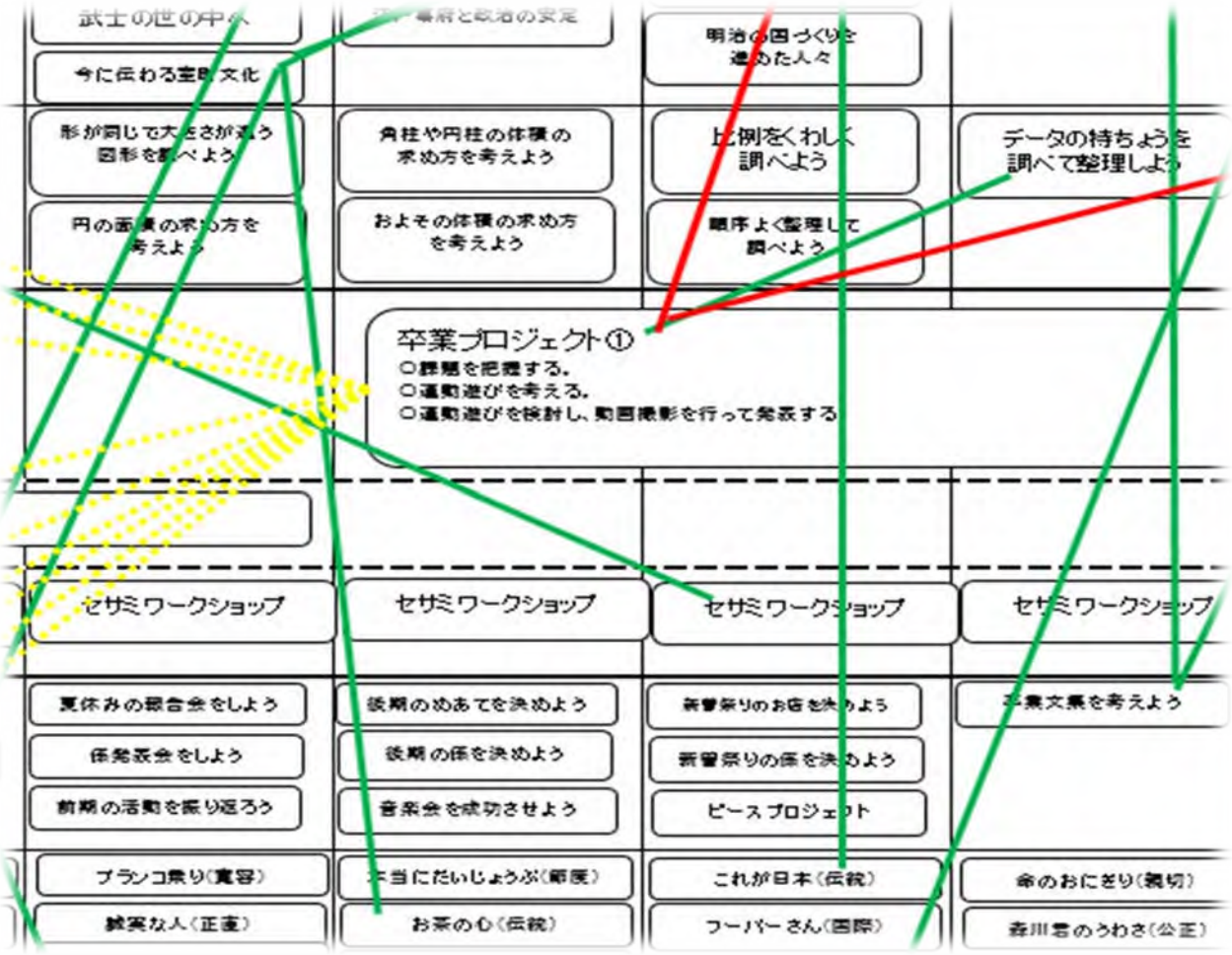
＜教師・児童生徒用＞ 資質・能力ルーブリック

レベル２ 概ね小３～４	レベル３ 概ね小５～６	レベル４ 概ね中１～３
・身の回りのこと以外にも興味が広がり、「できるようになりたい」「知りたい」「分かりたい」と思う。 ・興味を感じたことにとことん取り組む。	・知ることや考えることを楽しむことに加え、興味を感じたことを、さらに探求や目標につなげていくようになる。 ・興味の範囲や探さが増す。 ・自分の興味の対象について説明する。	・自分にとっての学ぶ意味や興味のある分野を発見する。 ・興味の範囲や探さが増す。
・自分の中に意識づけられた目標をもち、達成したいと思う。 （レベル１よりも中長期的な達成意識）	・自分の日々の生活や学習活動の中で、自分なりの意味や目的をもつようになる。	・自分の日々の生活や学習活動の中で、自分なりの意味や目的をもち、（具体性・可能性）も加味して目標をもつようになる。
・未経験なことや少し難しく感じたことでも挑戦してみる。	・自分にとって難しいことでも挑戦しようとする。 ・行動することの価値を知り、行動してみる。	・自分をより高めようとする気持ちをもち、目標をもって挑戦する。 ・目標に挑戦しながらも、理想と現実のギャップを理解しながら取り組もうとする。
・自分で決めて、自分で行ったという「気持ちよさ」を感覚し始める。	・自分なりの価値観が芽生え、主張・行動をし始める。	・人の考えも聞きながら、自分で判断して行動しようとする。 ・保護者に何かをしてもらうという依存から、徐々に卒業する。
・関心の対象が具体的に目に見える範囲意外にも広がり、それらに関心を示す。（地域／市や都道府県）	・関心の対象が日本全体や外国・世界など直接観察しにくい対象や範囲に広がり、それらに関心を示す。	・外国と日本を、共通点・相違点・関係性などの観点で捉えようとする。 ・事柄の意味を様々な立場や視点から捉えようとする。 ・自分が所属する社会に貢献したい気持ちを持ち、何ができるか考え始め、相観でできる活動に参加する。
・学ぶことを通じて、それが他のことに役立っていることや、自己の成長を実感し、学習の大切さを感じる。 ・学習によって、自己の能力は伸ばすことができる意識をもつ。（成長マインドセット） ・模倣や失敗からも学べることを理解する。	・学習によって、自己の能力は伸ばすことができる意識をもつ。 ・結果だけでなく、途中のプロセスも大切であることを理解する。	・学習は自分で高めていけるものだと考え、その目的に向けて成長していく意識をもつ。 ・なぜ、勉強するのかを考え始めている。
・相手に伝わるように意識して、言葉遣いや話し方を変えることを意識する。 ・相手を考えながら話合いをする技術を使い始める。 ・グループワークの中で順番を守り、仲間の話に耳を傾けようとする。	・相手に伝わるように意識して、言葉遣いや話し方を変える。 ・相手を考えながら話合いをする技術を使う。 ・グループワークの中で順番を守り、仲間の話に耳を傾ける。	・相手や目的・状況に合わせて、言葉遣いや話し方、表情や態度を考える。 ・相手の立場や考えを踏まえて、話の内容や文章の構成を考える。 ・相手から共感を得られる対話を行う。 ・自分の意見をはっきり伝える。
・学校での授業場面において、与えられたテーマに対して、グループで解決する。 ・目標を達成することを意識して、グループで取り組む。	・学校での授業場面において、与えられたテーマに対して、グループで解決する。 ・自分の強み、弱み、得意・不得意から仲間や所属するグループに対してできることを実施する。	・学校での授業場面において、与えられたテーマに対して、グループの目標達成のために自ら努力するとともに、他のメンバーと協力する。 ・集団のために自分ができることを考えたり、友達などから教えられたりする。
・考えが行き詰まった時に、解決の方法を別の見方から考える。	・立場・視点・抽象度を変えて、物事を「こう考えてみたらどうか」と発想する。 ・全く異質なものをつなげたり、組み合わせたりして発想する。 ・「普通」や「常識」を疑い、アイデアを出す。 ・出ができないと思っていても、何とかできる方法はないか考え、アイデアを出す。	・立場・視点・抽象度を変えて、物事を「こう考えてみたらどうか」と発想する。 ・全く異質なものをつなげたり、組み合わせたりして発想する。 ・「普通」や「常識」を疑い、アイデアを出す。 ・出ができないと思っていても、何とかできる方法はないか考え、アイデアを出す。
・身の回りの自然に何がいるかや、身の回りの事柄にどんな工夫があるか見付ける。 ・「見付けたもの」や工夫について、その仕組みや理由を詳しく知りたいと思ったり、どうしてそうなっているのかなど、疑問をもつ。 ・自由研究で自分のやりたいことを決めたり、友達の疑問や考えを活かし、自分のテーマを深める。 ・事象に触れたとき、事象同士の比較や既有知識・経験との違いから、何が問題なのかを考える。 ・学習している事項において、興味や疑問を持ったことについて考える。	・身の回りの事柄や町の様子などについて、利他の心をもって面倒や不便に気付く。 ・よく観察して、自然のすごさやものの仕組みの工夫に気付く。 ・自由研究などのテーマを見付ける。 ・友達の疑問や考えを活かし、自分のテーマを深める。 ・学習している事項について全体の流れや構造をとらえた上で、重要な内容や要点を取り出して理解する。 ・課題に対して、なぜそうなっているのか仮説を立てる。 ・他者が設定した課題とその解決策・主張を理解する。	・社会生活に関わることについて、利他の心をもって面倒や不便に気付く。 ・よく観察して、自然のすごさ・もの・社会構造の仕組みの工夫や課題に気付く。 ・自分が追求したい研究などのテーマを見付ける。 ・友達の疑問や考えを活かし、自分のテーマを深める。 ・学習している事項について、全体の流れや構造をとらえた上で、重要な内容や要点を取り出して理解する。 ・学習事項や、起こっている現象について何が課題なのか把握する。 ・課題を解決するために、何が原因なのか、どうすればいいのか見通し・仮説を立てる。
・具体的な情報の分析・解釈を行い、帰納的にルールや原則を考え始める。 ・原因と結果を考え始める。 ※「何と何を比べるか」書かれた表を使い、比較することで、『比較する』『関連付ける』とはどういうことか理解する。	・抽象的な情報の分析・解釈を行い、帰納的にルールや原則を考える。 ・ルールや原則の意味を理解し、それにあてはめたり、それにあてはまる事柄を選ぶなど選択的に考える。 ・原因と結果の関係を考える。	・抽象的な情報の分析・解釈を行い、帰納的にルールや原則を考え、一般化したり、普遍化してとらえたりする。 ・ルールや原則の意味を理解し、それにあてはめたり、それにあてはまる事柄を選ぶなど選択的に考える。 ・原因と結果の関係を考える。

各教科等で身に付けるべき資質・能力（知識・技能について）

資料４

【つながりを意識した単元配列表の作成（新曽小学校）】

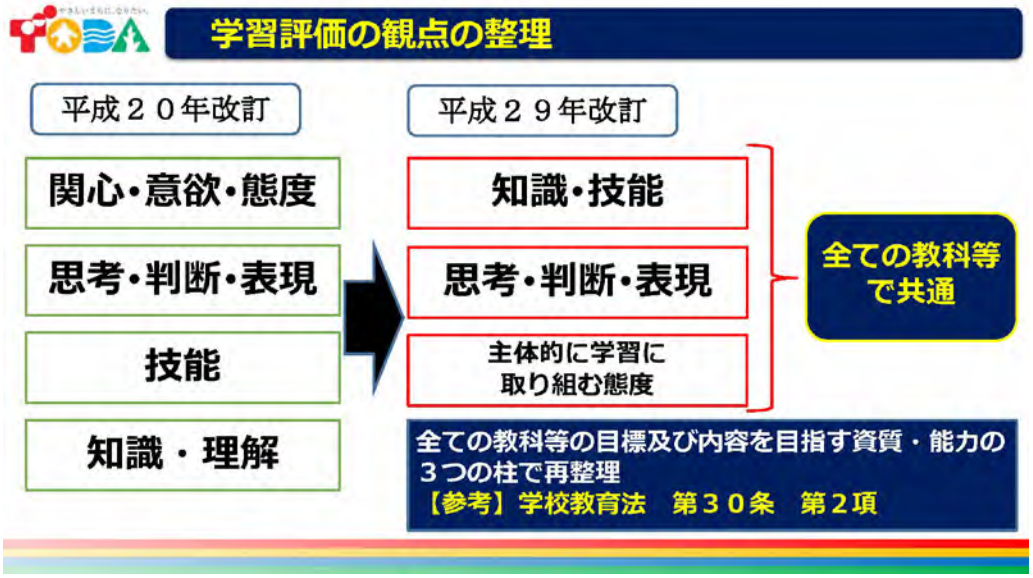


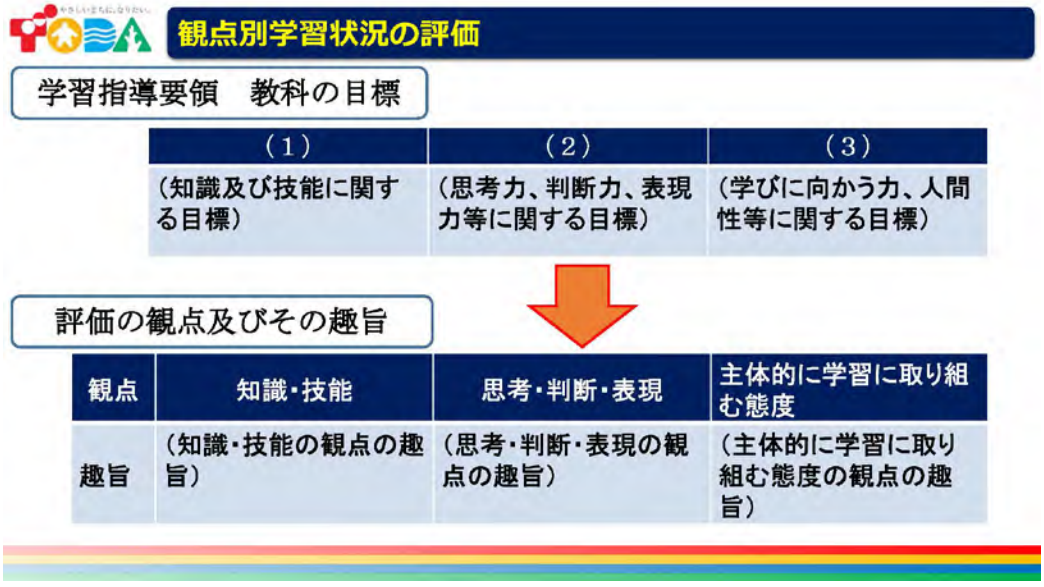
4　「PDCA サイクルの確立」について

(1)評価の３つの観点について

これまでは、カリキュラムや指導計画を「デザインする」という意識よりも、教科書等を基にした指導計画に基づき、指導を進めていくという意識の方が大きかった。しかし、カリキュラム・マネジメントを進めていくということは、必然的にその見直しも必要となり、そのカリキュラムで妥当であったかの評価を行わなければならない。また、評価の観点を位置付けることは、PDCA サイクルの確立に向けた要となる。

新学習指導要領では、教科等全ての学びが、３つ観点の評価に整理されている。このことにより、各教科等でこれまでバラバラであったものが、横並びに整理され、子供たちの学びを捉えやすくなっている。育成を目指す資質・能力が教科等の垣根を越えて整理され、より目指す子供たち像を全教職員で共有しやすいものとなった。





(2)戸田市が産官学民との連携により実施している学力等分析

各学校では、全国学力・学習状況調査（小６、中３実施）や、子供たちの前年度との学力の伸びを測定できる、埼玉県学力・学習状況調査（小４～中３実施）により、子供たちの学力・学習状況を把握すると共に、評価に活用している。また、「授業がわかる調査」も平成 16 年より継続的に実施してきている。また、その他にも戸田市では、産官学民との連携により、各学校のカリキュラム・マネジメントの進め方により、実施可能な学力・非認知能力等の分析方法がある。

＜リーディングスキルテスト（RST）＞

リーディングスキル（RS）とは、汎用的な基礎的読解力であり、教科書や新聞、マニュアルや契約書などのドキュメントの意味および意図を、迅速かつ正確に読み取る力である。また、国立情報学研究所（研究代表者：新井紀子教授）が考案したリーディングスキルテスト（RST）は、人間の読解プロセスから導き出された以下の６つの問題から、その力を測っている。

①「係り受け解析(DEP)」

・主語･述語や修飾語･被修飾語など、文を構成する要素の関係（＝係り受け）の理解について問う。

②「照応解決(ANA)」

・「それ」「これ」などの指示代名詞が何を示すか（＝照応）の理解について問う。

③「同義文判定（PARA）」

・二つの文が同じ意味を表すかどうかを判断する力について問う。

④「推論（INF）」

・文の構造を理解した上で、体験や常識、その他の様々な知識を動員して文章の意味を理解する力を問う。

⑤「イメージ同定（REP）」

・文章と図形やグラフを比べて内容が一致するかどうかを認識する力を問う。

⑥「具体例同定【辞書、理数】（ INST ）」

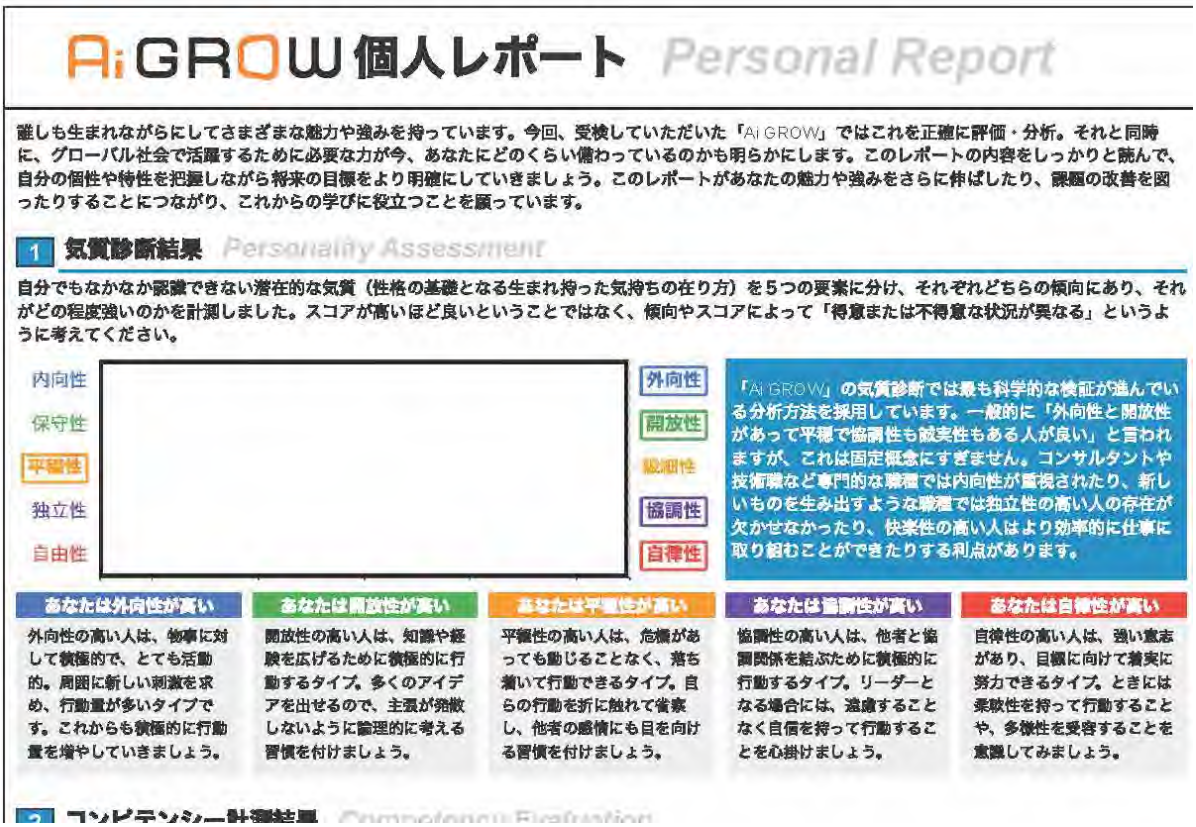
・文章で書かれた定義を読んで、それと合致する具体例を認識する能力を問う。

＜Ａｉ ＧＲＯＷ＞

気質（潜在的な性格）を示す代表的な特性５因子論「BIG５」を利用し、５つの根源的特性の高低によって個人の潜在的な性格を診断する。このことにより、個人の成長ポテンシャルの可視化に加え、最適な学習スタイルやグルーピング、学習の動機付けなどが可能となる。

可視化できるものは、表現力や創造性をはじめとする 25 のコンピテンシーの他、主体性やリーダーシップ、他者と協働して課題を発見・解決するために必要とされる３つの思考力（批判的思考力、創造的思考力、協働的思考力）など、可視化・定量化できる能力は多岐にわたる。

Ａｉ　ＧＲＯＷ個人レポート【表面の一部分】



AiGROW 個人レポート Personal Report

誰しも生まれながらにしてさまざまな魅力や強みを持っています。今回、受検していただいた「Ai GROW」ではこれを正確に評価・分析。それと同時に、グローバル社会で活躍するために必要な力が今、あなたにどのくらい備わっているのかも明らかにします。このレポートの内容をしっかりと読んで、自分の個性や特性を把握しながら将来の目標をより明確にしていきましょう。このレポートがあなたの魅力や強みをさらに伸ばしたり、課題の改善を図ったりすることにつながり、これからの学びに役立つことを願っています。

1 気質診断結果 Personality Assessment

自分でもなかなか認識できない潜在的な気質（性格の基礎となる生まれ持った気持ちの在り方）を５つの要素に分け、それぞれどちらの傾向にあり、それがどの程度強いのかを計測しました。スコアが高いほど良いということではなく、傾向やスコアによって「得意または不得意な状況が異なる」というように考えてください。

内向性 / 外向性
保守性 / 開放性
平穏性 / 緩和性
独立性 / 協調性
自由性 / 自律性

「Ai GROW」の気質診断では最も科学的な検証が進んでいる分析方法を採用しています。一般的に「外向性と開放性があって平穏で協調性も誠実性もある人が良い」と言われますが、これは固定概念にすぎません。コンサルタントや技術職など専門的な職種では内向性が重視されたり、新しいものを生み出すような職種では独立性の高い人の存在が欠かせなかったり、快楽性の高い人はより効率的に仕事に取り組むことができたりする利点があります。

あなたは外向性が高い
外向性の高い人は、物事に対して積極的で、とても活動的。周囲に新しい刺激を求め、行動量が多いタイプです。これからも積極的に行動量を増やしていきましょう。

あなたは開放性が高い
開放性の高い人は、知識や経験を広げるために積極的に行動するタイプ。多くのアイデアを出せるので、主張が発散しないように論理的に考える習慣を付けましょう。

あなたは平穏性が高い
平穏性の高い人は、危機があっても動じることなく、落ち着いて行動できるタイプ。自らの行動を折に触れて省察し、他者の感情にも目を向ける習慣を付けましょう。

あなたは協調性が高い
協調性の高い人は、他者と協調関係を結ぶために積極的に行動するタイプ。リーダーとなる場合には、遠慮することなく自信を持って行動することを心掛けましょう。

あなたは自律性が高い
自律性の高い人は、強い意志があり、目標に向けて着実に努力できるタイプ。ときには柔軟性を持って行動することや、多様性を受容することを意識してみましょう。

５　人的・物的資源等の活用について～産官学民の知のリソースを活用して～

戸田市には、日々、産業界や国等の機関、大学の研究者やＮＰＯ法人等の様々な団体が訪れ、たくさんの訪問の依頼、連携の御提案をいただく。その結果、資料５のとおり、戸田市は非常に多くの団体と連携し、Win-Win の関係を構築している。これは、カリキュラム・マネジメントの三つの側面のうち、人的・物的資源等の活用であるとも言える。

①win-win の関係性を重視

一つは、本市教育委員会や学校自身が、これからの教育をこうしたいという教育意志を持ち、対等な関係で連携を行っていくことができることである。戸田市が連携を決断するときに特に重視するのは、双方にとって利益があるかということである。例えば、企業が開発したあるプログラムの成果を確認するために戸田市のフィールドを活用したいと考えていたとする中で、本市として、そのプログラムが目指すべき教育の方向性に沿い、試してみることに価値があると感じた場合には、そこに win-win の関係性を重視

し、これを実現している。

②EBPM による効果検証ができる基盤づくり

また、本市がエビデンスに基づく教育政策という EBPM(Evidence Based Policy Making)に価値を置いていることも、企業等を惹きつける理由の一つである。共同研究において何らかのデータを生み出すことが求められるのはもちろん、産業界は特に、その連携によりどのような効果があったかの効果検証を必要とする。本市においては、学力の伸びを測ることができる埼玉県学力・学習状況調査のほか、授業がわかる・できる調査、Ai GROW など、非認知的スキルをも含めた様々な能力に関わる調査を行っている。必要に応じてこれらの調査やそのデータを使うことができることや、何より EBPM に価値を置くこと自体が連携の輪を広げる秘訣である。

③「クラスラボ」（Class lab）

戸田市は、「クラスラボ」というコンセプトを掲げ、学校や教室を様々な研究の場として提供することをオープンにしている。学校や教室は、子供が学ぶ場であり、教育の最前線である。その場をフィールドとして提供出来ること自体が、基礎自治体が持つ最大の強みである。

④積極的な情報発信

戸田市では、教育長、教育委員会事務局、各校長が日々、それぞれ Facebook により、積極的な情報発信を行っている。日々の取組やその根底にある考え方、誰とどのような話をしたか、イベントへの参加などについて常に共有することで、各学校がどのようなことを考え、何を求めているかを伝えている。これらの情報に対して、コメントを通じて情報交換ができるのとともに、思わぬマッチングが成功することもある。企業が企業を呼び、戸田市と連携したいという団体もさらに出てくるのである。

組織と組織との連携も、接点は人と人である。戸田市が常に夢を描き、将来の教育をこうしたいというビジョンや価値観があることが、様々な出会いの場で、トップ同士、職員同士の意気投合につながる。

資料５

戸田市の教育改革の取組（令和2年度版）

戸田市が目指す「世界で活躍できる人間」

- 世界に関心を持ち、地球規模で未来を考えることができる子
- 自分の力を他者や社会のために使いたいという意欲を持つ子
- 多様性を理解し、他者と協働して問題の解決に取り組める子

★教育委員会の取組
★産官学民との連携

SEEP　Ⓢ:Subject　Ⓔ:EBPM（Evidence-based Policy Making）　Ⓔ:EdTech（Education ×Technology）　Ⓟ:PBL（Project-based Learning）

1 EBPMの推進

優れた指導法や教育施策を質的・量的の両方の観点で分析し、授業改善や政策立案に生かす。

「戸田市教育政策シンクタンク」の設置
エビデンスベースでの政策づくりを目律的に推進するための組織の立ち上げ
★多様なスキルを持った教育行政プロの採用

外部との共同研究

- ★慶應義塾大学等：埼玉県学力調査の分析による非認知能力と学力の関係など
- ★筑波大学：特別支援教育に関する研究
- ★国立情報学研究所、（社）教育のための科学研究所：リーディングスキルの視点からの授業改善
- ★埼玉県教育委員会：県学力調査と教員質問紙調査を活用した優れた指導法の分析
- ★（株）ベネッセ：「ミライシード」を活用したR-PDCA支援モデル
- ★（株）LITALICO：ユニバーサルデザインに基づく学級経営と授業実践、ペアレントトレーニングの導入、個別の指導計画策定システムの導入、PBSの導入
- ★IGS（株）、KDDI（株）、（株）KDDI総合研究所：AI GROWによる教育効果の可視化の研究

2 Subject（教科）の授業力の向上

これからの時代を生き抜くために必要な力を子供たちに身につけさせるため、教科の本質を捉えた授業改善をはじめ、すべての教育改革の取組を教室での子供の学びに結びつける。

アクティブ・ラーニング推進のための「戸田型授業改善モデル」
本市独自のルーブリックを核として多角的な授業改革の取組を実施する。

「子供たちに身につけさせたい力」は何か

●各学校における具体的な教育目標の設定と教師の意識改革
- ★具体的な教育目標を設定した「授業力向上プラン」の作成
- ★「非認知スキル育成プログラム」の作成
- ★本市で作成した「資質・能力ルーブリック」の活用

子供たちが何を学ぶか

●基礎的な知・徳・体の効果的・効率的な習得
●産官学民との連携による新たな学びの実践
- ★各学校への産官学民の連携メニューの提示や導入のサポート

子供たちがどう学ぶか

●アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の推進
- ★本市の作成した「学習指導ルーブリック」の活用促進（学校訪問時の指導、研究協議会での活用等）
- ★県学力調査・全国学力調査等の分析結果のフィードバック
- ★学校訪問改革、校内研修の活性化
- ★県学力調査や教員調査によるルーブリックの検証、改善
- ★（NPO）Teach for Japan：民間の知見や高い社会人力を活用した教育実践

3 PBL等の新たな学びの推進

AI（人工知能）では代替できない力やAIを使いこなす力を身につけるため、「21世紀型スキル」「汎用的スキル」「非認知スキル」を育成する。

戸田型PBL（プロジェクト型学習）

- ★戸田型PBLの手引きの作成
- ★インテル（株）、（株）WiL、（株）Prima Pinguino：PBLに関する校内研修等の実施
- ★（財）日立財団：企業講師によるプロジェクト型探究学習プログラム
- ★インテル（株）、（株）リバネス、（株）情報通信総合研究所、フューチャーインスティテュート（株）：企業講師のデモを取り入れたプレゼンテーション大会の実施

PEERカリキュラム

Ⓟ：プログラミング教育
- ★生活科、総合的な学習の時間で一定時数を確保
- ★（株）ベネッセ：教材提供、教員研修
- ★インテル（株）：教員研修
- ★（株）アーテック：教材貸与、教材の使い方講座
- ★（社）CEEジャパン：教材「Bee-Bot」の提供

Ⓔ：英語教育（中３で英検３級取得率70％以上が目標）
- ★小学校低学年からの実施、モジュール
- ★英検の検定料助成（小６、中３）
- ★教師の英検取得率に関する調査
- ★（株）ソフトバンク コマース＆サービス：Musio貸与
- ★サイエイ・インターナショナル：英検対策講座
- ★香港日本人学校：交流事業、イマージョン教育

Ⓔ：経済教育（社会の動きや経済の動きについて身近な題材を通して学び、より良い生き方を考える授業）
- ★生活科、総合的な学習の時間で一定時数を確保
- ★（社）CEEジャパン：経済教育の授業の実践、市民大学での経済教育マイスター育成

Ⓡ：リーディングスキル（リーディングスキルの実態把握とその視点からの日々の授業改善）
- ★リーディングスキルの考え方や授業改善事例等をまとめたリーフレットの作成
- ★国立情報学研究所、（社）教育のための科学研究所、東京理科大学：リーディングスキルテストの実施、結果の分析等

豊かな心の育成

- ★「考え、議論する道徳」の推進、デジタル教科書の活用
- ★（NPO）Sesame Workshop：セサミストリートカリキュラムの推進
- ★LINE（株）：情報モラル教育
- ★劇団四季：美しい日本語の話し方教室

体力向上

- ★プロトレーナーによる部活動サポート及び小学校低学年への体力向上プログラムの実施
- ★青山学院大学、日本体育大学：体育の授業での大学生のサポート、運動部活動顧問の研修
- ★西武ライオンズ、東京ヤクルトスワローズ、（NPO）戸田スポーツクラブ：体育の授業等への講師派遣

4 EdTechの推進

教育とテクノロジーの融合による新たな学びの推進

（主にICT環境の整備面）
- ★（株）LoiLo：「ロイロノート」の思考ツールを活用したアクティブ・ラーニングの推進
- ★Google：タブレット型PC「クロムブック」の3000台導入（小：2000台、中：1000台）、市内全児童生徒及び教職員へGoogleアカウントの付与、「G Suite for Education」を活用した授業及びオンライン教職員研修の実施
- ★（株）ベネッセ、（株）富士電機ITソリューション：ICT支援員の各学校への定期派遣

※その他、「３」の新たな学びをはじめ各取組において推進

5 多様なニーズへの対応

一人ひとりのニーズに応じた支援の充実

〈教育相談体制の充実〉
- ★東京メンタルヘルス（株）：全小中学校にスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーを配置
- ★東京メンタルヘルス（株）：教育センターに教育心理専門員を配置

〈特別支援教育〉
- ★専門アドバイザーによる特別支援担当教員の指導
- ★（株）LITALICO：学校への訪問支援、共同研究
- ★獨協医科大学：発達障害専門医による医療相談
- ★筑波大学：特別支援教育に関する研究

〈日本語指導〉
- ★日本語指導担当教員、日本語指導員の配置

〈家庭学習支援〉
- ★民間の塾等による小中学校への放課後補習授業

〈不登校支援〉
- ★（株）学研エル・スタッフィング：教育支援センター「すてっぷ」の体制強化、ひきこもりの児童生徒へのアウトリーチ型支援
- ★東京家政大学等：ピアサポーター制度の活用

〈いじめ対策〉
- ★いじめ防止基本方針、「いじめ根絶ピースプロジェクト」
- ★SNS相談の導入

〈円滑な学校経営及び適切な情報の取扱いのための取組〉
- ★教育委員会ロイヤーによる研修や支援

６　アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）の視点による授業改善

(1)戸田市版アクティブラーニングルーブリックについて

カリキュラム・マネジメントは、子供たちが「何ができるようになるか」を中心にし、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を検討していかなければならない。育成すべき資質・能力に基づき、作成された単元配列表、各単元の指導計画を基に、アクティブ・ラーニングの視点からの学習過程の改善が不可欠である。戸田市では、平成 28～29 年、文部科学省より「教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニング（以下ＡＬ）の視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究」について委託事業を受けた。そこで、市内のＡＬ研究員による授業研究会等を通して、「主体的・対話的で深い学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）の視点からの授業改善」の実現に向けて、学習指導方法改善のためのチェックポイントとも言える『指導用ルーブリック』（資料６）、学習者自身も自己の学びを効果的に振り返ることができる『自己評価ルーブリック』、そして学力によい影響を与える非認知能力も含めた、戸田市の子供たちに育みたい資質・能力を『資質・能力ルーブリック』として作成した（この三つのルーブリックを「戸田市版アクティブ・ラーニング ルーブリック」と呼ぶ）。

(2)　指導用ルーブリックについて

本ルーブリックは、日々の授業づくりを５つの視点から構造化し捉え直している。まず、本時で子供たちが目指すべき目標、評価規準を正しく設定すること。それと対応できるよう、子供たちの学びの評価を行うこと、これを授業の根幹として捉えている。（授業づくりの視点１＆５）次に、２・３・４の視点は、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業づくりをより具体的に示してある。

(3)　授業改善モデル

戸田市では、戸田市が平成 28・29 年の文部科学省委託授業において独自に策定した「アクティブ・ラーニングの推進のための学習指導用ルーブリック」をすべての授業改善に関する取組の中核に据えた「戸田型授業改善モデル」の推進を行っている。「戸田型授業改善モデル」の全体像は資料７のとおりである。これについて、５つのポイントを以下に詳述する。

＜①子供たちが身に付けたい資質・能力の明確化＞

授業改善のすべての始まりは、その授業を通じて子供たちにどのような力を身に付けるのかを学校や教員自身が考えることである。そして、そのための道筋としては、まず学校全体の目標があり、それに基づき教科等、単元、授業や学習活動の各レベルにおける目標を明確化する必要がある。

＜②ルーブリックの中核化＞

既述のとおり、本モデルは、ルーブリックを中核に据えて、各教員の日常的な授業改善、研究授業、教員調査等のすべての授業改善のための取組をこれに結びつけることに特色がある。このルーブリック自体が授業改善を進める上でのチェックポイントとしての役割を果たすものであり、教員はこれをもとに授業計画を作成したり、授業後の振り返りを行ったりすることができる。また、研究授業でもこれを用いることで一貫したスキームによる指導を各教員に積み上げることができ、継続的な指導を単発的なものから体系だったものに変化させることができる。

＜③各教員へのフィードバックの充実＞

授業改善の PDCA サイクルのために必要なことは、各教員へのフィードバックである。子供たちの学び自体に多面的な見方があり、教師の指導力も、何か特定のものさしによってその価値が測れるものではない。しかし、授業改善に努力する教師が、その成果がどうであったかの部分的な参考とするためのフィードバックを行うことは重要である。具体的な仕組みとしては、子供たちの学力を伸ばした数値のみならず、授業がどれだけ分かったか、その教科がどれだけ好きかを測る本市独自の「授業がわかる調査」の結果等も併せて提供している。

＜④戸田型研究授業＞

本市においては、指導主事が毎年全学校を訪問し、研究授業や公開授業に対する教科ごとの指導を行う学校訪問の取組もまた、ルーブリックに紐付いている。「分科会」において教科ごとに指導主事がルーブリックに基づき、その授業への評価や指導を含んだ資料を使って指導している。授業を見る視点に一貫してルーブリックを活用することで、各教員のルーブリックへの理解が深まるとともに、知見を整理しながら積み上げていくことができる。

＜⑤エビデンスベースでのルーブリックの継続的改善＞

モデルの中核となるルーブリックについても、様々な取組からのフィードバックをもとに継続的に改善を行っていく。その際には、調査や研究による数値的結果のような「量的エビデンス」と、数値的ではない結果による「質的エビデンス」の両方を重視していく。

資料６

アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック 2020

アクティブ・ラーニングの視点から、**不断の授業改善**を図るため、授業を自己・他者評価する際の基本的な５つの視点を**指導用ルーブリック**として示した。

視点１と視点５は、目指すべき目標と学びの評価であり、これらは**授業の根幹**と捉える。

1 児童生徒が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか。
【目指すべき目標・評価規準の設定等】

□指導計画に基づき、適切な目標（資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」）が設定できたか。
□本時の目標が達成できているかを評価できる評価規準が設定できたか。
□児童生徒の学習意欲を高められる導入場面であったか。（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

2 児童生徒が自分の考えを表現することができていたか。
【主に主体的な学びの視点】

□本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。（※1）
□自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている児童生徒たちへの）支援方法を準備し、実行することができたか。
□自分の考えを表現することができるように、適切な時間や場の設定・ワークシート等の準備ができたか。
□学習活動は、目標の達成につながっていたか。

3 児童生徒が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか。
【主に対話的な学びの視点】

□児童生徒の考えを広げ深められるような、学習形態（個人、ペア、グループ、全体）は設定できたか。
□児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具（タブレットＰＣ・ワークシート・具体物等）を工夫し用いていたか。
□目標の達成につながるように児童生徒の考えを可視化（板書、ＩＣＴ等を使って示すこと）できたか。（※2）

4 児童生徒が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか。
【主に深い学びの視点】

□児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
□児童生徒が「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を設定することはできたか。
□児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化する（板書・口頭等）ことはできたか。

5 児童生徒が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、学びの成果や課題を実感していたか。
【学びの評価・振り返り】

□評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する（キャッチ&レスポンスする）ことができたか。
□評価するための方法や場面を設定することができたか。
□児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面が設定できたか。（※3）

※１～３は、令和元年度達成率が低かった事項である。※１と※３は授業の根幹であるため、見通しと振り返りの時間を必ず設定することが不可欠である。※２は児童生徒が、自分の考えをもって話した結果をアウトプットし、考えを再構築することで深い学びにつなげる手立てである。

Ｒ０１達成率	※１　小88%、中67%	※２　小54%、中34%	※３　小63%、中44%
Ｒ０２目標値	※１　小中ともに90%	※２　小中ともに60%	※３　小中ともに70%

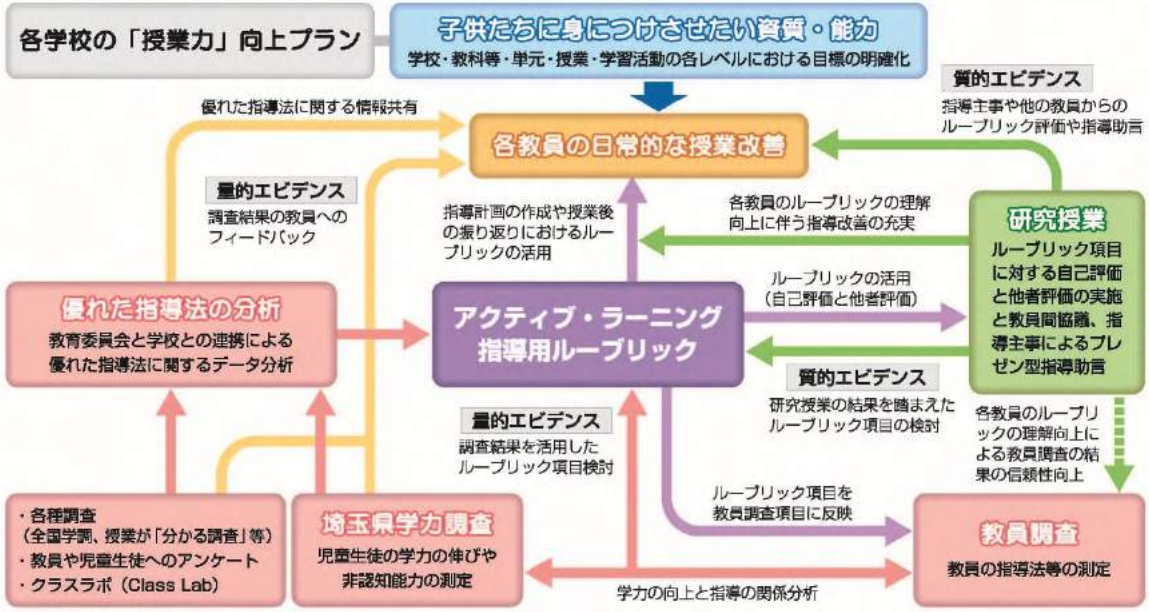
Ｒ０１達成率の数値は、学校訪問で先生が自分の授業を評価したものである。

2

資料７

アクティブ・ラーニング推進のための戸田型授業改善モデル

◆戸田型授業改善モデルのイメージ



◆戸田型授業改善モデルの5つのポイント

1 子供たちに身につけさせたい資質・能力の明確化

★子供たちに身につけさせたい資質・能力を、学校➡教科等➡単元（題材）➡授業➡具体的な学習活動の各レベルにおいて明確化し、授業の目標を設定する。

2 ルーブリックの中核化

★アクティブ・ラーニング推進のための本市独自の指導用ルーブリックを、各教員の日常的な授業改善、研究授業、教員調査等のすべての取組をつなぐための拠り所とする。
★研究授業、授業研究会、校内研修等の取組を通じて、ルーブリックの理解（＝アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善についての理解）を効果的に深める。

3 各教員へのフィードバックの充実

★授業改善に向けた気づきを生む各教員へのフィードバックを重視する。
★県学調の結果などの量的エビデンスや、授業後の子供たちの振り返りや研究授業における自己評価と他者評価に基づく協議結果などの質的エビデンスの双方の視点を盛り込んだ効果的な情報の組み合わせによるフィードバック手法を検討する。

4 アクティブ・ラーニングへの理解を加速する質の高い研究授業

★研究授業において授業者と観察者がともにルーブリックを用いて評価し、その評価の違い等について協議すること、また研究授業と公開授業ともに指導主事からルーブリックに沿ったプレゼンテーション型の指導を行うことで、アクティブ・ラーニングへの理解を一気に深める質の高い研究授業を実施する。

5 エビデンスベースでのルーブリックの継続的改善

★教員調査にルーブリックの項目を盛り込み、県学調による学力の伸びとの関係を分析（量的エビデンス）。また、研究協議等における評価シート等のデータを蓄積（質的エビデンス）。これらをもとに、ルーブリックの項目について検証・改善を行う。

◆アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック

授業改善モデルの軸とする「アクティブ・ラーニング指導用ルーブリック」は、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行う際のチェックポイントをルーブリック形式にまとめたもの。今後も様々なエビデンスに基づき継続的に改善する。

アクティブ・ラーニング指導用ルーブリックより作成したチェックポイント表（令和2年度版）

●目指すべき目標・評価規準の設定等

児童生徒が目標を理解し、課題に興味をもって取り組んでいたか
- □指導計画に基づき、適切な目標（資質・能力の三つの柱に基づき「何ができるようになるか」）が設定できたか。
- □本時の目標が達成できているかを評価できる評価規準が設定できたか。
- □児童生徒の学習意欲を高められる導入場面であったか。（学習問題や課題の工夫、提示方法の工夫など）

●主に主体的な学びの視点

児童生徒が自分の考えを表現することができていたか
- □本時の課題を正しく伝え、見通しをもたせることができたか。
- □自分の考えを表現することができるように、（主につまずいている児童生徒への）支援方法を準備し、実行することができたか。
- □自分の考えを表現することができるように、適切な時間や場の設定・ワークシート等の準備ができたか。
- □学習活動は、目標の達成につながっていたか。

●主に対話的な学びの視点

児童生徒が友達の発言を受け止め、自分の意見と比べていたか
- □児童生徒の考えを広げ深められるような、学習形態（個人、ペア、グループ、全体）は設定できたか。
- □児童生徒の考えを広げ深められるよう、教具（タブレットＰＣ・ワークシート・具体物等）を工夫し用いていたか。
- □目標の達成につながるように児童生徒の考えを可視化（板書、ＩＣＴ等を使って示すこと）できたか。

●主に深い学びの視点

児童生徒が思考・判断・表現する活動を通して「見方・考え方」を働かせていたか
- □児童生徒が本時に働かせるべき「見方・考え方」は、明確であったか。
- □児童生徒に「見方・考え方」を働かせることができる学習活動を設定することはできたか。
- □児童生徒が働かせていた「見方・考え方」を可視化する（板書・口頭等）ことはできたか。

●学びの評価・振り返り

児童生徒が「分かったこと」「やったこと」や「できたこと」など、学びの成果や課題を実感していたか
- □評価規準・評価計画に基づき、本時の児童生徒の学習状況を捉え、個々・グループ等へ支援する（キャッチ＆レスポンスする）ことができたか。
- □評価するための方法や場面を設定することができたか。
- □児童生徒が本時の学習を振り返ることができる場面が設定できたか。

（注）ルーブリックは、平成28・29年度の文部科学省委託事業『教科等の本質的な学びを踏まえたアクティブ・ラーニングの視点からの学習・指導方法の改善のための実践研究』を通じ、本市独自で作成。アクティブ・ラーニング研究員、学校管理職、研究主任等が特色ある７つの授業について観察、評価、協議を行うことで作成された約100枚の評価シートから、教科横断的かつ重要な指導要素を段階的な協議を経て抽出した。

７　コロナ禍におけるカリキュラム・マネジメント

(1)学校の新しい生活様式リーフレット

本年度、新型コロナウイルス感染症拡大防止を受け、４，５月は臨時休校、６月１日より２週間の分散登校を行うこととなった。学校では感染症対策と子供たちの健やかな学びの保障との両立が求められることとなり、カリキュラム・マネジメントの視点でも緊急な対応が不可欠となった。そこで、戸田市教育委員会では学びの保障・支援するための生活のポイント及び授業の在り方をまとめた、「学校の新しい生活様式リーフレット」（資料８）を作成した。

生活のポイントでは、コロナウイルス感染症対策を講じ、子供たちも保護者も安心して安全に過ごせる学校生活のために必要な生活のポイントをまとめてある。授業においても、コロナウイルス感染症対策の観点から今まで通り行うことが難しい活動についてＩＣＴの活用等、様々な工夫によって実現するための授業のアイデア集をまとめている。

本リーフレットでは「特別な教科　道徳」や「特別活動」、「全子供たちへのアンケートを生かした教育相談」など子供たちの心のケアに向けた取組についてもまとめており、薄れてしまった「絆づくり」と冷めてしまった「心の温度」を徐々に上げつつ、学びの保障に留意している。

(2)コロナ禍でのオンライン学習教材の配信

この３ヶ月にも及ぶ臨時休校中における「学びの保障」に向けた取組には、オンラインによる学習教材の配信もある。目指していたのは、「学びの連続性を保障すること」であり、子供たちとの絆づくりを最優先で考え、感染予防の徹底を図りつつ、教師や学校とのつながりをもつことに傾注した。（資料９）

子供たちが「安心感」を抱けるよう、「モチベーション」を保てるようにすることを考え、学校と家庭ともに馴染みあるプリント学習の推進、そこから、これまで日々の授業で活用していた授業支援システムを用いたオンライン学習教材の配信を進めた。その際、留意すべきは、必ずしもオンライン学習がプリント学習よりも優れているという訳ではないということであり、カリキュラム・マネジメントの中でそれぞれが適切に運用されるべきと考える。それらの実践の中から生まれたのが、戸田型ハイブリッド学習です。今後の感染拡大だけでなく、インフルエンザや非常災害での休業、不登校支援や長期休業中の家庭学習などでも、オンラインとオフラインの学びを適切に組み合わせ、学習効果の最大化を目指すことが重要であるということを再確認できた。

資料８－１

―学校の新しい生活様式―

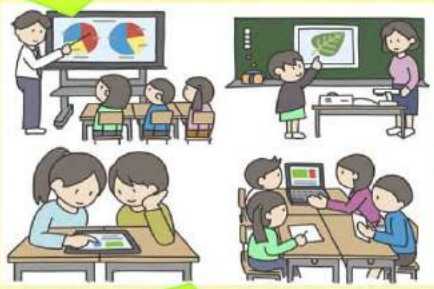
学びを保障・支援するための生活のポイント及び授業の在り方Q&A　Ver.1

『学校の新しい生活様式』（文部科学省）及び学校再開に向けたガイドラインVer.1（埼玉県教育委員会）に基づき作成

コロナ感染症予防のため、日々の生活や授業において様々な悩みや疑問が生じていることと思います。
このリーフレットでは、そんな悩みや疑問の解消に少しでもお役に立てばと思い、作成したものです。ぜひ先生方の授業づくりの参考にしてください。

こんなときどうすればいいの？！

グループ学習やペア学習をさせたいけど・・・。
コロナ感染症が心配だし、何かいい方法はないかしら。



これから暑くなるし、マスクをずっとしていると熱中症も心配だな。
登下校や給食、清掃時等で気を付けることってどんなことがあるのかしら。

授業の中で児童生徒を支援するためにはどんなことをすればいいの？

戸田市教育委員会
学務課・教育政策室
令和２年６月１２日

アイデア集へGO！

学校の新しい生活様式　生活のポイント

～各家庭の理解と協力を得ながら～

感染症対策のポイント

感染源を絶つ行動
◎発熱等の風邪の症状がみられる児童生徒は、自宅で休養（出席停止）
◎家庭と連携した健康観察
◎学校に入る前の検温　等

３つの徹底
◎手洗い
◎咳エチケット（マスクの着用）
◎校舎内・共有物の消毒　等

規則正しい生活
◎十分な睡眠
◎適度な運動
◎バランスの取れた食事　等

市町村立小中学校・義務教育学校版『学校再開に向けたガイドライン～Ver.1～』（令和２年５月２２日　埼玉県教育委員会）より

マスク着用の留意点

次の３つの場合は、マスクをはずしてもよい
① 十分な身体的距離が確保できる場合
② 体育の授業
③ 熱中症などの健康被害が発生する可能性が高いと判断した場合

家庭に確認しておくこと

- 発熱等の風邪の症状がみられる時は登校を控えさせる。
- 登校前に検温、健康観察、同居家族の健康観察を行う。
- 登校後に体調が悪くなった場合には速やかに迎えに来てもらう。
- 規則正しい生活リズムで過ごし、体調を整え、健康管理に努める。
- 感染が疑われる場合には、学校へ速やかに連絡する。

登下校時のポイント

登下校時のマスクは、暑い時期ははずしてもよい。

熱中症も命に関わる危険があるので、熱中症への対応を優先させる。
周囲に人がいない時はマスクを外してもよい。
登下校中も適宜水分補給をする。
歩きながら水分補給を行わない。他の人の通行の妨げにならないよう気をつける。

登下校中、密にならないように気をつける

歩行時は前後の等間隔を保ち、一列で歩行する。
歩行中の不要な会話を控える。
グループごとに下校時刻を設定するなど、校門や昇降口等で密集が起こらないようにする。

登下校後に石けんによる手洗いを徹底する。

手を拭くタオルやハンカチ等の共有はしない。

資料８－２

休み時間のポイント

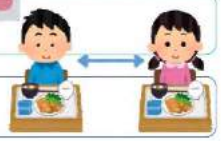
- 廊下や階段での接触や密集を避けるため、右側歩行を徹底する。
- 会話をするときはマスクをつける。
- 必要のない他の教室や他学年のフロアには行かない。
- 休み時間ごとに教室や廊下等の窓を開放し、十分な換気を行う。
  - 熱中症の予防のため、室温に気を付ける。
  - 換気の際に、エアコンを停止しない。
- 外から教室に入るときやトイレの後など、石けんによる手洗いを徹底する。
- ソーシャルディスタンスを保ち、密になるような遊び方をしない。

給食時のポイント

配膳前
- 手洗い場の密集を避けつつ、石けんによる手洗い、マスクの着用を徹底する。（班ごとに手洗い場に行くなど）
- 配膳室が密にならないように入室人数を制限するなどの工夫を行う。（児童生徒が間隔をあけて並ぶために立ち位置をマーキングするなど）

配膳
- マスクを着用した児童生徒が担当する食品を限定して配る。
- おかわりについては、教員または担当した児童生徒が配る。

食事中
- 対面にならないように指導を徹底する。
- 可能な限り会話を控えるよう指導する。



片付け
- 食器等は密にならないように各個人で片づける。

清掃時のポイント

- 清掃場所は必要最低限とし、特に体調不良者が使用したトイレや部屋、密閉となる場所は清掃しない。
- マスクを着用し、必要最低限の指示以外の発言はしないで取り組ませる。
- 可能な範囲で教室等の入り口や窓を開けて行う。
- 終了後は、石けんによる手洗いをさせる。
- 清掃は短時間で終了できるように工夫する。

手洗いの６つのタイミング

学校の新しい生活様式　授業のアイデア集

児童生徒の意見を確認したいけど、一度に大勢が発言するのは避けたい。

そんなときは・・・

例えば、ハンドサインや意思表示カードなどを使うと･･･！
児童生徒の達成状況や賛成・反対などを集約するのに有効です。「用意したカードの色」、「グーチョキパー」などで選択肢を提示できますね。

子供たちに話合いをさせたいのだけれども、どうしても一人一人の距離が密になってしまう･･･。

そんなときは・・・

例えば、Jamboard（G-suite）を活用すると･･･。
Jamboardに、自分の考えを記入し、友達と考えを練り上げることが可能です。
Jamboardには写真を貼ることも可能なので、写真を貼り付けてそれにコメントを書いて説明することもできますよ。

他にもオンライン（Classroom、meetなど）を活用しましょう。
児童生徒への個別対応が可能です。

付箋を活用し、自分の考えを書き、それを班で回して読むことで友達の様々な考えに気付くことができ、対面で友達と交流するのと同じ効果が期待できます。

児童生徒の近くを回りながら机間指導したり、全体で考えを広げたり、深めたりしたいけど、そのときにどんな方法があるのかな。

そんなときは・・・

例えばロイロ・ノートを活用すると･･･
ロイロ・ノートで一人一人の端末の課題の様子を確認し、コメントを送信して、児童生徒の活動を意味付けたり、価値付けたりすることが可能です。

Chat機能を活用してみると･･･
対話的な活動の最中にChatで教師からのコメントを送信し、児童生徒の活動を意味付けたり、価値付けたりすることが可能です。また、全体で意見を出し合う際には、Chatを活用し、児童生徒の考えを板書で整理していくことも考えられます。

机間指導には指示棒を使用するなど、顔を近づけなくてもよい工夫をしましょう。
その場での対応が難しい場合でも振り返りのワークシートに質問ができるようにしたり、学習状況が把握できるようにしましょう。

資料８－３

児童生徒を集めて、技法の説明をしたいんだけど、どうしても児童生徒同士がいっぺんに集まってしまうな…。

そんなときは・・・

ICTを活用してみると、
- Classroomやmeetのオンライン上で実演や実技を行う。
- 実物投影機を使用して提示する。
- 関連動画を用意し大型モニターに提示する。
- PC内に関連動画を用意し、自由に視聴しながら制作や活動ができるようにする。

例えば、右のような例が考えられます。

●事前に動画で技法を撮影しておく。
観察の仕方や、ミシンでの製作の手順等を事前に動画で撮影しておき、それを流すことで示範しましょう。音楽において楽器の演奏の仕方のポイントを流し、全体でポイントを確認し、練習や演奏を家庭で行うことも考えられます。

教室で密を避けようとすると、児童生徒がずっと座ったままの学習になってしまいそうで心配だな…。

そんなときは・・・

教室を出てみると、
それぞれの場所で調査をしたり、情報を集めたりする活動を設定することで、より活動的で直感的な学習活動を行うことが可能です。

ロイロ・ノートを活用して、そこで得た情報を共有したり、写真を撮って貼り付けたりして共有する。また、meetを活用してそれぞれの場所の様子を映しながら、その場所で自分が感じたことや考えたことを話すことも考えられます。

例えば、左のような例が考えられます。

－おわりに－

社会全体が、長期間にわたり、新型コロナウイルス感染症とともに生きていかなければならない状況のなかで、感染症対策と子供たちの健やかな学びの保障と両立が求められています。感染症対策を講じつつ、学校教育が協働的な学びの中で行われる特質をもつことに鑑み、学校教育ならではの学びを大事にしながら教育活動を進め、新学習指導要領の目指す学びを着実に実現していきましょう。

薄れてしまった「心の絆」、冷めてしまった「心の温度」を上げるために・・・

「特別な教科　道徳」

○下のような関連した内容項目の授業を重点的に行う。

《小学校》
A-(5)希望と勇気、努力と強い意志　B-(10)友情、信頼
C-(13)公正、公平、社会正義　C-(15)家族愛、家庭生活の充実
C-(16)よりよい学校生活、集団生活の充実　D-(19)生命の尊さ

《中学校》
A-(4)希望と勇気、努力と強い意志　B-(8)友情、信頼
C-(11)公正、公平、社会正義　C-(14)家族愛、家庭生活の充実
C-(15)よりよい学校生活、集団生活の充実　D-(19)生命の尊さ

「特別活動」

○学級活動(2)イ　よりよい人間関係の形成
（題材例）
・「友だちのよさを見つけよう」
・「イヤな言葉、うれしい言葉」
・学級会の充実
（望ましい学級や人間関係の構築に向けた話合い）

その他にも・・・

- 全児童生徒へのアンケートを生かした教育相談の実施
- いじめを起こさせない生徒指導の充実

学習活動の重点化について

【年度当初に編成した教育課程を見直すことが必要な場合の基本的な考え】
学習の効果を最大化できるカリキュラム・マネジメント
学校の授業で行う学習活動を、教師と児童生徒のかかわり合いや児童生徒同士のかかわり合いが特に重要な学習への動機づけや協働学習、学校でしか実施できない実習等に重点化し、個人でも実施可能な学習活動の一部をICT等の活用して授業以外の場で行う。

学校で取り扱うことが望ましい学習活動例

- □様々な事象から、問題を見いだし、解決への見通しをもつ活動（学びの動機付け）
- □互いの意見を交流させたり、話し合ったりすること等、対話的な学び
- □互いの考えを伝え合い、自分の考えや集団の考えを発展させていく学び
- □具体物の操作や、観察・実験などを通じて、理解を深めること

学校の授業以外の場で取り扱うことが考えられる学習活動例

- □学習したことを基に、考えたことや、伝えたいこと等をまとめる活動
- □問題を解決するために必要な情報を、本やWebサイト、身の回りにある自然の事物等から集める活動
- □単元末の問題演習に取り組む
- □発展的な学習の一部に取り組む

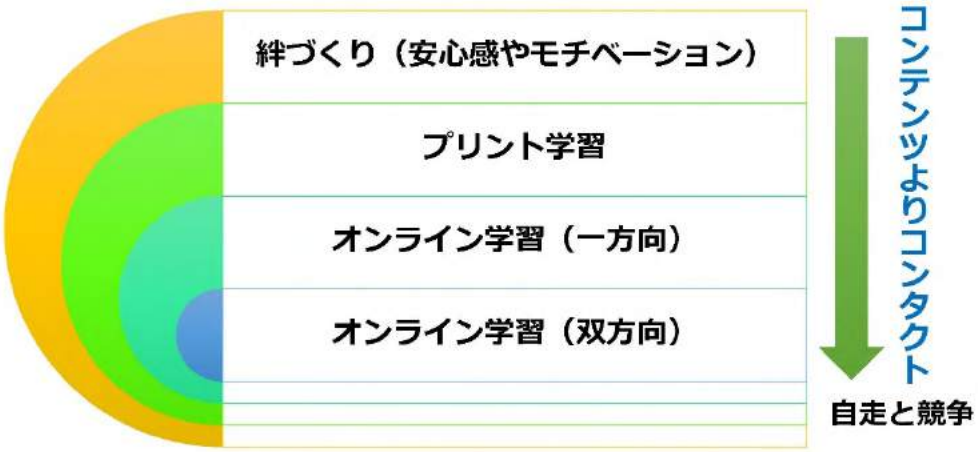
【R02.6.5 文部科学省学校の授業における学習活動の重点化に係る留意事項等について（通知）】をもとに教育政策室が作成

資料９－１

新型コロナウィルスによる長期休業中の取組

目指す学び

子供の「学びの連続性を保障する」ために



◆4月　臨時校長会議にて

コンテンツよりコンタクト

これだけ休業が長期化している中、せめて先生と子供の絆をつくるために可能な範囲でよいので、学校から子供たちへ発信をしてほしい。まずは、動画を１本でもよいからコンタクトをとってほしい。

4/28改正著作権法施行
結果

平均260本の動画を各校が配信（２か月間）

多いところでは約500本の動画を配信した学校もあった。
さらに、オンラインによる同期型（リアルタイム）のコミュニケーションや非同期の課題配信・回収を始める学校など、市内各校による自走と競争、そして創造につながっていった。

資料９－２

◆戸田市におけるオンライン学習

学校・先生を知る動画

オンライン朝の会（双方向）

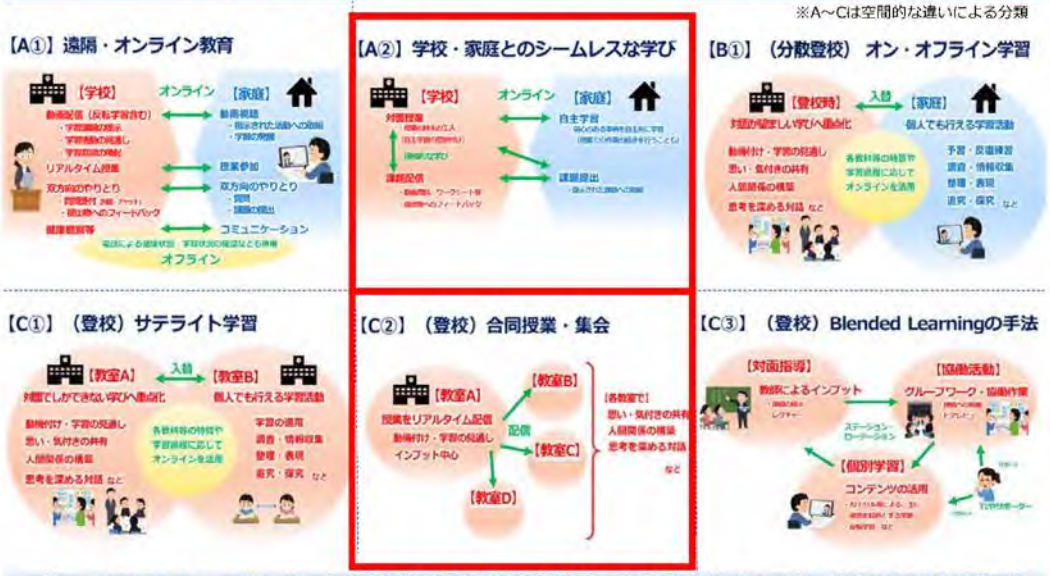
未習内容の補助動画

リアルタイム授業配信（双方向）

～学校の新しい生活様式における「新しい学びの様式」～

戸田型ハイブリッド学習　ver.2

※A～Cは空間的な違いによる分類



オン・オフライン、同期・非同期の学びを適時適切に組合せ、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す

【オンライン】家庭との接続を視野に入れたWeb会議システムや学習支援システムの活用
【オフライン】従前の学習指導において行ってきたもののうちオンラインではないもの
【同　　期】同時に、一斉に、同じ場所・時間でなければならない活動
【非　同　期】異時に、ばらばらに、異なる場所・時間でもできる活動

資料９－３

～学校の新しい生活様式における「新しい学びの様式」～

戸田型ハイブリッド学習　ver.2

【C②（登校）合同授業・集会】

効果　指導力に優れた教師が授業配信を行うことで、効果的に児童の興味関心を高めたり、全体指導を行ったりすることができる。また、各教室においては、きめ細やかな見取りと指導ができる。副次的な効果として、各教室の教師にとっては、優れた教師の指導を通した教員研修にもつながる。

【 授業イメージ 】
（小学校算数を例に）
・教師の働きかけ

各教室における教師は、対面だからこそ得られる多くの情報をもとに、多様な児童生徒の学習状況をキャッチ（評価）し、適切にレスポンス（支援）を行うこと、つまり「教育的タクト」と「ジレンマ・マネージング」で学びを確かなものにする。児童生徒は、学習への適度な緊張感やモチベーションの維持につながるとともに、タイムリーにサポートを受けることができる。

～学校の新しい生活様式における「新しい学びの様式」～

戸田型ハイブリッド学習　ver.2

【A② 学校・家庭とのシームレスな学び】

Case 1　宿　題

配信等 → 学習 → 提出 → 回収・添削 → 配信等

家庭学習の課題を配信し、オンラインで課題が提出される。
提出物にはコメントを入れて返却することも可能。
ex）日記、デジタルドリル、音読の録画提出、新聞づくり

Case 2　反転学習

配信等 → 学習 → 対面授業

翌日の授業等の予習内容をデジタルコンテンツにより学習し、翌日の授業に臨む。
ex）翌日の学習の見通しにつながる、前提知識や技能の確認

Case 3　発展学習

対面授業 → 発展学習

学校の授業内容の追究や作業の継続を、児童生徒が自主的に行う場合や発展学習を家庭学習として課す場合など。
ex）調べ学習、発表資料の加除修正や推敲、プログラミング

ICTによる学習者視点の「学びと愛用」のためには、GIGA端末を鉛筆やノートと同等以上の文具的活用を行うことが必要。また、個別最適な学びの実現のためには自立的・自律的学習者の育成が求められる。

Ⅱ　実践校における取組

1　実践校における取組①　学校名　戸田市立戸田第二小学校

2　学校や地域の実態、特色について

(1)学校や地域の実態について

本年度創立６９年目、児童数１００６名、通常学級２９、特別支援学級４合計３３学級の過大規模校である。戸田市の南部に位置し、学区の南側を菖蒲川、荒川が流れ東京に接している。学区の西側には国道１７号線、ＪＲ埼京線が通る立地である。道幅が狭かったり、バス通りなど交通量が多かったりする道路が多く、交通安全や防犯面では懸念することが多い。近年は、道路やマンション等集合住宅の居住者が増加し、児童数が多い状態が続いている。学区外ではあるが、大型のショッピングセンターや戸田公園駅、川口駅があり、生活の利便性には恵まれているといえる。

学校周辺には自然が少ないが、校内には、校章の元になっている黄菖蒲やクヌギやケヤキなどの植物やビオトープがあり、安らぎを与える環境となっている。また、学区内には、公園が点在しており、地域の憩いの場となっている。

(2)学校や地域の特色について

学校や地域の特色についてSWOT分析を行った。学校を取り巻く環境(市、学校、教職員、児童、家庭・地域等からその強み（特色）について以下にまとめる。

【学校教育目標】	心豊かに　２１世紀を　たくましく　生き抜く　子
かしこく	よく考えすすんで学ぶ子
なかよく	他を思いやり、誰とでもなかよくできる子
たくましく	すすんで体をきたえる子

〇戸田市

・新しい学びに対する環境が整っており、様々な教育実践にチャレンジできる。

・GIGAスクール構想において、一人一台端末の環境を整えている。

・PBLやSTEAM教育、産官学民との連携など、教育委員会を中心に先進的な研究に取り組んでいる。

・市内では、ICTを利活用した授業実践が多く行われており、様々な研修会において学ぶことができる。

〇学校
・A（校内研究）、B（生徒指導等）、C（健康教育等）に分かれたプロジェクト会議を実施しており、幅広くバランスのとれた校務分掌の運営ができている。（令和元年度　全国健康づくり推進学校　優良校に選出）
・自校給食を行っており、毎日おいしい給食を食べることができる。
・校庭が広く、１０００人規模の児童数であっても狭さを感じない。
・新校舎は、オープンスペースがあり、開放的で明るい。
・校庭の周りには、様々な種類の木々があり、自然豊かである。校内にはビオトープもあり、環境学習に生かすことができる。
〇教職員
・若手の教職員が多く、全教職員で教育活動に真摯に取り組んでおり、先進的な研究を推進している。
・ICT の活用に長けている教職員が多く、ICT を利活用した授業を日常的に行っている。
〇児童
・過大規模校のため、毎年のクラス替えにより学級のメンバーが大幅に入れ替わる。そのため、児童にとっては様々な人間関係を学ぶよい機会となっている。
・規律正しく、前向きに学習に取り組む児童が多い。
〇家庭・地域等
・核家族、共働き家庭が多いが、マンション等における地域コミュニティが確立している。
・教育への関心が高い家庭が多い。学校評価アンケートの回答率は 100%であった。
・様々な教育活動において、連携・協力できる関係性にある。
・学校応援コーディネーター、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の活動が機能しており、学校における強力な支援者となっている。

3　カリキュラム・マネジメントにおいて育みたい資質・能力について

本校では、学校課題研究における研究主題を「つむぐ」とし、児童の資質・能力の育成を目指し、教育課程の編成、実施、評価の PDCA サイクルを行いながら、協働的に学び合う児童の育成を図っている。特に問題発見力、学ぶ主体性、論理力、創造性を育むことに焦点を当て、生活科・総合的な学習の時間を基軸とした教科等横断的な学びを行うことで主体的・対話的で深い学

びとなるよう教職員で研究を重ねている。また資料１のとおり、授業力向上プランを示し、日々の授業改善を図っている。

資料１　授業力向上プラン

4　カリキュラム・マネジメントの実際について

カリキュラム・マネジメントの視点としては、文部科学省において３つの側面があると提唱されている。１つめは、教科等横断的な視点、２つめは、エビデンスに基づいた PDCA サイクルの確立、３つめは外部資源（教育活動に必要な人的・物的資源）の活用である。これを受け、本校では、カリキュラム・マネジメントを推進するにあたり、３つの視点を取り入れて追究してきた。３つの視点は、以下のとおりである。

（１）産官学民と連携した PBL
（２）PDCA サイクルによる教育活動の工夫・改善
（３）教科の壁を超えた資質・能力の育成

（１）から（３）の具体的な取組について以下に示す。

(1)産官学民と連携した PBL

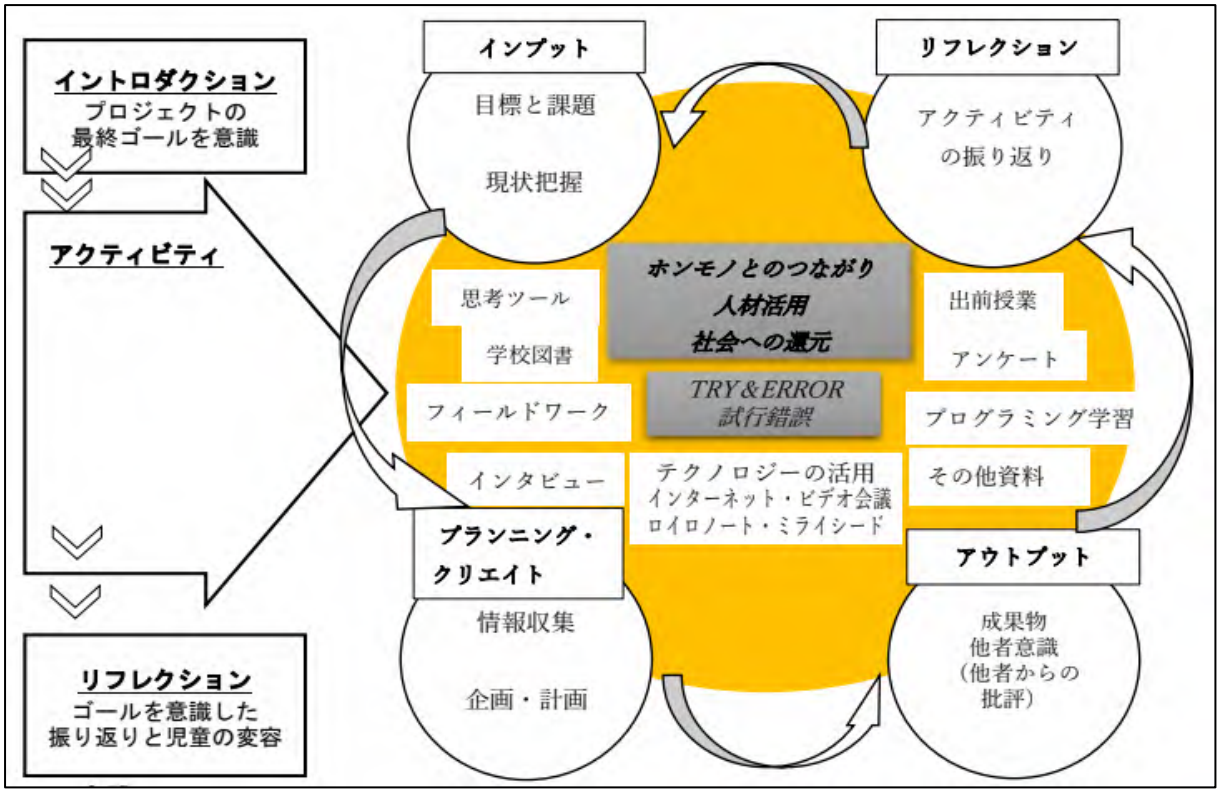
ア　PBL の研究について

本校では、学習に対する問題発見力、論理力、学ぶ主体性をもとに創造性を育むことを主眼に研究を進めている。創造性を育むために、PBL を基盤として資質能力の向上に取り組んできた。PBL とは、P : Project、B : Based、L : Learning の頭文字をとったものである。PBL は、1990 年代初頭にアメリカの教育学者ジョン・デューイが唱えた学習方法である。PBL を取り入れた授業では、正解がない問いについて、自ら仮説を立て、調査し、検証するということを繰り返していく。教員が教壇に立って板書し、児童がそれをノートに写すという従来の授業とは大きく異なり、児童が自ら課題を見つけ、その課題を解決するまでの過程でさまざまな知識を習得していくという学習方法である。

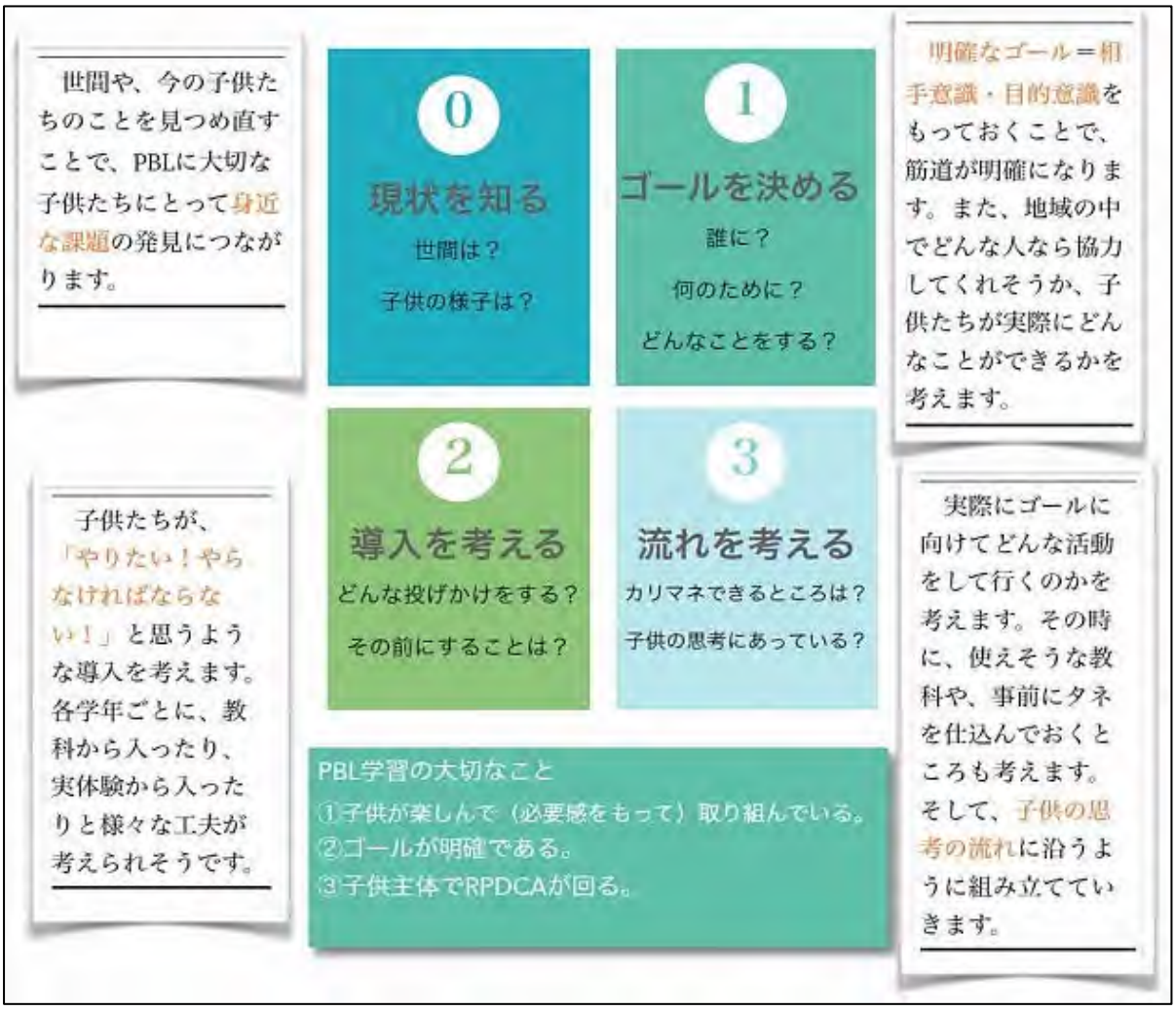
今年度は、コロナ禍という状況の中で PBL をどのように進めていけばよいかを重点に追究してきた。

まず、PBL のスタンダードな学習過程を共通理解した。（資料２）イントロダクション、アクティビティ、リフレクションの流れをベースにして、児童の資質・能力を育むスタイルを確立した。その中で「ホンモノとのつながり」や「TRY＆Error」のある学習計画を生み出してきた。フィールドワークや出前授業を活用して、児童らが主体的・対話的で深い学びとなるよう工夫、改善をしてきた。また、児童らがどのように学んでいくのか、その学習過程における PBL の基本的な考え方を示した。（資料３）

資料２　PBL のスタンダード

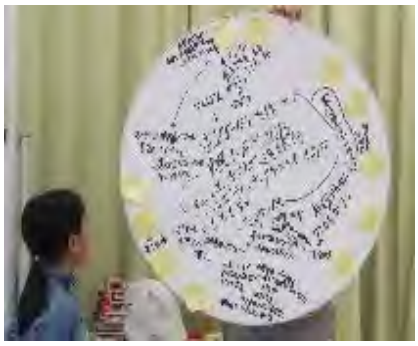


資料３　PBL の考え方



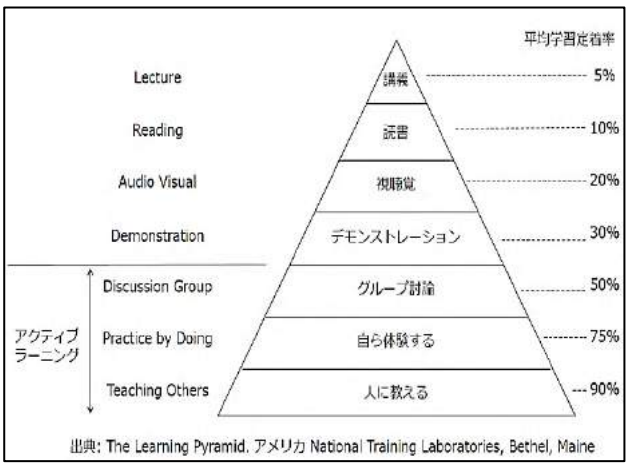
イ　出前授業の有効活用

カリキュラム・マネジメントを実現するためには、教育活動に必要な人的・物的資源等を活用しながら効果的に学習過程へ組み合わせていくことが重要となる。総合的な学習の時間を進めるにあたって、外部の人的・物的資源を十分に活用できるよう計画を立てた。



第４学年の実践では、身近な環境問題を扱った。環境に関するプロフェッショナルを活用して児童らの学びに向かう主体性や論理力、創造性について、資質・能力の向上を図った。具体的には、産官学民における環境に関する出前講座を実施した。出前講座を実施することで、環境問題への知識の幅が広がったり、深まったりして児童らの学びが充実すると考えたからである。出前講座を実施することは、メリットは大きいが、デメリットも存在する。デメリットとしては、講師の方々の話を聞いたり、ワークシートに書き込んだりするだけの受動的な学びになってしまうことである。講義形式や視聴覚資料に頼った学び方は平均学習定着率が低いことがアメリカ国立訓練研究所（NTL）提唱のラーニング・ピラミッド（資料４）でも指摘されている。そこで出前講座を能動的な学び方に変革するための取組を行った。出前講座を受動的に受けるだけではなく、育成したい資質・能力に合わせ、グループ討議、体験する活動、表現して伝え合う時間を取り入れるようにした。具体的な変革内容と育成したい資質・能力は、資料５に示すとおりである。

資料４　ラーニング・ピラミッド



資料５　出前講座における学び方改革

出前講座の内容 （連携した産官学民）	○学習方法 ・学び方改革の内容 （特に育成したい資質・能力）
エコドライブや現代のエコカーの特徴について講義を受ける。 （自動車メーカー）	○グループ討議、表現 ・学んだ内容を生かして、未来のエコ自動車を絵で表現する。完成した絵は説明もつけて、自動車メーカーに提案する。**（創造性、論理力）**
戸田ヶ原の再生活動に向けて戸田市が取り組んでいる環境保全活動についての講義を受ける。 （戸田市役所みどり公園課）	○グループ討議、表現 ・戸田ヶ原の再生に向けて戸田市民に環境保全を促すようなキャッチフレーズを作成する。**（創造性）**
ゼロエネルギーハウス、住宅建材のリサイクルなどメーカーの環境保全の取組についての講義を受ける。（住宅メーカー）	○グループ討議、表現 ・学んだ内容を生かして未来のエコな住宅を絵で表現する。完成した絵は住宅メーカーに提案する。**（創造性）**
エコクッキングを通してフードロスを減らすための取組について講義を受ける。 （ガス会社）	○体験活動、表現 ・学んだエコクッキングの方法を生かして、家庭でも実践する。実践したレシピをスーパーにおかせてもらい、広く紹介する。**（主体性、創造性）**

(2)PDCA サイクルによる教育活動の工夫・改善

時代や児童の実態に合ったカリキュラムをデザインしていくためには、PDCA サイクルによる教育活動をすることが重要となる。本校においても PDCA サイクルにより教育活動をブラッシュアップし、よりよい実践になるよう日々工夫・改善を行っている。

ア　Ｔ２Ｎｅｗ　Ｎｏｒｍａｌの作成

本校では、コロナ禍における教育活動を国や県が示すガイドラインに合わせて見直した。With コロナにおける学校現場は、子供の健康・安全を守るため、教育活動に制限がある。しかし、新学習指導要領の実施とともに、

主体的・対話的な学びの充実が求められている。抜本的な「変化」と「改革」を求められる年である。

そこで、コロナ禍をポジティブに受け取り、この事態を機に本校の「New Normal」を追究するのはどうかと考えた。「T2 New Normal」では、With コロナにおける授業ツールを提案し、子供の学びを保障・支援するとともに、教師の授業力向上を目指すことができると考えている。

T2 New Normal では、ICT を活用したツールと実践事例を紹介した。特に今年度はコロナ禍ということもあり、以下の 2 点を中心に紹介したり、基準を明確にしたりした。

①オンライン授業の提案（戸田型ハイブリッド授業）

タイプ A　遠隔・オンライン授業（Google meet や zoom を活用した授業）
・主催者、学年間をオンラインでつなぐ合同授業（集会等）
タイプ B　学校・家庭がつながるシームレスな学び
・Google classroom を活用した課題提示と提出
タイプ C　オンラインとオフラインを組み合わせた学び
・Google classroom を活用した課題提示と提出

②話し合い活動における実施基準の明確化と具体例

①オンライン授業の提案について

オンライン授業により、授業者・主催者が遠隔地であっても時間、空間、距離の制約なしでつながることができ、教育効果も高かった。以下、本校で行われた実践事例である。

実践事例 1 （A、B、C 複合型）

家庭科調理実習における zoom の活用（ 5 年 ・ 6 年）

zoom を使って、家庭科室と教室をつなぎ、調理実習を行った。ご飯の炊き方やみそ汁のつくり方について zoom を通して指導した。説明が中心となったが、できあがったご飯やみそ汁を家庭科室で実際に見る、匂いを嗅ぐ、試食するなどの学習活動も取り入れた。後日、児童らは家庭での実践を行い、学びを深めることができた。

実践事例２（A）

英語学習における zoom の活用
Zoom による国際交流会を実施。ニュージーランドの小学校の子供たちと互いの国について発表し合ったり、質問し合ったりして交流を深めた。自分の伝えたいことをじっくり考えたり、笑顔や身振り手振りなどの大切さを実感したりすることができた。

実践事例３（A）

Google meet を活用したオンライン学級懇談会
オンライン会議システムである Google meet を活用して学級懇談会を実施した。各クラスがもつ会議コードから meet に参加してもらった。オンラインで保護者とつながることができ、学校での教育活動について情報共有を行うことができた。また meet の機能である「画面共有」を行うことで、懇談会の資料等を提示したり、事前に作成した動画等を流したりすることもできた。

実践事例４（A）

Google meet を活用した Teacher’s View によるオンライン授業参観
オンライン会議システムである Google meet を活用して Teacher’s View によるオンライン授業参観を実施した。学校では Chromebook３台を前方に配置した。保護者は各クラスの会議コードから入って参観した。子供の学習の様子が分かるカメラを選択して見ることができ、効果的であった。また３台のうち１台は「Teacher’s View」とし、教師側から児童の学習活動、発言等に合わせて移動させるなどした。

実践事例５（A,B,C 複合型）

学級活動３「楽しもう自主学習」における zoom の活用
Zoom を使って、全クラス同時に授業を行った。授業の展開は、メインの教員が行い、意見を出し合う場面では各学級担任が進行をした。その後、クラスで出た意見をオンラインで情報共有した。最後は意思決定を行い、各自の自主学習につなげている。 Google classroom により、自主学習の課題を出すなどして児童らが課題を選択して取り組むことができるようにしている。自主学習については、自主学習ノートを使って行うこととし、ノートに学びをアウトプットするようにしている。

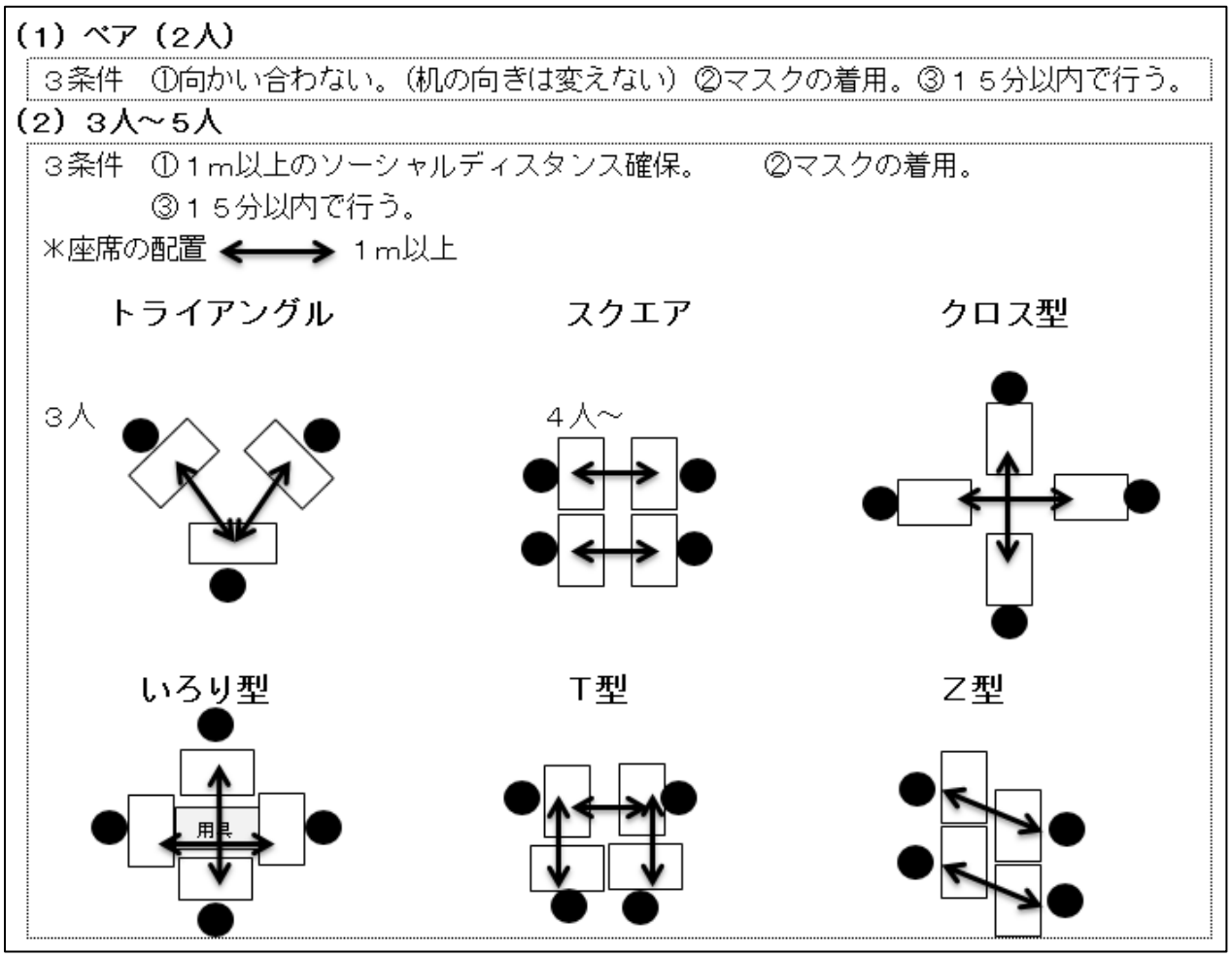
実践事例６（A）

ZOOM によるオンライン読み聞かせ
ZOOM を使ってオンライン読み聞かせを行った。自宅と教室を ZOOM でつないだ。読み聞かせをする方にとっては、自宅でできるオンライン読み聞かせは好評であった。ZOOM の場合は、「スピーカービュー」を選択することにより、画面共有をする操作が省けて手軽に利用できた。また、ビデオの設定にある「ミラーリング」のチェックを外すことで、文字や絵が左右反転せずに見ることができた。

②話し合い活動における実施基準の明確化と具体例について

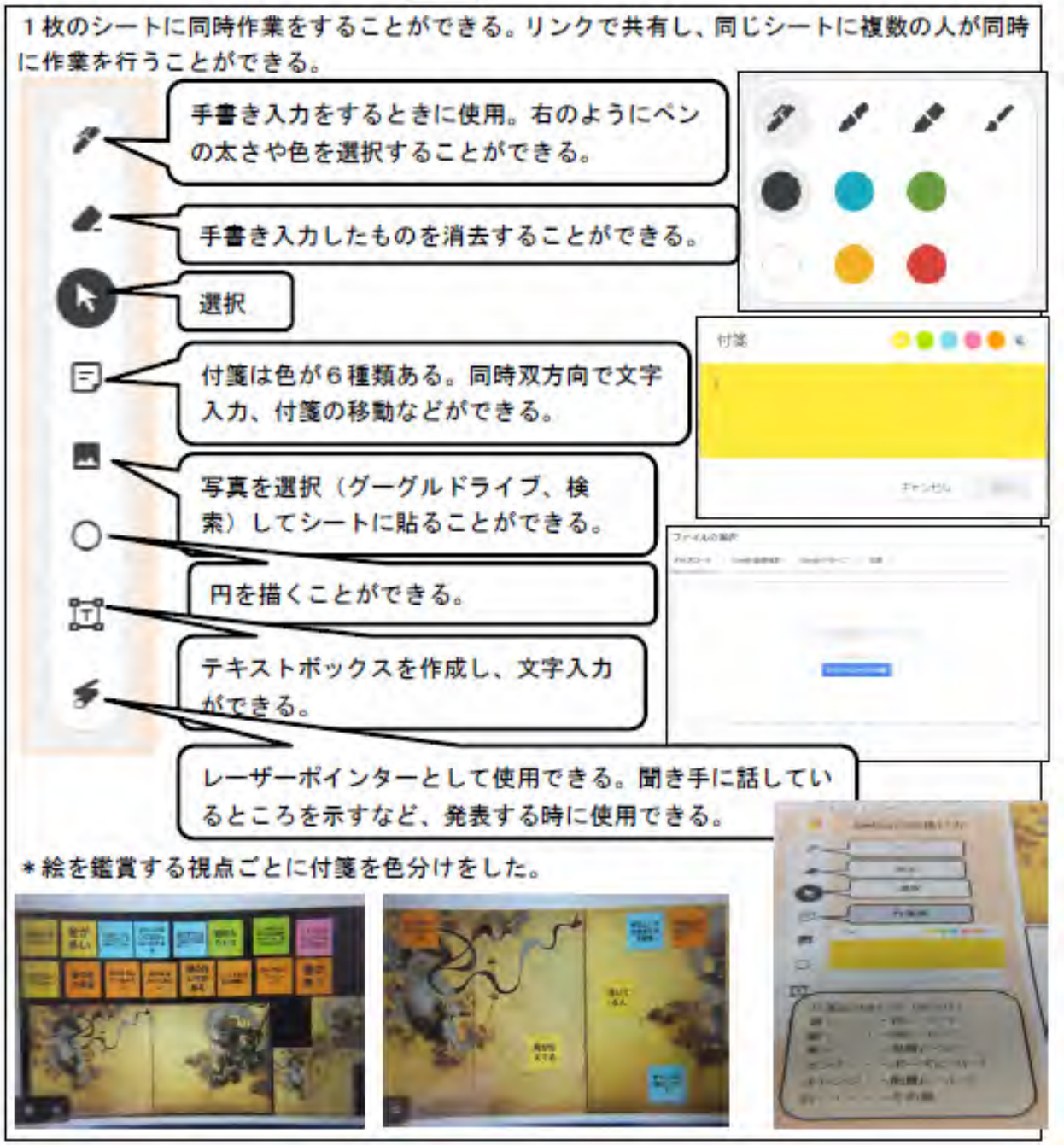
コロナ禍における話し合い活動は、３密（密集・密閉・密接）を避ける工夫が必要である。県や市が示すガイドラインに則り、本校でも規準を定めることとした。T２New Normal では、3 密とならないよう机の配置や話し合う時間（15 分間）を明確に定め、資料６のように示した。

資料６　ペア・グループ学習におけるガイドライン



話し合い活動は、ペアやグループで話をすることで成立するが、G-suite のアプリである JamBoard を活用して効率よく、効果的に話合いが進むように授業改善を行った。JamBoard は、1 枚のシートで様々な意見をリアルタイムで共有したり、同時に複数で作業ができたりとメリットが大きい。T2New Normal の中でも実践事例を紹介し、活用を推進した。資料 7 では、Jam Board の使い方と図工での実践事例を紹介する。

資料 7　Jam Board の活用

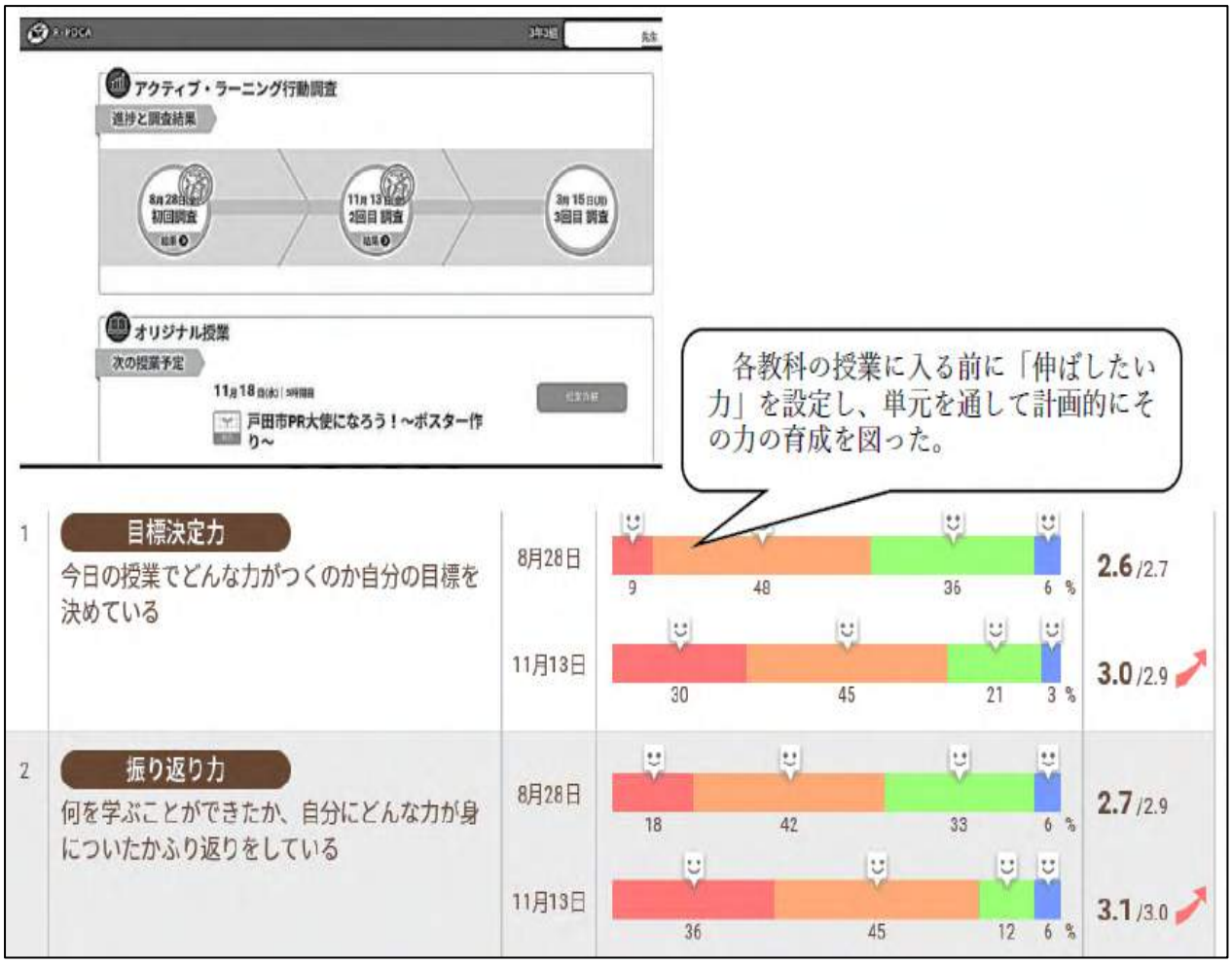


イ　企業と連携した R-PDCA 授業の実践

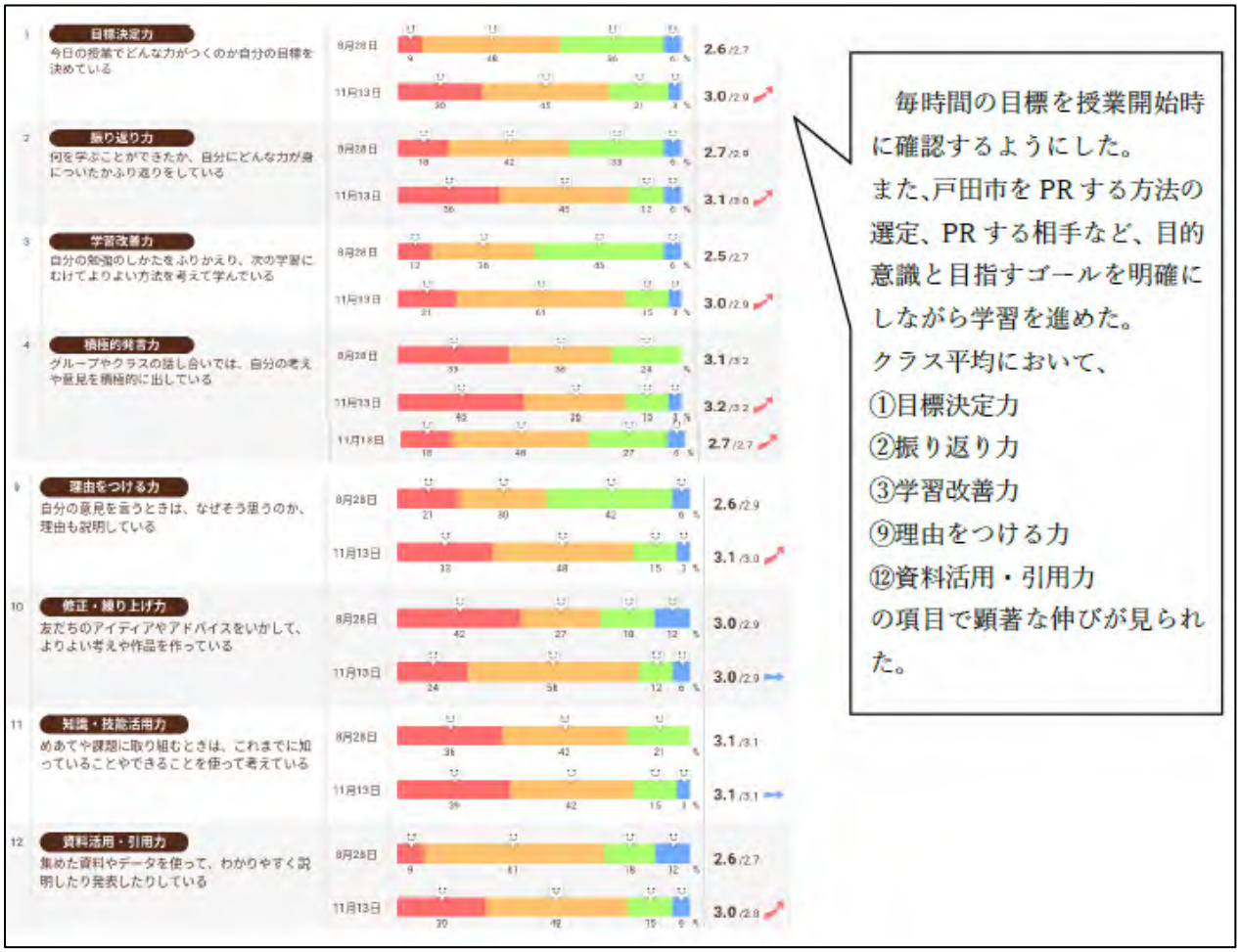
ベネッセコーポレーションと連携し、R-PDCA サイクルの授業を実践した。ベネッセが提供するミライシード内にある「R－PDCA」を用いて、振り返りアンケートを行った。アンケートでは、その日の授業内容に即したアンケートを設定したり、最もあてはまる資質・能力に関する質問（選択・記述）を組み込んだりして実施した。

R-PDCA の授業実践により、毎時間の授業のふり返りを記述や数値評価で確認することができ、児童が資質・能力を身につけているかどうかを把握することができるようになった。資料８・９は、３年生の実践である。３年生では、単元において、目標決定力、振り返り力の資質・能力の設定を行った。授業が進むにつれて児童の資質・能力の伸びを考察したり、個々への支援につなげたりして、個別最適な学びとして有効活用することができた。

資料８　R-PDCA 授業の実際



資料９　R-PDCA 授業による児童の変容

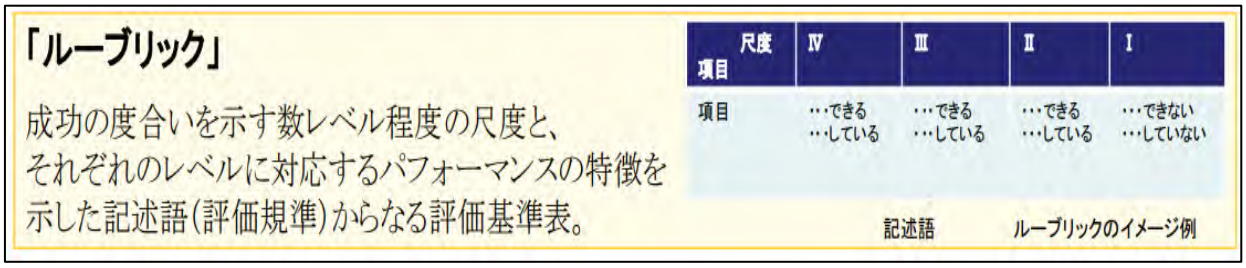


ウ　ルーブリック評価

本校では、学習に対する問題発見力、学ぶ主体性、論理力をもとに、創造性を育むことを主眼に研究を進めている。４つの資質・能力の育成をするために、本校独自のルーブリックを作成している。また、ルーブリックを作成するだけでは、実用的な運用ができていなかったり、学校で統一感のない取組になってしまったりというデメリットが出てくる可能性がある。それを解消するため、ルーブリックの具体的な運用について考え、研究を進めてきた。

「ルーブリック」とは、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表のことである。（資料１０）

資料１０　文部科学省が示すルーブリックの定義



文部科学省「平成 28 年 1 月 18 日総 則・評価特別部会資料 6 － 2 学習評価に関する資料」より

「ルーブリック」の一般的な特徴等としては、①目標に準拠した評価のための基準作りに資するものである、②パフォーマンス評価を通じて思考力、判断力、表現力等を評価することに適している、③達成水準が明確化され、複数の評価者による評価の標準化がはかられる、④教える側（評価者）と学習者（被評価者）の間で共有される⑤学習者の最終的な到達度だけでなく、現時点での到達度、伸びを測ることができる、ということがメリットとしてあげられる。

本校では、ルーブリックを作成、運用する中で、以下のような成果と課題が出てきた。

【成果】
・児童たち自身も、単元を通して身に付けたい力を意識して学習することができる。
・単元途中や単元終了時に、自分が今どの位置にいるのかを視覚的にもメタ認知させることができる。
・振り返りの際も、観点が明確になるため、振り返りがしやすい。
・グループでの話し合いの際に、理由付けや話し方のポイントを意識して学習できる。
・児童が単元の見通しをもって学習に臨むことができる。
・教師の直感ではなく、明確な基準に基づいた評価を行うことができる。
・複数の教師で評価規準を共有することで、妥当性・信頼性の高い評価ができる。

また課題解決のため（ア）、（イ）のように取組を充実させ（→以降が本年度の取組）、実践的な運用をしてきた。

【課題】
・どのタイミングで**ルーブリックを提示**するか。導入の１時間目が理想だが、ルーブリック表によっては、**完全に先の内容が見えすぎてしまう**ことも考えられる。
→汎用性のある文言でルーブリックを作成し、どの教科でも使用できるようにする。
児童が自ら考えて振り返りをすることができるような振り返りシートの作成。
（ア）汎用的なルーブリックの作成
・本当に児童の**自然な形で資質・能力を身に付けていくことができているのか**。ルーブリックに書いてあるからそれを目指すだけとなってはいけない。
→どの教科でも活用できるルーブリックの作成。また授業における課題とリンクするように黒板掲示し、日常的にルーブリックを意識できるようにする。
・**低学年**だと**自分で振り返ることができない**子もいる。
(自己評価の積み重ねの課題)　（イ）振り返りシートの工夫

（ア）汎用的なルーブリック「戸二っ子ルーブリック」の作成

ルーブリックは、以下のようにレベル１から５までのステップとし、各ブロックで明確に表記した。育てたい資質・能力のレベルを３段階とし、真ん中のレベルをブロックの到達目標とした。

育てたい資質・能力	低学年	中学年	高学年
創造性 論理力 問題発見力 学ぶ主体性	レベル３	レベル４	レベル５
	レベル２	レベル３	レベル４
	レベル１	レベル２	レベル３

資料１１のようにルーブリックを示し、児童等が明確な指標のもと、振り返りをすることができた。

資料１１　戸二っ子ルーブリック

本校が目指す最高学年の資質・能力

	低学年	中学年	高学年
上位項目	○いろいろな意見をつなげて考えている。(同じ学習の中で)	○学んだことや分かったことを今までの学習、他の教科などとかかわらせて考えている。	○今までに学習したことを結びつけて整理し、課題に対して新しい(または2つ以上の)考え方を見つけている。
創造性	○自分の意見と友だちの意見を比べて考えている。	○いろいろな意見をつなげて考えている。(同じ学習の中で)	○学んだことや分かったことを今までの学習、他の教科などとかかわらせて考えている。
下位項目	○自分の意見をもっている。	○自分の意見と友だちの意見を比べて考えている。	○いろいろな意見をつなげて考えている。(同じ学習の中で)
	○自分自身や身近な人々の特徴やよさに気が付き、授業で大切なことに気が付いている。	○地域における課題に問題意識を持ち、問いを持ちながら探究的に学習を進めている。	○国内外における課題に問題意識を持ち、課題の解決に必要な知識や技能を身に付け、連続的に問いを持ちながら探求的に学習を進めている。
問題発見力	○自分自身の特徴やよさに気が付き、学習で大切なことに気が付いている。	○自分自身や身近な環境における課題に問題意識を持ち、問いを持ちながら探究的に学習を進めている。	○地域における課題に問題意識を持ち、問いを持ちながら探究的に学習を進めている。
	○学習で大切なことに気が付いている。	○自分自身や身近な環境の特徴やよさに気が付き、身近な人と協働して、授業で大切なことを身に付けている。	○自分自身や身近な環境における課題に問題意識を持ち、問いを持ちながら探究的に学習を進めている。
論理力 ＊具体的な活動の例	○順序だてて自分の意見を表している。 ＊「順序だてて」:「まず」「次に」「最後に」といった言葉を使って話したり書いたりすること。	○相手(だれに)や目的(何のために)を考え、聞き手によく伝わる方法で表現している。 ＊「聞き手によく伝わる方法」:「わかりましたか？」、「質問はありますか？」など、聞き手の理解を確認しながら話すこと。図や絵、表などを効果的に使い、わかりやすくまとめること、など。	○自分の考えと比較(比べる)・関連(つなげる)させながら表現することができた。 ○相手意識(だれに)や目的意識(何のために)をもち、理由を明確にして表現することができた。 ○「わかりましたか？」、「質問はありますか？」など、聞き手の理解を確認しながらわかりやすく話すことができた。
	○理由をつけて表している。 ＊「理由をつけて」:「～です、～だからです」と理由をつけて話したり書いたりすること。	○順序だてて自分の意見を表している。 ＊「順序だてて」:「まず」「次に」「最後に」といった言葉を使って話したり書いたりすること。	○相手(だれに)や目的(何のために)を考え、聞き手によく伝わる方法で表している。 ＊「聞き手によく伝わる方法」:「わかりましたか？」、「質問はありますか？」など、聞き手の理解を確認しながら話すこと。図や絵、表などを効果的に使い、わかりやすくまとめること、など。
	○自分の意見を表している。 ＊「表す」:話す、書く、選ぶ、などをすること。	○理由をつけて表している。 ＊「理由をつけて」:「～です、～だからです」と理由をつけて話したり書いたりすること。	○順序だてて自分の意見を表している。 ＊「順序だてて」:「まず」「次に」「最後に」といった言葉を使って話したり書いたりすること。
学ぶ主体性	○疑問をもったことを自分なりに考えて試している。	○課題を「やってみたい」と思い、自分なりの意見を考え、もっている。	○どんなときでも課題を「やってみたい」と思い、自分なりの意見を考えてもち、それを毎日行っている。
	○「なぜ？」「どうして？」など疑問を見つけて学習している。	○疑問をもったことを自分なりに考えて試している。	○課題を「やってみたい」と思い、自分なりの意見を考え、もっている。
	○指示に進んで取り組んでいる。 ○学習に興味をもって取り組んでいる。	○「なぜ？」「どうして？」など疑問を見つけて学習している。	○疑問をもったことを自分なりに考えて試している。

ブロックの到達目標

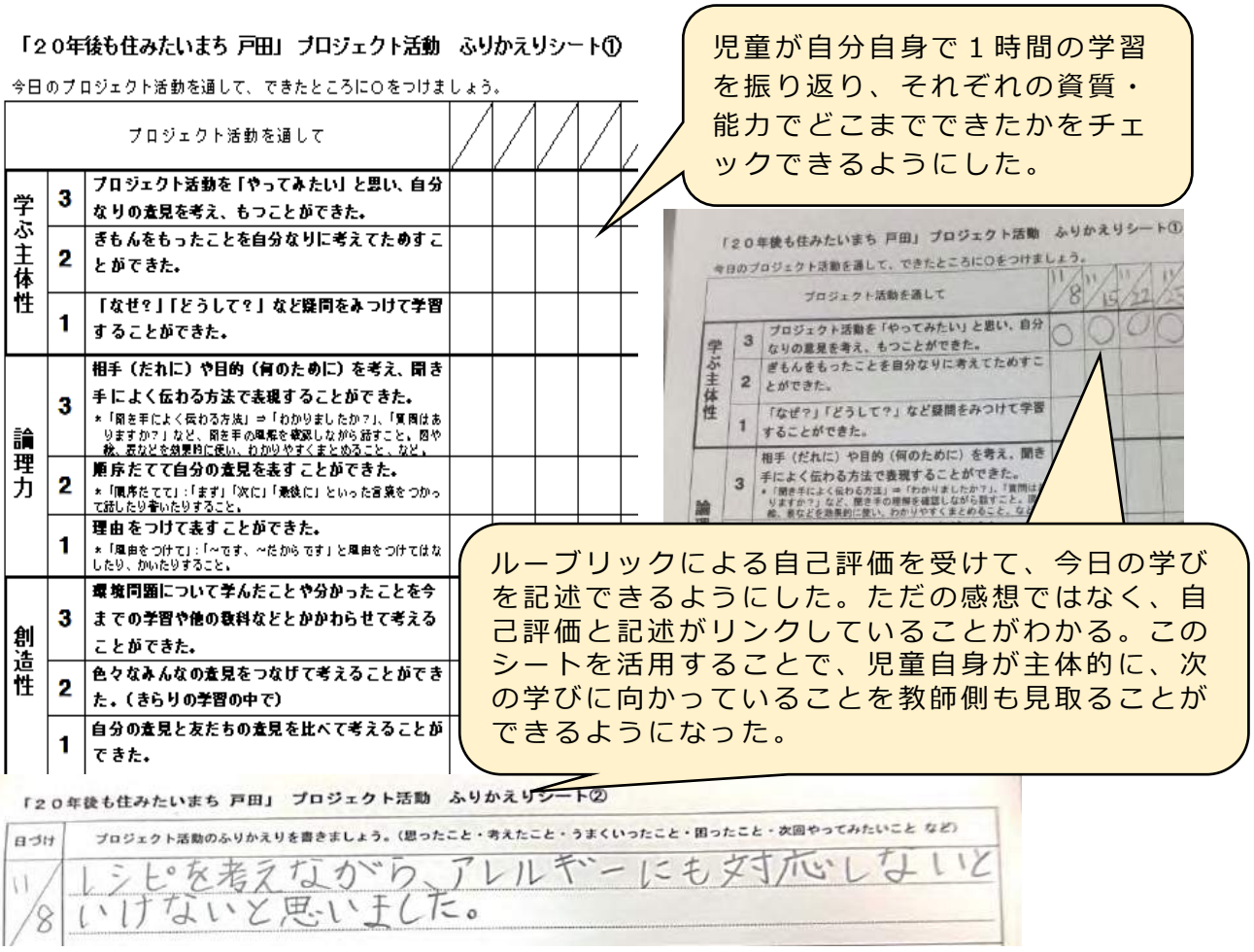
各ブロックの上位２項目が、次のブロックでは下位２項目となり、６年間を通じて、系統性をもっている。

（イ）振り返りシートの工夫

ルーブリックを各教科で活用できるように振り返りシートを学年の実態に応じて作成した。児童自身でルーブリックによる自己評価をする機会を確実に設けることで、１時間の中で児童が何を学び、何ができるようになったか見取ることができるようになった。

資料１２から１５は、それぞれの学年におけるルーブリックを活用した振り返りシートである。

資料１２　第４学年　総合的な学習の時間「２０年後も住みたいまち　戸田」



「２０年後も住みたいまち 戸田」プロジェクト活動　ふりかえりシート①

今日のプロジェクト活動を通して、できたところに○をつけましょう。

		プロジェクト活動を通して				
学ぶ主体性	3	プロジェクト活動を「やってみたい」と思い、自分なりの意見を考え、もつことができた。				
	2	ぎもんをもったことを自分なりに考えてためすことができた。				
	1	「なぜ？」「どうして？」など疑問をみつけて学習することができた。				
論理力	3	相手（だれに）や目的（何のために）を考え、聞き手によく伝わる方法で表現することができた。 ＊「聞き手によく伝わる方法」⇒「わかりましたか？」、「質問はありますか？」など、聞き手の理解を確認しながら話すこと。図や絵、表などを効果的に使い、わかりやすくまとめること、など。				
	2	順序だてて自分の意見を表すことができた。 ＊「順序だてて」：「まず」「次に」「最後に」といった言葉をつかって話したり書いたりすること。				
	1	理由をつけて表すことができた。 ＊「理由をつけて」：「～です、～だからです」と理由をつけてはなしたり、かいたりすること。				
創造性	3	環境問題について学んだことや分かったことを今までの学習や他の教科などとかかわらせて考えることができた。				
	2	色々なみんなの意見をつなげて考えることができた。（きらりの学習の中で）				
	1	自分の意見と友だちの意見を比べて考えることができた。				

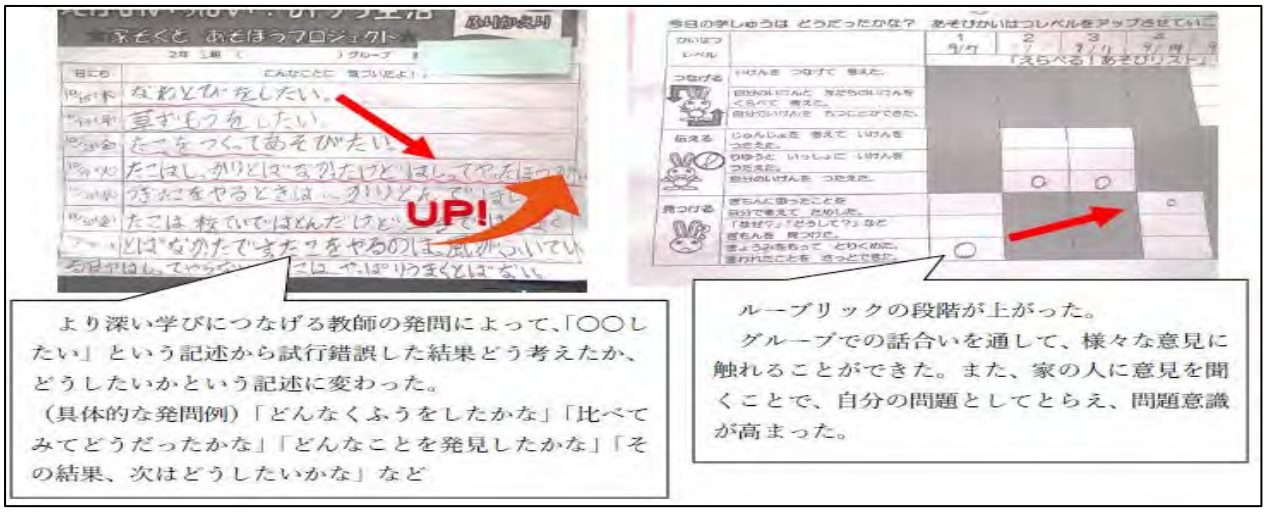
児童が自分自身で１時間の学習を振り返り、それぞれの資質・能力でどこまでできたかをチェックできるようにした。

ルーブリックによる自己評価を受けて、今日の学びを記述できるようにした。ただの感想ではなく、自己評価と記述がリンクしていることがわかる。このシートを活用することで、児童自身が主体的に、次の学びに向かっていることを教師側も見取ることができるようになった。

「２０年後も住みたいまち 戸田」プロジェクト活動　ふりかえりシート②

日づけ	プロジェクト活動のふりかえりを書きましょう。（思ったこと・考えたこと・うまくいったこと・困ったこと・次回やってみたいこと など）
11/8	レシピを考えながら、アレルギーにも対応しないといけないと思いました。

資料１３　第２学年　生活科　「家ぞくとあそぼうプロジェクト」



より深い学びにつなげる教師の発問によって、「○○したい」という記述から試行錯誤した結果どう考えたか、どうしたいかという記述に変わった。

（具体的な発問例）「どんなくふうをしたかな」「比べてみてどうだったかな」「どんなことを発見したかな」「その結果、次はどうしたいかな」など

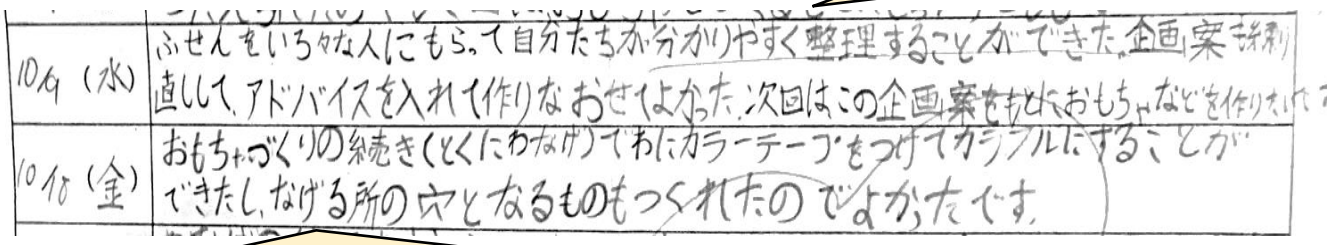
ルーブリックの段階が上がった。

グループでの話合いを通して、様々な意見に触れることができた。また、家の人に意見を聞くことで、自分の問題としてとらえ、問題意識が高まった。

子育て応援プロジェクト
プロジェクト２　ルーブリック評価項目
学ぶ主体性

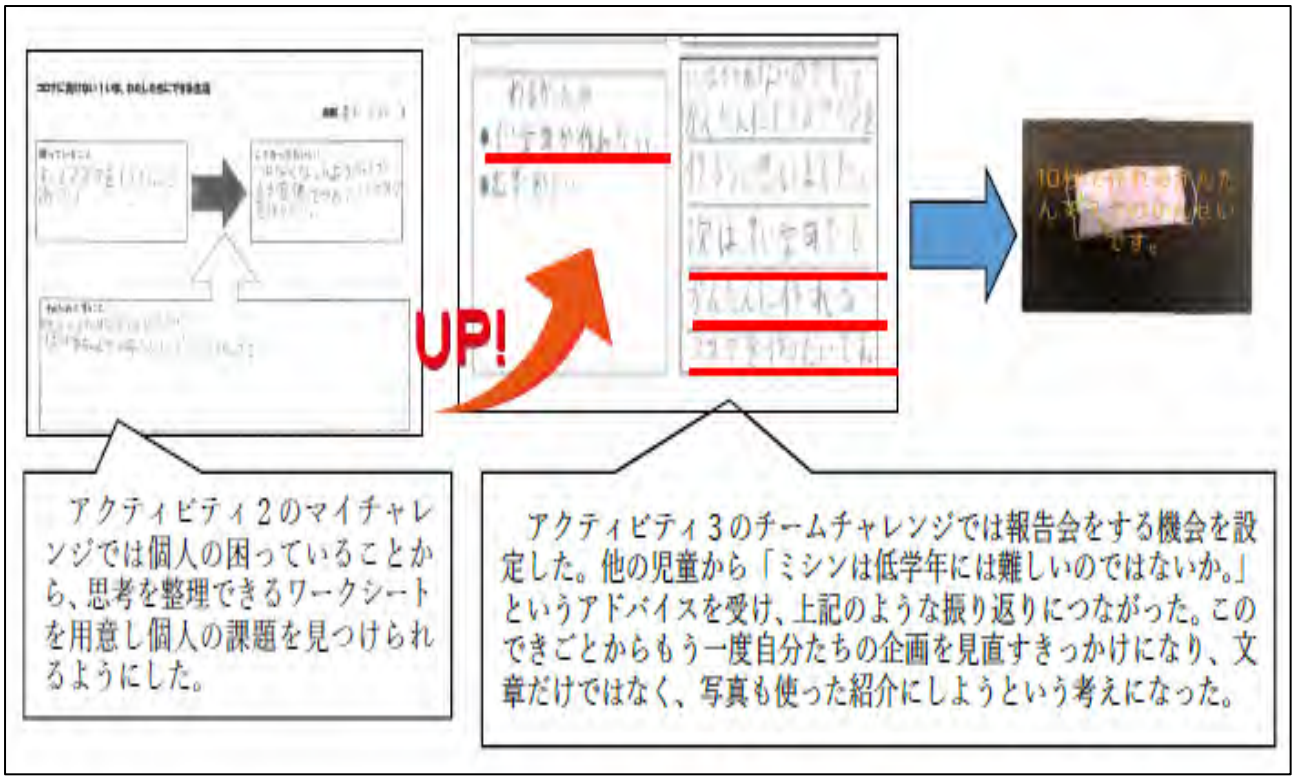
3　「プロジェクト２」のために、課題を解決する方法を積極的に考え、（実行し、）次回の取組を考えることができた。
2　「プロジェクト２」のために、課題を解決する方法を積極的に考え（実行し）た。
1　「プロジェクト２」のために、課題を解決する手立てを予想し、「すぐやる」、「じっくり考える」ことができた。

第６学年では、ルーブリックによる自己評価と記述がリンクするよう工夫した。自己評価をつけた「理由」を記述するようにし、児童自身で身につけるべき資質・能力が明確になるようにした。



上の記述をした児童は、学ぶ主体性の項目において「レベル３」の自己評価をしている。両日ともアドバイスによる企画案の練り直しや次回の活動への意欲が高いことが記述より明確である。また自己評価との整合性があると見取ることもできる。教師側もこのような児童に対して、活動の工夫の視点について支援したり、肯定的な声かけでさらなる意欲向上につなげたりするなど、指導と評価の一体化がルーブリックにより実現し、効果的である。

資料１５　第４学年　総合的な学習の時間　単元名「コロナに負けない！今私たちにできる新しい生活」



(3)教科の壁を越えた資質・能力の育成

ア　Ｔ２　Self-Learning の取組

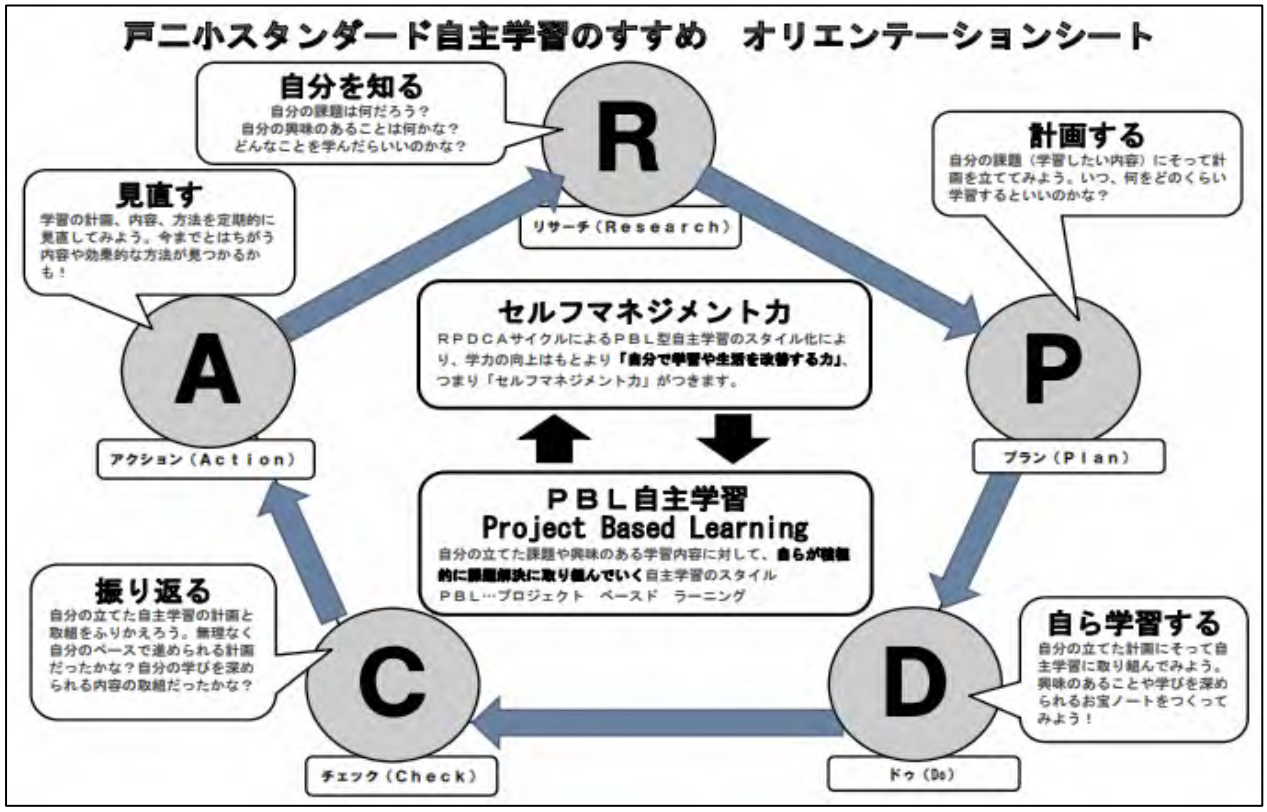
本校では、RPDCA サイクルによる Ｔ２　Self-Learning（自主学習）の取組を実施している。自主学習における RPDCA サイクルを以下のように定義し、充実した実践を目指している。

R（Research）：自分の興味・関心はどのようなところにあるのか知る。
P（Plan）：いつ、何を、どのくらい学習するか計画を立てる。
D（Do）：自分の立てた計画に沿って自主学習をする。
C（Check）：自分の立てた計画と実践を振り返る。
A（Action）：学習の計画、内容、方法を見直し、次のリサーチにつなげる。

自主学習の取組が充実すれば、教科の壁を超えた資質・能力の育成をすることができると考えている。これは PBL の探究的な学びにもつながるところがあり、自ら課題を解決する力を育成にも関わる。さらに、自分で学習の計画を立て、実践していく学習スタイルが確立できれば、自己を律するセルフマネジメント力にもつながっていくと考えている。

本校では、資料１６のように戸二小スタンダードを作成して、教職員で共通理解を行い、実践をしている。

資料１６　戸二小スタンダード　自主学習のすすめ　オリエンテーションシート



Ｔ２　Self-Learning の実践にあたり、その導入として特別活動における学級活動（２）として授業実践を行った。本時では、第３学年を対象として、題材名を「進んで学ぼう！自主学習」とした。「つかむ」、「さぐる」、「見付ける」、「決める」の４段階における展開で、自主学習における R（Research）と P（Plan）について指導した。具体的には、資料１７に示すとおりである。授業の中では、「決める」の段階で「Do」につなげるために、具体的な計画設定ができるよう指導した。これは、児童らの強い意思決定につながり、自主学習の充実にもつながっている。

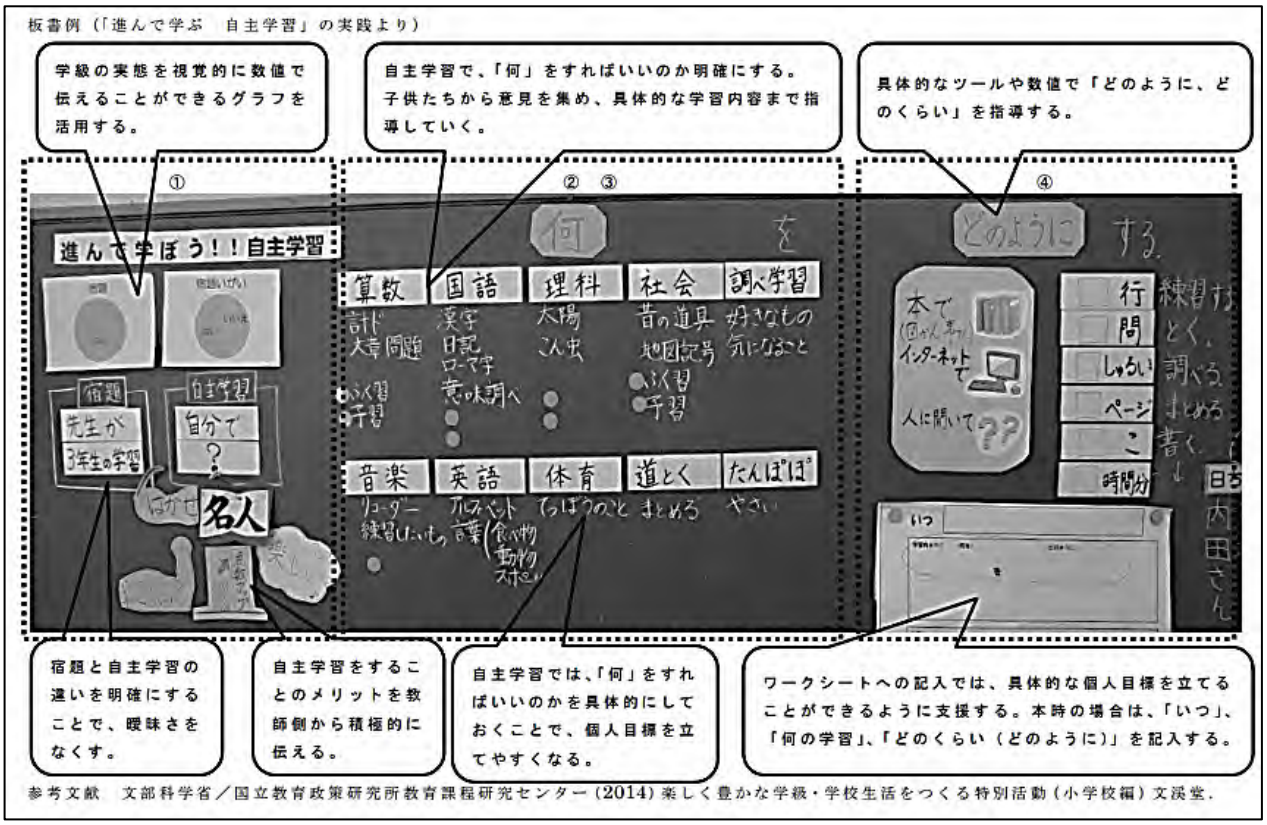
資料１７　「進んで学ぼう！自主学習」学習展開

段階（目安時間）	方　法	留意点	板書
事前指導	○問題意識を高くもつことができる導入のための指導。事前調査によって、十分な情報収集を行う。 ・アンケート調査 ・インタビュー取材 ・映像、写真、音声による記録 ・本やインターネットなどからの情報	・アンケート調査では、本時「つかむ」の導入につながるような情報を幅広く得られるようにする。 ・数値で示すことができるような資料はわかりやすく効果的。	
つかむ 課題をつかむ （５）	○資料の提示により、漠然とした問題意識を焦点化する場面。 ○アンケート結果をグラフなどに集計して、問題を視覚的に捉えやすくする。 ・アンケート結果の提示 ・映像や写真資料の提示	・問題を焦点化することができるような資料のみを提示するようにする。 ・グラフ等は視覚的に情報が入り、わかりやすいが発達段階に留意する必要がある。 ・学級全体の課題として共有できるようにする。	①
さぐる 原因を追究する （１０）	○問題の原因について話合いながら追求していく場面。	・改善の必要性を感じることができるように原因を整理する。	②
見付ける 解決方法を考える （１５）	○原因の解決方法を話合って考えていく場面。 ・グループによる話合い ・教師による情報提供（指導事項をおさえる）	・原因の解決方法を具体的に考えていくことが必要。この場面で思考が抽象的になってしまうと、個人目標の決定につながらない。	③
決める 個人目標の自己決定 （１５）	○見付けた解決方法に沿って、具体的な個人目標を設定する場面。 ・ワークシート等への記入 ・「いつ」、「何を」、「どのように」の記述。 ・目標の再考ができるようにしておく。 ・実践期間の設定。 ・実践を振り返る項目の設定。 ・個人目標の発表 ・個人目標の再考	**・集団思考（見付けるの段階）を生かした個人目標の自己決定ができるようにする。** ・自分の課題や原因にあった解決方法に沿って、具体的な個人目標を自分で決められるようにする。 ・「いつ」、「何を」、「どのように」を明確にする。数値で書くことができると、効果的。 ・個人目標を再考する時間を設定する。自分の目標を見直すことで、強い意志決定につながる。	④
事後指導	○個々の立てた個人目標を実践する場面。教師が実践の様子を見届け評価をする。 ・ワークシート等への記入	・個人目標に対する達成状況を教師が見届けるようにする。 ・目標設定が曖昧であったり、達成が難しそうな状況だったりする場合は、目標を再考できるようにする。	

板書計画は、資料１８のようにした。児童の思考過程と学びに対する意欲を高めるために次のことを意識した。

①つかむ段階	アンケート結果からわかる学級の実態を数値で示すとともに、T2 Self-Learning（自主学習）とは何か、その定義を明確にする。
②さぐる段階	何（教科）に取り組むのか具体的に板書する。
③見付ける段階	具体的にどのように学ぶのか考えさせ、板書する。具体的な数字を板書しておくと、強い意思決定につながりやすい。
④決める段階	個々の興味・関心にそって、自主学習の計画を立てる。何について、どのくらいするのか、具体的な記述ができると振り返りもしやすい。

資料１８　「進んで学ぼう！自主学習」板書計画



また、毎週水曜日に全学年を対象に「T2 学びの日」を設定している。これは児童が家庭における時間を有意義に使い、学びを広げたり深めたりすることができる日を想定している。そのため、各学級等から一斉での課題は出していない。学校では、自主学習の取組を充実できるように推奨するが、家庭や児童に時間の使い方は任せている。資料１７にあるように、保護者向けリーフレットを作成し、協力を呼びかけている。児童らは、T2 学びの日を活用

して、習い事の練習に時間を使ったり、普段できていないお手伝いを充実させたりするなど有意義な時間活用をすることができている。

令和３年度からは、GIGA スクール構想にもあるように、一人一台の端末が準備される。このことを活用し、家庭においてオンラインで自由な学びを行う「T2　GIGA Time」についても検討していきたいと考えている。

資料１９
Ｔ２学びの日　保護者向けリーフレット

児童の学びを促進し、モチベーションをあげる取組一覧

児童の自主学習ノートを掲示
（T2 Learning Road）

デザイン性の高い
学校統一の表紙

校長名で賞状を授与

イ　資質・能力をベースとしたカリキュラム・デザイン

１年間を見通して授業を行うことができるよう単元配列表を作成している。（資料２０）本校で作成している単元配列表は、年間指導計画に基づいたものとなっているが、資質・能力の育成に主眼をおいて作成している。本校の単元配列表の特徴とそのメリット（→）は次のとおりである。

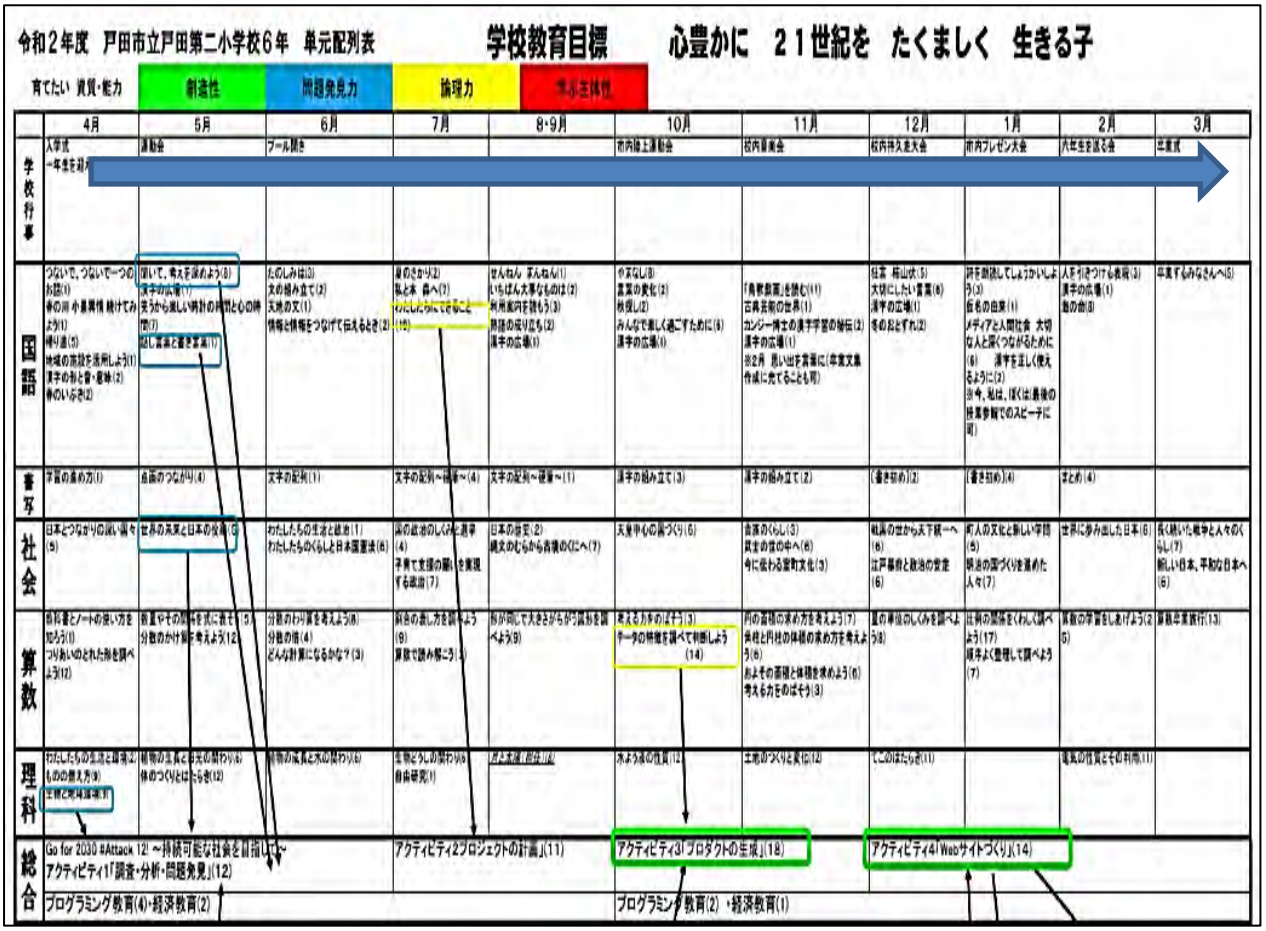
①資質・能力を色分けして表示
→育成しようとしている資質・能力が何の学習とつながっているのか明確に把握することができる。
②生活科、総合的な学習の時間を中心に据える
→各教科で育成する資質・能力が生活科、総合的な学習の時間における学習活動とどのように関連性があるか把握することができる。教科の壁を超えた学びにつながる。
③単元配列の組み直し
→年間を通して効果的、効率的に資質・能力を育成するため、指導の順序を入れ替えている。

単元配列表を作成することで、育成する資質・能力と各教科における学びが線でつながった。カリキュラムがデザインされた単元配列表を把握して指導することで、教科間のつながりが可視化でき、より効果的な指導につながったと考えられる。

新学習指導要領では、社会に開かれた教育課程の実現が求められている。人的・物的なリソースを最大限に生かしていくためにも、単元配列表を地域と共有し、以下にあるように PDCA サイクルで作成段階から連携・協働する必要があると考える。地域と連携・協働して学習活動を共有できれば、児童らの深い学びにつながることが期待できる。

単元配列表作成における PDCA サイクル P（Plan）：年度初めにカリキュラムを地域と共有する。 D（Do）：学校運営協議会などで、カリキュラム検討会の時間を設け、地域の方とともに実践できることを考えていく。 C（Check）：カリキュラム検討会を設け、地域の方と共に修正する。 A（Action）：修正されたカリキュラムを基に、次年度の実践につなげる。

資料２０　カリキュラム・デザインされた単元配列表



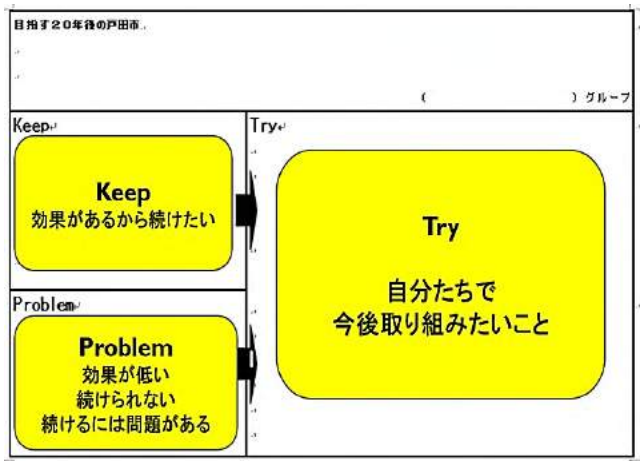
＊矢印は、３月の方向に向かっていくように単元配列を見直した。

ウ　思考ツールの活用

思考ツールを適切な学習場面において活用することで、教育効果は上がると考えている。思考ツールを活用することにより、思考を可視化、分類・整理するだけではなく、主体的、対話的な学びが一層広がり、深い学びにつながっていくと期待できる。一方で、活用する学習場面やどのツールを活用するかの判断は大変重要であり、研究が必要であると考える。以下、児童のパフォーマンス評価に変容が見られた思考ツールについて紹介する。

第４学年総合的な学習の時間において、身近な環境問題を扱った学習場面では、資料２１にあるように KPT シートを活用した。「K」はキープ（効果があるから続けたい活動）、「P」はプロブレム（効果が低い、問題がある、続けられそうにない活動）、「T」はトライ（今後取り組んでみたい活動）としている。活用の流れとしては、「K」と「P」の分類・整理後に「T」の内容について考えた。これまでの学びを生かした創造性のある「T」を考えることができるようになった。（資料２２）学びが充実していたからこそ、記述のパフォーマンスにも変化がみられたようである。

資料２１　KPT シート



資料２２　パフォーマンスの変化

プロジェクト活動計画段階(10月)	KPT シートへの記述(2月)
たくさんの花を植えれば、緑が増える。	**チラシを配ったらボランティアの人たちがたくさん集まってくれた。**花を植える活動を計画したら、多くの人が集まってくれるかもしれない。
自分たちでお金を出し合って、学校の緑を増やす。	お金を出して活動するのは続けられない。**環境への募金に協力**したら問題の解決につながる。
フードロスを減らすように残さず食べるよう呼びかける。	**・出前講座で消費期限の近いものから先に買うことで、フードロスを減らせることを知った。**買い物では、消費期限を確認して買い物をする。 **・野菜の皮まで使ったり、生ごみをコンポストにしたりして活用**することで、ごみを減らすことができる。

5　成果と課題

(1)成果

・カリキュラム・マネジメントを研究することで、教科間のつながりが可視化できた。（単元を俯瞰的に見る力がついた）

・産官学民との連携により、児童の学びがより深いものになっている。

・学校評価（保護者）アンケートでは、回答率が１００％であり、家庭・地域との連携が強化されてきた。またカリキュラム・マネジメントに関わるアンケート項目では、前年度より大きく伸びており、着実にカリキュラム・マネジメントが推進できていることがわかった。

学校評価アンケート質問項目	よくできている＋できている	改善が必要	分からない
情報発信・地域連携 ①学校は、学校便りや授業参観懇談会、フェイスブックなどを通じて、教育活動を保護者や地域に積極的に公開している。	**97.4%（△2.2）**	**1.6%（▼0.4）**	1.0%（▼1.8）
社会に開かれた教育課程 ②学校は、地域・学校応援団・企業等の協力を得ながら、社会に開かれた学校づくりを推進している。	**95.7%（△3.3）**	**1.7%（▼0.5）**	2.6%（▼2.8）
新しい学びと資質・能力 ③学校は、プログラミング教育や英語教育、タブレットＰＣを活用した新しい学びを行い、学ぶ主体性・論理力・創造性など、将来必要とされる資質・能力を育む教育を推進している。	**94.0%（△2.8）**	3.9%（△0.1）	2.1%（▼2.7）

＊前年度との比較　△伸び　▼下降

(2)課題

・ポートフォリオ評価やスタディ・ログによる学びの積み重ねには、至っていない。学びの積み重ねによる児童の具体的な伸びを見取ることができれば、個別最適化された学習支援へとつながっていく。今後も研究を継続し、追究していく必要がある。

・単元配列表は、地域と共有し、社会に開いていく必要がある。例えば、学校運営協議会や研究の時間を使って、カリキュラム・デザイン検討会議を定期的に開催することが考えられる。地域と共有したり、定期的に見直したりすることで、地域と連携・協働したよりよいカリキュラムになっていく。

・カリキュラム・マネジメントで育まれた資質・能力を可視化できるよう追究していく。 ルーブリック評価の数値化、スタディ・ログから見る変容など、個の変化を見ていくと、より個別最適化な学びとなり個に応じた指導が可能となると考えられる。

・人財の蓄積（人財バンク）を引継ぎ、単年度で学びが終わらないように留意していく必要がある。

Ⅲ　実践校における取組

1　実践校における取組②　学校名　戸田市立美笹中学校

2　学校や地域の実態、特色について

(1)学校や地域の実態について

本校は戸田市の中心地域（戸田駅・戸田公園駅周辺）から離れた場所に位置する。

学力向上が本校の最重要課題である。どの年度においても、各学力調査等における本校の平均点は全体のそれを下回っている。また、学力向上と同様に課題となっているのが「語彙力の低さ」「世の中への関心の低さ」「家庭学習への意識の低さ」という３点である。

家庭の新聞購読率は低く、３割を下回る。社会科の授業で実施したアンケート結果からは、メディアを問わず、毎日ニュースを確認している生徒が全体の半数以下という結果も出ている。中学校は社会に出るための準備期間である。世の中への興味・関心・知識が乏しい生徒が多いことは深刻な課題であると考える。

(2)学校や地域の特色について

本校では全ての教育活動で意識化すべき指導の視点及びＰＢＬ実現につながる視点として、「明確な課題意識」「体験活動の充実」「成果の実感」を挙げている。具体的には、生活指導・生徒指導・教育相談の充実のための「生活指針」「美笹中授業９の心得」の活用、インクルーシブ教育システム実現の手立てである「美笹中ユニバーサルデザイン」、教科の専門性と生徒の実態に応じた指導の手立てである「美笹中メソッド」などがある。NIE に関しては、「読む、書く、伝える力を育成するカリキュラム・マネジメントの推進」を意識し、NIE 教育の推進による学習内容と社会や世界をつなげる取組の推進を進めている。

3　カリキュラム・マネジメントを通して育みたい資質・能力について

当初の目標として、新聞を活用した授業実践である NIE（Newspaper in Education）の推進校としてのこれまでの知見の蓄積を土台としながら、読解力や表現力等の言語能力、情報活用・分析力や情報の真価を問う能力、論理的思考力や批判的思考力、課題発見・解決能力などの育成を目指すための教科等横断的な取組の実践を目指してきた。新聞という共通の素材を使い、複数の教科等において取組を実践することで、各教科等の見方・考え方に基づく多様な観点からの基礎的な能力を身に付けることを目指したカリキュラム・マネジメントに係る実践研究を行ってきた。

そして、以上の取組の振り返りと見直し及び生徒の実態から、新聞記事の活用（NIE）により、情報の受信力・発信力、語彙力、コミュニケーション能力などの「社会で活躍する力」を育むことを新たな目標に位置付けて実践研究を行った。

4　カリキュラム・マネジメントの実際について

(1)教育目標等の実現に向けた各教科等の相互の連携について

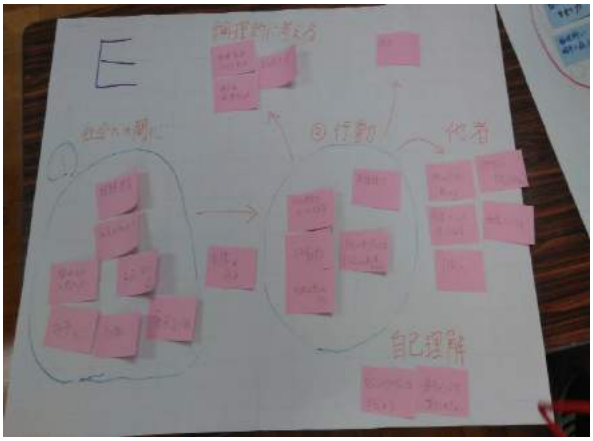
研究を学校全体として進めていくための組織化を目的として、研究推進委員会を立ち上げ、時間割の中に組み込む形で毎週委員会を実施した。その中で、研究内容についての協議や見直しを細やかに行うことで、PDCA サイクルを確立してきた。また、校内研修では研究の方向性や生徒に身に付けさせたい力についての考えを共有するとともに、研究推進委員会を中心として教職員を第一・第二・第三の３つの部会に分けて組織的に研究を進めてきた。

＜学校研究組織図＞

研究推進委員会（校長・教頭・教務主任(研修主任)・研究主任・研修部員）

	第一部会 教職員への推進体制 【研修・教職員環境整備】	第二部会 生徒への推進体制 【授業環境・環境整備】	第三部会 統計集約・解析 【生徒・教職員の変容分析】
	・研修の計画を練る。 ・教職員にNIE関係の啓発をしたり、提案したりする。	・授業実践を整理したり、生徒への働きかけを提案したりする。 ・NIE 環境(掲示やコーナー)などを整える。	・アンケートや調査を作成する。 ・必要なデータを集約したり分析したりする。
１学年	大竹　川嶌	黄木　世間瀬　片桐	◎伊藤良　長友
２学年	永井　大久保	◎松林　髙萩	福田　又吉
３学年	唐澤　○伊藤博	○五井　小木　豊平	○豊嶋　山崎
４学年	◎須田　梶山	永江　ロッキー	

＜校内研修(生徒に身に付けさせたい力についての話合い)＞



ア　第一部会

【活動内容】

主に研修など教職員への NIE の啓発や諸活動の提案を行ったり、NIE 環境を充実させたりする。

【取組１】

・ワンポイント NIE　―活用できるところだけ見せてください―

各教科の授業や学級活動などで、新聞記事を使った指導・活動を他の教職員に公開し、お互いに見合うという取組である。専門教科だけでなく、道徳や学級活動など、学校生活のあらゆる機会で新聞記事を活用した。実践に当たり、「1 時間全てで新聞を使うのは難しい」「始めから終わりまでずっと参観するのは難しい」という声もあり、新聞記事を活用している時間だけを参観するという形を取った。

【取組２】

・NIE コーナーの設置

職員室隣の休憩室を活用し、毎日最新の新聞をテーブルに広げておき、目にする機会を設けた。また、NIE 授業の話題づくりや教材・題材としての活用を目的に、『コラム歳時記』を購入した。地域紙のコラムがカテゴリー別に分かれているので、活用したい場面や内容に合わせて新聞記事を選びやすいという利点がある。

イ　第二部会

【活動内容】

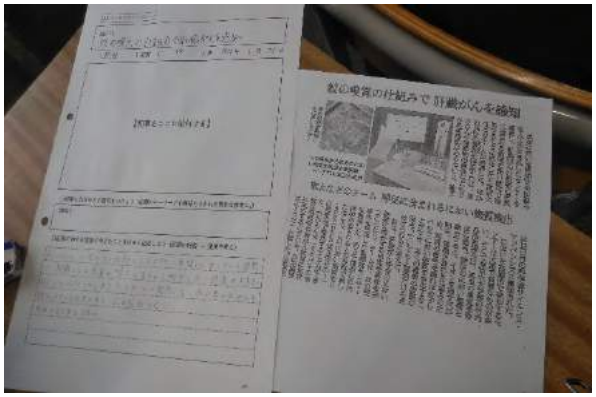
「生徒を動かす視点」で、生徒が中心となった活動の提案や、生徒への働きかけを行う。

【取組１】

・NIE タイム

毎週火曜日の朝読書の時間に、新聞係が選んだ記事に対して感想を書くという活動である。初めは不慣れな部分もあったが、全校生徒に対して、新聞に親しむ機会を均等に設けることができた。また、いろいろな授業で新聞に触れる機会は増えていることもあり、新聞を読み、感想を記入する速さが向上している生徒が見受けられた。しかし、限られた時間の中で感想の記入まで至らない生徒がいたり、スクラップシートを管理できていない生徒がいたりした。

今後の実施については、10 分の活動時間の中で読み切れる文章量の記事を選んだり、ワークシートを掲示したりするなど、事後の扱い方を工夫する。



【取組２】

・生徒会本部及び専門委員会の取組

活動は多岐にわたる。月に一度、生徒会新聞の発行、各専門委員会で新聞を用いた独自の活動、昼の放送で新聞記事の紹介（放送委員会）、オリンピックの記事を扱った掲示物の作成する（体育委員会）といった活動を実施した。

取組の結果、専門委員会の特徴を生かした新聞の活用をすることができた。一方で、新聞を用いた活動の実施が難しい委員会があるのも事実である。活動が可能な委員会を中心に、取組を継続していく。

ウ　第三部会

【活動内容】

アンケートから主観的なデータを、埼玉県学力・学習状況調査から客観的なデータをそれぞれ分析し、現状や課題を明らかにする。また、次年度以降の研究につなげる。

【分析に当たって】

学校研究主題にある『社会で活躍できる力』を「NIE で育む力」と「教育活動を通じて育む力」に分類した。さらに「NIE で育む力」を社会との関わり、世の中への関心、意見をもったり考えを深めたりする力の３つに分類した。

第三部会では、現状を把握するために「社会との関わり」「世の中への関心」についてアンケートを行い、課題を明らかにした。また、県学力学習状況調査の分析では、国語の「話す・聞く力」、数学の「数学的な考え方」の２点が社会で活躍できる力、特に、意見をもったり考えを深めたりする力として考え、分析を行った。

【アンケートの結果】

身近な学級や委員会などに貢献しようとする意識が高いことに対して、対象が「社会」のように大きく抽象的なものになると意識は一気に低下している。また、「自分の考えを伝えること」や「分からないことを進んで調べること」が弱い。上記の２点から「学校での学習が社会につながっていること」「主体的に行動すること」が課題であると考えられる。

※アンケート結果の数値は４が最大値で、４に近づけば近づくほどより当てはまるというものである。

アンケートは以下のような選択式で行った。

次の質問でもっとも当てはまるものを１～４の中から１つ選んでください。

（例）質問　優しさと思いやりにあふれ、笑顔で挨拶することができる。

当てはまらない　　１　　２　　３　　４　　当てはまる

【分析結果：アンケート】

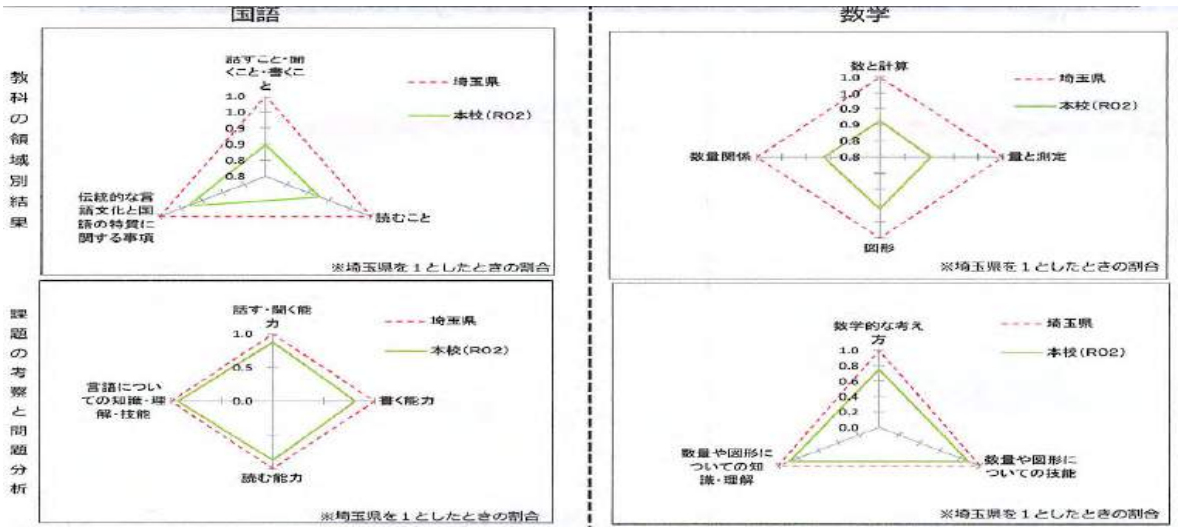
	No	評価項目	1年	2年	3年
学校教育目標	1	優しさと思いやりにあふれ、笑顔で挨拶することができる	2.7	2.9	3.0
	2	将来の夢と学ぶ意欲をもち、目標達成のために粘り強く努力することができる	2.8	2.8	2.9
	3	明るく元気に行動し、進んで体を鍛えることができる	2.7	3.1	2.9
人財について	4	地域を愛し、地域を誇ることができる	2.5	2.7	2.5
	5	自らの力で人生を切り拓き、自分の人生に満足できる生涯を送ることができる	2.8	2.8	2.9
	6	異なる考えや多様に価値を受け入れることができる広い視野と寛容な心をもっている	2.7	2.9	3.0
	7	「世のため、人のため、後のため」という公の心を持ち、地域や埼玉そして日本の将来を考えている	2.4	2.4	2.6
社会との関わり	8	あなたは将来、社会に貢献したいと思う	3.0	3.1	3.2
	9	自分の所属している組織（学級、委員会、部活動）で貢献しようと意識して行動している	3.1	3.4	3.1
	10	日常生活や授業で自分の考えや意見を相手に伝えることができる	2.9	3.0	3.0
	11	他者の異なる意見や考えを受け入れることができる	3.1	3.4	3.2
	12	他者の異なる意見や考えを自分の行動に生かしている	2.8	3.0	2.9
世の中への関心	13	世の中の出来事に関心がある	3.0	3.0	2.9
	14	世の中の出来事を自分のこととして捉えている	2.4	2.6	2.5
	15	日常の生活や授業の中で分からないことや興味があることを進んで調べる	2.7	2.8	2.7
	16	身近な人（友人、クラスメイト、家族）に関心がある	3.2	3.4	3.2
	17	授業は楽しい	2.9	3.0	2.7

【埼玉県学力・学習状況調査の結果を踏まえた考察】

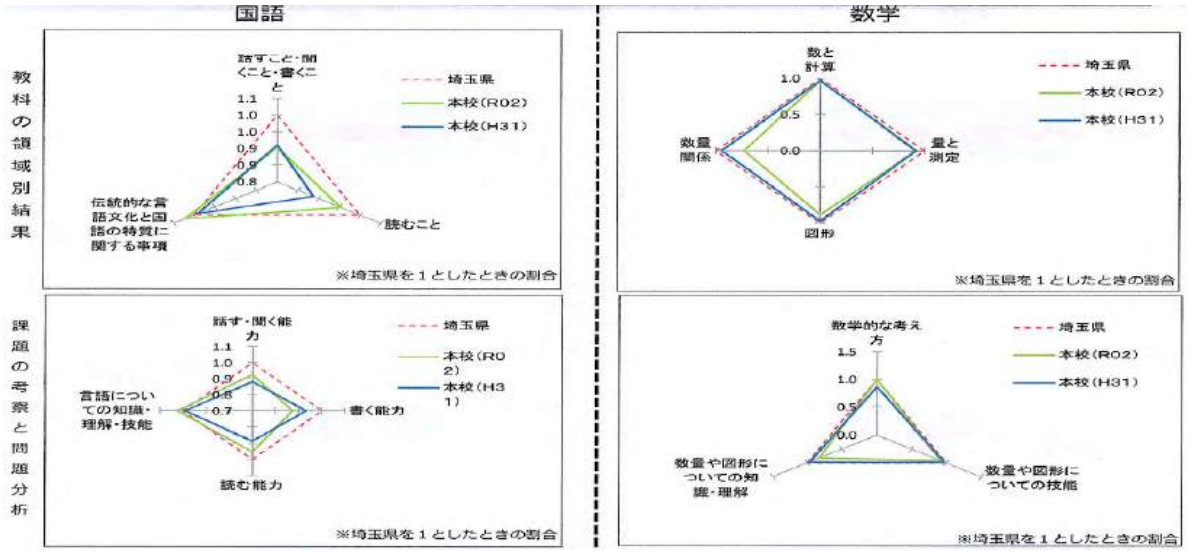
どの学年にも共通して、知識・理解や技能の項目よりも「話す・聞く能力」「数学的な考え方」の項目の方が県平均と比較して低いということが分かった。このことから、知識をインプットすることは比較的得意だが、自分の思考をまとめたり、表現したりする力を身に付けさせることが課題であると考えられる。

【分析結果：埼玉県学力・学習状況調査】

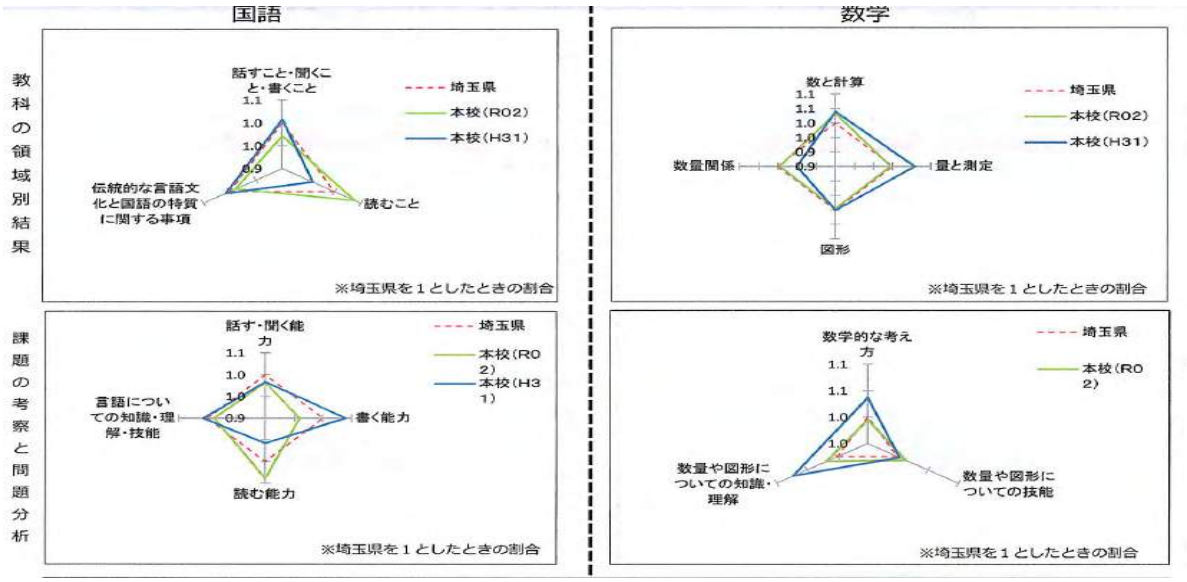
（第１学年）



（第２学年）



（第３学年）



(2)教育活動の実施に向けた人的・物的資源等、地域外部の資源の活用について

【取組①】

埼玉県 NIE アドバイザー　小谷野　弘子氏による研修

講義『NIE を通して生きる力を育む』 及び新聞記事を使った演習

(令和元年 7 月実施)

カリキュラム・マネジメントの視点から NIE の活動を推進するため、御講義をいただき、実際に新聞を使った演習を行った。研修の結果、その後の取組にもなった新聞通信「社会の窓」の発行等につながった。

【取組②】

日本新聞協会 NIE コーディネーター　関口　修司氏による研修

講義『なぜ、今 NIE か？』 及び新聞記事を使った演習

(令和 2 年 9 月実施)

NIE に関する理解を深め、学校研究を効果的に進めるための知識や考え方を養うとともに、実践的な研修を通して生徒への働きかけにつながるきっかけを学ぶ目的で御講義をいただいた。また、新聞の中で特に心に残った 1 つの記事を抜き出し、意見をまとめる形での演習も行った。

【取組③】

全学級への新聞設置

地域の販売店（本校は読売センター戸田南販売所）の御厚意で無料提供を受けている読売新聞を各学級に設置した。教室で誰もが自由に新聞を手に取ることができる環境を整備している。全学級で設置方法を統一している。

【取組④】

ＮＩＥコーナーの設置、新聞閲覧室の活用

複数の新聞（各月に３～４社）を各学年の廊下に設置している。新聞を新しい日付のものから３年→２年→１年の順で設置し、最後は新聞閲覧室（バックナンバー閲覧室）に保管する。新聞を読み比べられる環境を整備している。新聞閲覧室では過去の新聞を閲覧したり、新聞を活用した授業を実施したりする形で活用している。閲覧のみならず、新聞スピーチや「いっしょに読もう！新聞コンクール」で使用する新聞記事を選び、切り抜き作業をするといった活動も行われている。

(3)各教科における NIE 実践

① 国　　語

実践と成果	【実践】 ・コラムを用いた課題作文のトレーニングをする。(毎週１回実施) ・コラムを読み、書き手の伝えたいこと（テーマ）を読み取り、自身の体験と関連付けながら、テーマに対する考えを記入する。 【成果】 ・社会の出来事と自身の生活や体験を関連付けて考える力と意欲が向上した。 ・読解力と書く能力が向上した。
問題点	・文章の表面だけを読み、書き手が意図するところまで読みを深められない生徒が多かった。 ・テーマと根拠（自身の体験談）が結び付けられない生徒が多かった。
今後の実践計画	・コラムの要約と感想を書くことから始め、徐々に課題のレベルを上げる。

② 社　　会

実践と成果	ア　新聞スピーチ ・新聞記事の要約、記事を選んだ理由、記事に対する自分の意見を全員の前でスピーチする。 ・全学級で実施している１分間スピーチとは異なり、「関心・意欲・態度」「資料活用の技能」の２観点で評価を付ける。記事の要約力、自分なりに解釈するための社会を見る視点、記事を読んだ上で新たな提案をする提案力を生徒に要求し、より高いレベルのものを作成させた。 ・毎時間、生徒がスピーチで発表した記事をたたき台にして、新たな社会的な見方・考え方を生徒に提案するということを繰り返すことで、生徒の社会への関心を高めさせた。 イ　「一緒に読もう！新聞コンクール」 ・新聞記事を選び、自分の意見を記述した後に、他者（両親・兄弟姉妹・友人・その他）の意見を聞いた上で、新たな考えや提案を記述するというものである。

	・本コンクールへの出展を視野に入れて、記事の要約力を身に付けたり、社会を分析するための視点を増やしたりするために、上記の新聞スピーチを指導してきた。 ・本校３年生が全国で表彰を受け、学校としても優秀学校賞を受賞した。 ウ　新聞読み比べによるメディア・リテラシーの育成 ・複数紙を読み比べさせ、同じ出来事でも新聞社ごとに「伝え方」が異なることを読み取らせた。「１つの事実」だとしても、各紙の見方・考え方によって受け手の捉え方は変わってしまうこと、だからこそ新聞を始めとする複数のメディアから、「１つの事実」を多面的・多角的に捉えることが重要であることに気付かせた。 エ　回し読み新聞 ・新聞を班の中で回し読みさせ、記事を選んで要約させる。模造紙１枚に班員が選んだ記事を貼り、模造紙に「見出し」という形でタイトルを書かせる。自分の意見を空いているスペースに記入させる。 ・記事を要約する力、班の中で新聞記事の内容をプレゼンする力、複数の新聞記事から新たな見出しを考える読解力や構成力を養った。 オ　授業を補完するための新聞記事の活用 ・授業で学習する内容に関連した記事を紹介し、授業の内容を身近な生活と結び付けるためのきっかけを作った。
課題点	・教師が提示した記事を授業で用いるパターンが多かった。新聞の実物を生徒に与え、実際に触れさせる場面が少なかった。新聞のサイズ感や質感など、もっと新聞に親しめるようにしたい。 ・新聞活用を最もしやすい教科であり、活用の幅も大きい。 ⇒新聞を活用して、他教科との連携を行いたい。
今後の 実践計画	ア「新聞機能学習（新聞を学ぶ）」 ・新聞記者をゲスト・ティーチャーとして招聘した授業の実施 ※新聞の構成や記事の読み方（視点）を生徒に教える イ「新聞活用学習（新聞で学ぶ）」

	・新聞を用いたレポート課題ないしノート作成 （新聞を資料として活用） ウ「新聞制作学習（新聞に学ぶ）」 ・新聞の構成を意識した新聞を作成（レポート） ・回し読み新聞の更なるレベルアップ エ　他教科との連携 ・国語とカリキュラム・マネジメントの視点で連携して授業実施

③　数　　学

実践と成果	【今年度の実践】 ア　「数学の窓」年間４回発行 イ　新聞を題材に数学的な見方・考え方を育成する活動 ・第１回　「グラフの読み取り」 グラフから薄利多売を読み取る ・第２回　「グラフの読み取り」 グラフから鳥獣被害の現状を読み取る ・第３回　「比例の利用」 比例を利用し聖火リレーの総距離を求める ・第４回　「空間図形」 化粧を数学的に考える 【成果】 ・数学と社会の出来事を繋げることで、意欲が向上した。 ・グラフの読み取りから、批判的な考察する力を育成できた。
問題点	・題材を探すことに時間がかかる。 ・題材と教科書をどのように関連付けるか。

今後の 実践計画	・「数学の窓」を継続（年間１２回） ・生徒が題材を探す活動を予定（問いをつくる）

④　理　　科

実践と成果	ア　３学年「地球と宇宙」に関して 　日本人宇宙飛行士の募集や月面開発についての記事を紹介し、感想を記述させた。宇宙飛行士に必要な資質や険しい道のりについて知り、宇宙について考えを広げることができた。 　また、立春の日付についての記事を紹介し、すでに学習した太陽の１年の動きについて再確認することができた。 イ　１学年「地震」に関して 　東日本大震災を振り返る記事を紹介し、津波の被害や避難について考えを深めることができた。
課題点	・学習時期と学習内容に近い記事を紹介することができ効果的であったが、限られた単元での取り扱いとなったため、年間計画に沿って記事を見付けて取り上げる必要がある。 ・そのときの学習内容と直接関わらない内容の記事の取り扱いについて考える必要がある。 ・「記事を紹介する」、「感想を書く」以外での授業への取り入れ方を工夫する。
今後の 実践計画	・新学習指導要領には、理科の資質・能力として「学びに向かう力・人間性等」に「日常生活との関連、科学することの面白さや有用性の気付き」がある。新聞記事を活用した学習は、その時々の日常生活と関連のある事柄やその事柄の面白みや有用性に触れる機会となり得ると考えられる。年間学習計画との関連を意識し、新しい情報を学習に取り入れていきたい。

⑤　音　　楽

実践と成果	【実践】 　音楽関連記事や広告を授業で取り組んだ内容と関連付けて紹介 ・ローザンヌ国際バレエコンクール入賞の記事 　→総合芸術バレエ ・歌舞伎公演の広告→総合芸術歌舞伎 ・オペラ公演のプレゼント企画→総合芸術オペラ

	・オーケストラコンサートの広告 ・佐渡裕さん（指揮者）の紹介記事 ・CD の紹介記事　　など 【成果】 音楽関係、舞台芸術関係の話題に興味を示すようになった。
課題点	コロナで演奏会が中止になり、音楽関係の記事が少ない上に、音楽の授業とうまく結び付けるためにはどのように活用すればいいのか模索中である。
今後の 実践計画	・CD の紹介記事などを参考に、個人で曲を紹介する。 ・生徒に音楽関係記事を探させる。

⑥　美　　術

実践と成果	・美術関連の記事を読ませ、教科書の内容に関連する美術作品を紹介する。 ・美術作品・美術館情報などのコラムを読み、作家やその作風、時代背景などを学ぶ。 ・美術館ごとの特色や、美術館自体に建物の特徴がある場合は一緒に紹介する。
問題点	・展覧会などが頻繁に行われないため、新聞記事を収集するのが困難だった。
今後の 実践計画	【新聞記事を利用したコラージュ作品制作】 ・新聞の見出しや記事の配置及び構造、それぞれの役割を理解させる。 ・自分で一つの記事を分かりやすくアレンジして、一目で見て分かりやすい広告のように紙面を作り替える。 ・絵画だけでなく、相撲や囲碁・将棋などの記事は定期的に発行されるので、幅広く日本の文化に触れながら記事の紹介をしようと考えている。

⑦　保健体育

実践と成果	ア「スポーツに関する記事」 冬休みの宿題としてスポーツ記事を読んで、自分の意見や考えを記入させ、新聞スピーチを行わせた。 イ「新型コロナウイルスの記事」

	保健分野の感染症の授業で参考に使用した。 ウ「オリンピック・パラリンピック記事」 体育委員会でオリンピック・パラリンピックに興味をもってもらうための巨大新聞を作成し掲示した。
問題点	冬休みの宿題では、家庭で新聞を取っていない生徒が、家庭での作成が困難だった。
今後の 実践計画	・保健分野の授業において、保健に関する記事を使用する。 ・体育委員としての活動を継続していく。

⑧　技術・家庭

ア　技術分野

実践と成果	ア　ネット中傷事件に関するニュース映像を見る。 イ　同事件に関する新聞記事を読む。 ウ　新聞等のメディアを利用した情報収集から多くの意見を学ばせ、客観的に物事を推察できる知識を身に付けさせる。
課題点	情報領域に関する資料としては新聞記事を活用しやすいが、他の領域ではどのように新聞記事を活用するかが課題である。
今後の 実践計画	「A材料と加工の技術」「B生物育成の技術」「Cエネルギー変換の技術」の領域での、NIEだからこそできる、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の開発を進める。 ・「なぜ・どうして、もっと知りたい新聞で」（考える・熟考する学習） ・「どうしたらいいの、みんなで考えよう新聞で」（判断する・参加する学習） ・「意見や考えを、みんなに伝えよう新聞で」（表現する・発信する活動） 下記を参考にしてNIEを授業に落とし込む。新学習指導要領解説における「新聞」関連記述を整理した。 【総則】 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善には、教師がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に加え、各種統計資料や新聞、視聴覚教材や教育機器等の教材・教具を適切に活用することが重要である。

	【技術分野　Ｄ情報の技術】 （２）イ　問題を見出して課題を設定し、使用するメディアを複合する方法とその効果的な利用方法等を構想して情報処理の手順を具体化するとともに、製作の過程や結果の評価、改善及び修正について考えること。 （４）イ　⑵については、コンテンツに用いる各種メディアの基本的な特徴や、個人情報の保護の必要性についても扱うこと。 ※「メディア」について メディアは記録媒体としてのメディアだけはなく、文字、音声、静止画、動画など、表現手段としてのメディアを指している。内容．情報（じょうほう）を伝える物や手段（しゅだん）のことを「メディア」と言う。新聞は、文字や写真が印刷された紙によって情報を伝えるメディアの一種。

イ　家庭分野

実践と成果	【実践】 ・家庭科に関わる内容の記事を集め、授業で積極的に紹介した。 ・授業の導入や終末に新聞を活用した。 【成果】 ・社会に興味・関心をもって学習内容と関連付けることができた。 ・地域の特徴などについて知り、理解することができた。
課題点	・新聞記事を使って、授業内容に興味・関心をもたせること。 ・自分の住んでいる地域の特徴について知り、理解させること。
今後の 実践計画	家庭科係と協力して、家庭分野に関わる内容の記事を使ってまとめたものを紹介するスペースを作りたい。

⑨　外 国 語

実践と成果	・英字新聞の見出し(headline)を用いた授業 英字新聞に親しむ目的で、3 年生で実施。当初、英字新聞と聞いて抵抗感を示す生徒もいたが、headline の特徴紹介、headline クイズを取り入れることで、生徒も見出しを読み取ることに慣れてきた。
問題点	英字新聞を用いた授業は、英語が得意な生徒とそうでない生徒との差が大きいため、継続して行うには難しいと感じた。

今後の 実践計画	英字新聞に加えて日本語の新聞記事を上手く活用する。言語活動の材料や、教科書で触れる内容の補助的な意味合いで使うことが望ましい。具体的には、ある記事に関しての意見を英語で述べたり話し合ったりする、英語ディベートの題材に新聞記事を用いるといった活用を考えている。

⑩　特別の教科 道徳

実践と成果	【実践】 ・導入、終末において新聞記事を活用する。 ・新聞で身近なニュースを取り上げ、社会への関心を高める。 【成果】 ・導入部分で身近なニュースを取り上げることで、社会に関心をもつことができた。 ・終末に取り上げたときには、学習内容と新聞記事をリンクさせることができた。
問題点	・毎時間、新聞を用いた授業をあまり行えなかった。 ・新聞を用いた授業をする学級が偏っていた。
今後の 実践計画	・NIE タイムを生かし、生徒自身が気になる話題やニュースを取り上げて、それを道徳の授業でも活用するとよい。 ・多様な価値観への共感や、他者との共生を学ぶ機会をつくる。

⑪　総合的な学習の時間

実践と成果	ア　１学年 【実践】 「ＳＤＧｓについて理解し、自分たちのできることを考えよう」というテーマで授業を実践した。 １　新聞を読む。 ２　新聞を読んで、ＳＤＧｓについての情報を集める。 ３　集めた情報をワークシートに書き込み、自分が調べたいテーマについての情報をまとめる。 ４　発表のために、スライドを作る。 【成果】 生徒たち一人一人が新聞を通して、ＳＤＧｓについて関心をもつことができた。インターネットのみではなく、新聞を使用したこ

とで、文章からの情報整理などの機会にもなった。学習が遅れている生徒も自ら情報を新聞などから集め、スライドを作り、発表することができた。

イ　２学年

【実践】

「埼玉県の特徴を知り、旅行プランを紹介しよう」というテーマで授業を実践した。

1　新聞広告（パンフレット・チラシ）の特徴を知る。

（１）どのような内容が広告には載っているのか調べる。

（２）見付けた内容を要約させてプリントに書かせる。

（３）見出しの特徴（キャッチコピー）を探る。

（４）それぞれの見出しのよさを発表させる。

（５）構成を捉える。

・どのような順番で書かれているか。

・どのような内容にどのような写真が使われているか。

2　埼玉県の特徴、必要な情報を集める。

3　新聞の構成を考え、下書きを作る。

4　新聞の清書を行う。

5　学級で発表を行う。

ウ　３学年

【実践】

1　新聞の特徴を探る。

（１）どのような内容が新聞には載っているのか調べる。

（２）見付けた内容を要約させてプリントに書かせる。

（３）見出しの特徴を探る。

（４）それぞれの見出しの良さを発表させる。

（５）構成をとらえる。

・どのような順番で、書かれているか。

・どのような内容に、どのような写真を使っているか。

2　修学旅行の情報を集める。

	3　新聞の構成を考え、下書きを作る。 4　新聞の清書を行う。
課題点	総合的な学習の時間を「新聞制作学習」において中心的役割を果たす場と位置付けたときに、他教科との連携を計画的にできるよう年間指導計画を見直す必要がある。
今後の 実践計画	総合的学習の時間において、NIE だからこそできる「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の開発を進める。 ・「なぜ・どうして、もっと知りたい新聞で」（考える・熟考する学習） ・「どうしたらいいの、みんなで考えよう新聞で」（判断する・参加する学習） ・「意見や考えを、みんなに伝えよう新聞で」（表現する・発信する活動）

⑫　特別活動

実践と成果	【実践】 年末に日本漢字能力検定協会が主催している「今年の漢字」に関する記事を紹介し、同時期の学級活動の中で、生徒に「今年の漢字・今年を振り返って・来年の抱負」などを考えさせた。 【成果】 社会の出来事と関連した活動を行うことで社会の出来事を自分事として捉えて興味・関心をもてた生徒が多かった。
問題点	・新聞を用いた活動をあまり行えなかった。 ・新聞を用いた活動をする学級が偏っていた。
今後の 実践計画	略案などを作成・共有し、全学年が共通して取り組めるような活動を定期的に実践する。

5　成果と課題

(1)成果

ア　今年度の成果

研究の視点に基づき、NIE 実践の蓄積と環境整備を積極的に進めることができ、NIE を取り入れた教育活動を学校全体で推進できる素地を整備できた。具体的な成果は以下のとおりである。

(ｱ)　新聞を活用した授業をできることから実践することで、教職員の中に新聞を活用してみようという雰囲気が広がってきた。

(ｲ)　全校生徒が新聞に親しむ機会を多面的に設定したことで、意見を受信する力と発信する力を伸ばすことができた。具体的には以下のとおりである。

・週１回の NIE タイムでは、回数を重ねるごとに、新聞を読んだり、意見や感想を記入したりする速さが向上している生徒が増えてきている。

・各専門委員会の特徴を生かした新聞活用を模索する中で、生徒が新聞の活用方法の幅を広げる姿が見られた。

・各学級における新聞スピーチを繰り返すことで、身近な社会問題について、生徒が自分事として意見を記述できるようになってきた。また、他者の発表を聞いて、多様な考えに触れる機会を設けることができた。

(ｳ)　生徒も教職員も、新聞をより身近に感じるようになった。

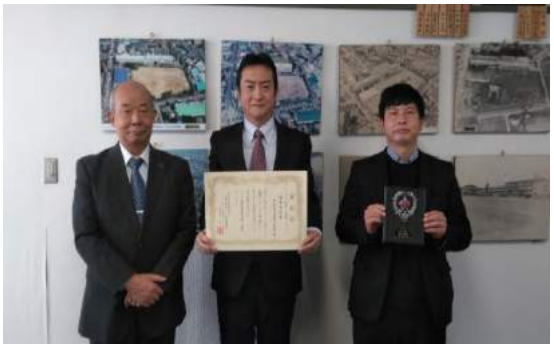
イ　日本新聞協会主催　第１１回「一緒に読もう！新聞コンクール」

令和２年度において以下の表彰を受けた。

優秀学校賞　　戸田市立美笹中学校

全国奨励賞　　３年生１名受賞

埼玉県努力賞　１年生４名、２年生２名、３年生１１名受賞



ウ　埼玉県学力・学習状況調査より

下の表から、２年生及び３年生については、国語における学力レベルが年々上昇していることがわかる。特に３年生は、２年次から飛躍的に力を伸ばすとともに県の平均点を上回った。普段の国語の授業に加え、NIE を継続的に実践したことにより読解力や情報収集力が更に身に付いたものと考えられる。

現・３年生

		Ｒ２（３年時）		Ｈ３１（２年時）		Ｈ３０（１年時）	
		平均点（学力レベル）	差	平均点（学力レベル）	差	平均点（学力レベル）	差
国語	本校	72.9 (9-C)	0.2	59.0 (8-B)	▲0.3	51.7 (7-A)	▲3.5
	県	72.7		59.3		55.2	
数学	本校	58.3 (8-A)	0.6	61.1 (8-C)	0.3	58.5 (7-B)	0.4
	県	57.7		59.8		58.1	
英語	本校	50.9 (9-A)	▲4.8	55.4 (9-C)	▲0.9		
	県	55.7		56.3			

現・２年生

		Ｒ２（２年時）		Ｈ３１（１年時）	
		平均点（学力レベル）	差	平均点（学力レベル）	差
国語	本校	63.1 (8-B)	▲0.7	60.4 (7-A)	▲2.9
	県	63.8		63.3	
数学	本校	52.6 (7-A)	▲6.0	57.2 (7-B)	▲2.6
	県	58.6		59.8	
英語	本校	52.9 (8-A)	▲4.4		
	県	57.3			

現・１年生

		Ｒ２（１年時）	
		平均点（学力レベル）	差
国語	本校	55.2 (7-A)	▲5.9
	県	61.1	
数学	本校	52.5 (6-A)	▲7.7
	県	60.2	

(2)課題

ア　今年度の課題

(ｱ)　教職員の中にある新聞活用に対する意識や技能の差を縮めること。

(ｲ)　生徒の主体性を伸ばしながら取り組んでいくこと。

・新聞係が選んだ記事のため、記事の内容に興味をもてない生徒がいた。

・NIE タイムのスクラップシートを管理できていない生徒がいた。

上記の課題を裏付けるデータとして、アンケートと県学力・学習状況調査の 2 つの分析結果を踏まえたい。

アンケート結果からは、身近な学級や委員会などに貢献しようとする意識が高いことに対して、対象が「社会」のように大きく抽象的なものになると意識は一気に低下していることが分かった。また、自分の考えを伝えることや分からないことを進んで調べる意識が低いことも分かった。

県学力・学習状況調査の結果からは、全学年で共通して、知識・理解や技能の項目よりも「話す・聞く能力」「数学的な考え方」の項目が県平均と比較して低いことが分かった。

イ　今後に向けて

NIE 実践の蓄積と環境整備は継続して行っていく必要がある。次年度以降は、この 2 つの柱で NIE 実践の土台を固めつつ、今年度の課題解決のために「授業の題材を社会と関係するものに設定すること」「各教科での NIE タイムをより充実すること」の 2 点を意識した実践を積み重ねたい。特に、学校での学習が社会につながっていることを感じさせていくことが、生徒の主体性を伸ばすという点において重要である。また、各新聞記事を比較する活動の充実や今年度行った活動の質を高めることで、思考力や表現力の育成につなげることが大切である。

また、NIE を軸としたカリキュラム・マネジメントの視点で年間指導計画を見直し、意図的に生徒の力を伸ばす手立てを考えていくことが次年度の目標である。NIE を軸として教育活動を展開し、どのように力が伸びていくのか効果測定し、検証することで、社会で活躍できる人財の育成を目指す。

Ⅳ　実践校における取組

1　実践校における取組③　学校名　戸田市立新曽小学校

2　学校や地域の実態、特色について

(1)学校や地域の実態について

本校は、昭和３５年２月１日に創立し、令和２年度で開校６２年目を迎えた。児童数６３９名、学級数２１学級、教職員３４名の中規模校である。校内には難聴言語通級指導教室「ことばの教室」が併設されており、市内７校の各小学校から、年間１００名程度の子供たちが通ってきている。また、令和元年度には特別支援学級「たけのこ学級」が新設された。

在籍児童　(令和３年３月１日現在)

学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特別支援学級	計
児童数	１１３	１２５	８０	１０３	１００	１１４	４	６３９
学級数	４	４	３	３	３	３	１	２１

本校は戸田市の中央部に位置している。南には荒川が流れ、学区には複合型コミュニティセンター『さくらパル』や学校給食センター、戸田競艇場がある。学区内にはマンションなどの集合住宅が多い。

(2)学校や地域の特色について

本校の特色として挙げられるのが、セサミストリート・カリキュラムのパイロット校としての取組である。「夢をえがき、計画を立て、行動する」力の育成を目指し、平成２９年１２月からセサミワークショップとの連携のもと授業実践を行っている。

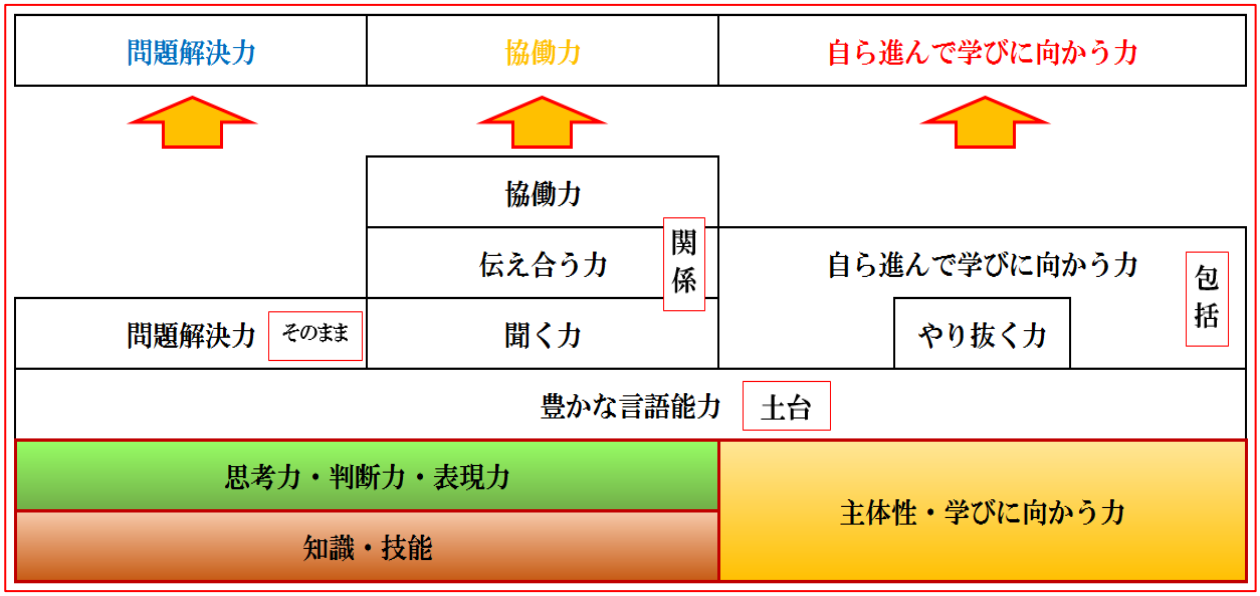
また、荒川土手への「たてわり遠足」などの異年齢集団による活動や、学校ファームを利用した食育、学校応援団の読み聞かせや学習支援、「新曽の杜」を中心とした環境教育活動にも取り組んでいる。

令和２年度からは研究主題を**「つなぐ　～カリキュラムを、人を、社会をつなぐ、資質・能力ベースの学び～」**として、新曽小の児童に身に付けさせたい３つの資質・能力の育成に向けて、教科等横断的な教育課程の編成について研究を進めている。

3　カリキュラム・マネジメントをとおして、子供たちに育みたい資質・能力について

昨年度までは、育みたい資質・能力を７つに定めていたが、多すぎるため検証が難しいという課題が残った。そこで、教職員全員で「児童に育みたい力は何か」ということを改めて考え直し、**『問題解決力』**・**『協働力』**・**『学びに向かう力』**の３つに整理した。

【育みたい資質・能力の整理イメージ】



【全体研修会の様子】

【新曽小で育みたい資質・能力】

知識及び技能	思考，判断，表現	主体的に学習に取り組む態度
何を知っているか、何ができるか	知っていること、できることをどう使うか	どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送れるか
問題解決力	**協働力**	**学びに向かう力**

4　カリキュラム・マネジメントの実際について

(1)現代的な諸課題への対応力のために不可欠な３つの資質･能力を身に付けるための授業改善の在り方等の研究

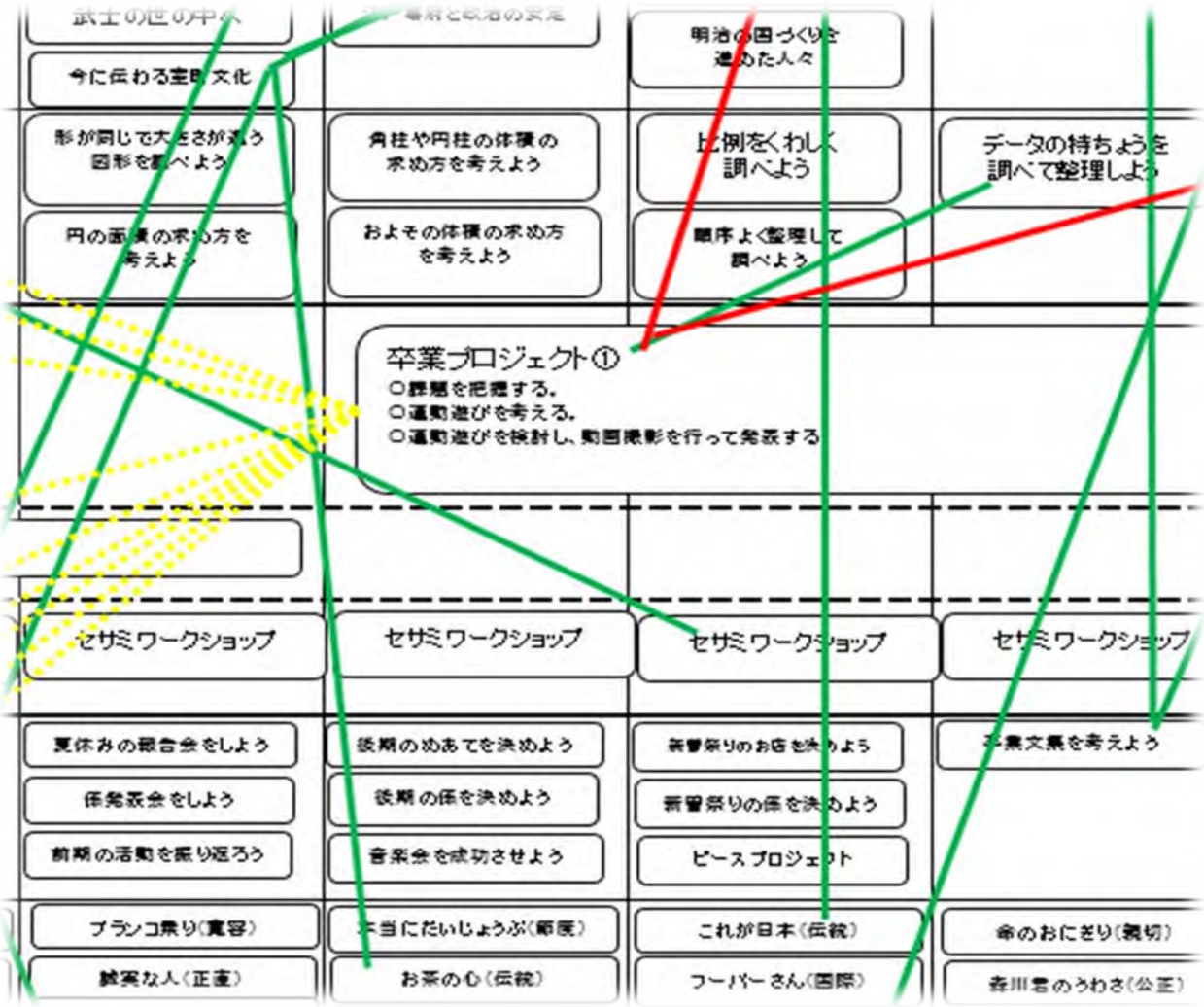
①カリキュラムを「つなぐ」

令和２年２月の緊急事態宣言発令に伴う休校により、令和２年度はいつも以上に限られた時間の中で学びを展開することになった。そこで、カリキュラム・マネジメントにより教育効果の最大化を図るため、学年ごとの単元配列表を作成した。

年度当初に単元配列表を見ながら１年間の見通しをもつとともに、生活科・総合的な学習の時間を中心にカリキュラム・マネジメントを行った。

緑・赤・黄の３色の線は、それぞれ**「学習内容のつながり」**、**「資質・能力のつながり」**、**「学ぶ形のつながり」**を表している。

【つながりを意識した単元配列表の作成】



②休校中の学びを「つなぐ」

緊急事態宣言の発令に伴い、令和２年３月から５月にかけて、約３ヶ月間の休校期間となった。その間、計画的に学習ができるよう、セサミストリート・カリキュラムの理念である「夢をえがき 計画をたて 行動するシート」で自律的な学びを促すこととした。

４月からは、Google Classroom 使って授業動画の配信を行うとともに、Google meet で担任との顔合わせや自己紹介などを行った。また、６月からの分散登校中に、２つのグループを Google meet でつないだ学年もあった。

「夢をえがき」 「計画をたて」 「行動する」 シート

SESAME STREET

きにゅうれい

３月 ３日 （火）	体おん３５.９ ℃	体ちょう ◎
おきたじこく ６：３０	ねたじこく ２０：００	
家の人とのやくそく		ひょうか（○△×）
・ごはんの前に手あらいうがいをする。 ・今日のゲームは60分まで。		○ △
今日とり組む学しゅう・うんどう		ひょうか（○△×）
読書 （１さつ） 100ページ		○
たし算 ひき算 教科書P７２～７７		○
かん字マスター １６、１７		△
ニじゅうとび れんしゅう（１０分間）		○
「３まいのおふだ」のかんそう		○
お手つだい		家の人のサイン
おさらあらいを3食分やる		

３月 ４日 （水）	体おん36.2℃	体ちょう ◎
おきたじこく 7 ：30	ねたじこく 9 ：10	
家の人とのやくそく		ひょうか（○△×）
・うがい手あらいをきれいにする。 ・テレビは２時間まで		○
今日とり組む学しゅう・うんどう		ひょうか（○△×）
本読み １さつ		○
算数プリント ３枚		○
漢字プリント １枚表裏		○
ドリル ５ページ		○
ドリブル 左右 100回ずつ		○
お手つだい		家の人のサイン
そうじをかける。		

【休校期間中のオンラインホームルーム】

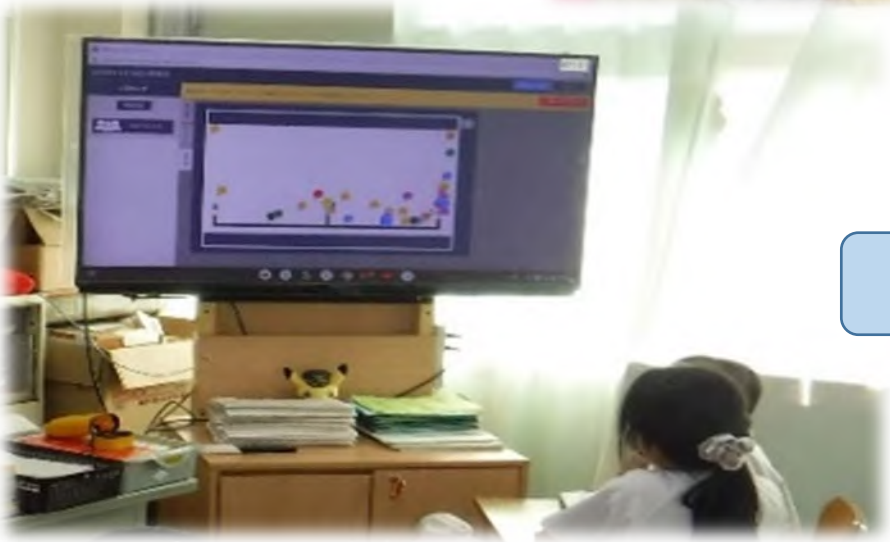
【分散登校中のオンライン交流】

③児童の思考を「つなぐ」　⇒　**協働力の育成**

協働力を高めるためには、児童同士の対話が必要不可欠である。そこで、思考ツールや各学年４０台（令和３年度から１人１台）のタブレット PC を積極的に活用することで、対話的な学びが制限されるコロナ禍においても、様々な形で意見交流ができるようにした。

個人の学び

グループ活動で
意見交流や
共同編集



全体で共有

④クラスや学年・学校を「つなぐ」　⇒　**学びに向かう力の育成**

学びに向かう力を高めるためには、目的意識や相手意識をもたせることが重要である。そこで、クラスや学年、あるいは学校間をつなぐことにより、コロナ禍であっても確かな目的意識・相手意識をもって学習に取り組めるようにした。

【クラスをつなぐ】

６年３学級をオンラインでつなぎ、代表者がビブリオバトル（本の紹介）を行った。当日は欠席の児童もいたが、家庭からオンラインでつないで発表することができた。

学校行事が中止になる中で、学年全体としての一体感を感じることができた。

【学年をつなぐ】

３年生が１年生に向けて、シャボン玉の作り方を動画で説明した。説明は感染リスクを考慮し、オンデマンド形式で行った。

３年生は説明を動画でまとめることにより、順序立てて説明することを意識できた。また、１年生にとっても「繰り返し見られる」「たくさんのグループを見られる」などのよさがあった。

【学校をつなぐ】

２年生が市内の小学校とオンラインでつながり、学区について紹介し合う活動を行った。

学区を知らない相手に発表することで、「より詳しく伝えたい」「もっと知りたい」という気持ちが高まった。

⑤実生活・実社会を「つなぐ」　⇒　**問題解決力の育成**

戸田市では、市全体で PBL（Project-based-Learning）型の学びを推進している。その中でも問題解決力を高める手段のひとつとして、実生活や実社会とのつながりを大切にしてきた。

様々なゲストティーチャーをお呼びして話を聞いたり質問したりすることで課題設定や情報収集を行った。また、実生活や実社会のリアルな課題を解決しようとすることで、課題意識が高まった。

【町会長のお話（３年）】

総合的な学習の時間「集まれ！戸田まち！」の情報収集の手段として、各地域の町会長をお呼びして町会の歴史や活動を教えていただいた。

児童はメモをとったり質問をしたりして、生きた情報を集めていた。

【原爆体験のお話を聞く（５年）】

広島出身の田中さんに被爆体験の講話をいただいた。国語「たずねびと」の学習を経て、当時の様子を事実として知っていた子供たちも、実際の話を聞くことで考えを深め、「未来につないでいきたい」と考えることができた。

【ペルー大使館との交流（６年）】

国語「日本の文化を発信しよう」や社会「室町・江戸の文化」の学習の導入として、ペルー大使館の職員と交流した。海外から見た日本文化の印象を知り、「もっと伝えたい！」という課題意識が高まった。

【生活科での実践例（２年）】

学校教育目標 あかるく（徳育） かしこく（知育） たくましく（体育）	生活科の目標 （１）活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。 （２）身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。 （３）身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

本研究で目指す児童像

友達と協力しながら、自ら進んで問題解決ができる児童

令和元年度入学児童の、令和元年度における児童の実態

	問題解決力	協働力	自ら学びに向かう力
○	本を使って知りたいことについて調べることができる。	話す・聞くことができる。	思いや願いをもって学習に取り組むことができる。
△	表現の仕方や情報の集め方、ＩＣＴの活用の仕方が定着していない。	話し合い方・発表の仕方が定着していない。	粘り強く学習することができない。

令和２年度で目指す児童像		
問題解決力	協働力	自ら学びに向かう力
・問題や課題を自ら見つけ情報収集しながらまとめ表現することができる	・対話の方法を知り、自分の考えや友達の考えを伝え合うことができる	最後まで課題に取り組む
問題や課題を自ら見出し、自分の考えや意見を伝えたり、聞いたりする活動を通して、解決策を考え、実践できる児童		

単元名

うごく　うごく　わたしのおもちゃ

探究課題

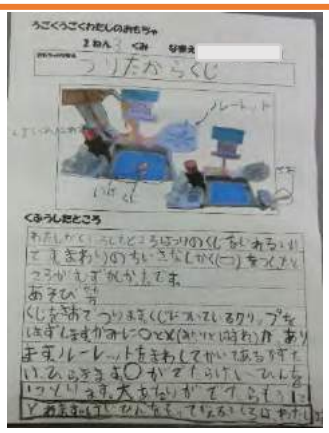
おもちゃを作ろう

仮　説

○課題の見つけ方、話し合い方等の方法や視点を知ることで、問題解決力（自ら課題を見つけ、対話し、考えを深めていく児童）の育成ができるだろう。
○おもちゃを作ったり、繰り返し改善したりする活動の中で、課題や課題に対する解決策を考える姿や対話する活動から目指す児童像へ向かうことができるであろう。
●活動中に仮説や仮説に対する手立てを聞いたり、成果の発表をしたりする活動から見取ることができるだろう。

関わりを深めるための･･･

人	もの	こと
友達、１年生、３年生、先生	ICT　本　インターネット	調べ学習　遊ぶ活動 作る活動　発表 動画を撮る、見る活動

プロセス	学習内容
問題発見	おもちゃ作り、改良
課題設定	自分の思いを明確にし、実現に向け仮説をたてる 子供の思いや願いを大切にした課題 繰り返す
情報収集・整理 ・遊ぶ ・作る ・試す	製作作業→遊び→改良 お皿にのった貝殻を遠くにとばしたい…→「どうしたらとぶかな？」→「ゴムをつかってみるといいんじゃない？」→友達に聞きながら試行錯誤を繰り返し行った。
まとめ・表現	中間発表にて、自分なりに工夫したことや友達からのアドバイスを受け最終製作に取りかかる クロムブック、振り返りカードなどを使って記録を残す
分析・振り返り 気付きの質の高まり	これまでの経過を振り返り、おもちゃ製作ブックを作る →１年生に紹介 自分たちの成果をシートにまとめ、１年生に紹介しました！  ３年生におもちゃのアドバイスを求めました！丁寧に答えてもらって改良を加えました。

評価方法

形成的評価	発表での評価　活動中の考えを聞く　友達との対話　プリント
総括的評価	積み重ね

【総合的な学習の時間での実践例（５年）】

学校教育目標 あかるく（徳育） かしこく（知育） たくましく（体育）	総合的な学習の時間の目標 （１）多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。 （２）集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意志決定したりすることができるようにする。 （３）自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

本研究で目指す児童像

友達と協力しながら、自ら進んで問題解決ができる児童

令和元年度における児童の実態

	問題解決力	協働力	自ら学びに向かう力
○	課題と評価を提示したときに、Ａ 評価を目指そうと努める児童が多い。かつ達成できている。	自分の考えを他者に伝える	自分からがんばろうとする子は多い
△	問題発見、課題設定をする力に欠ける	共通点と相違点を理解していない児童もいる。練り上げがない（見取れていない？）。できる子の意見に引っ張られやすい	メタ認知が低い（自分の欠点が見つけられない、今の自分に何が必要か分からない） 成功体験が少ない。自分に自信が無い

令和２年度で目指す児童像

問題解決力	協働力	自ら学びに向かう力
問題の発見と、それを解決するための見通しがもてる児童	他者の考えをもとに、自分の考えをより深めることのできる児童	自分に足りない点を理解し、何をすれば良いのかを考え、実行できる児童

自分の状況を客観的に捉えながら、他者と協力し、問題の解決に向けて積極的に行動できる児童。

単元名

食プロジェクト

探究課題

日常的な食（家庭の献立）

仮　説

○一年を通し、段階的にプロジェクト型学習に取り組み、他者と協力しながら問題解決のサイクルを繰り返し学ぶことで、問題解決力を育成することができるだろう。
○ルーブリックに基づいた自己評価や友達からの貢献度評価、最終的な成果物に対する総括的評価をとることで、資質能力が育まれたかを見取ることができるだろう。

関わりを深めるための･･･

人	もの	こと
・保護者　・友達 ・学校応援団　・専門家	・ICT（GoogleClassroom、ミライシード）	・調べ学習 ・グループ活動 ・専門家による助言

プロセス	学習内容
問題発見	①社会『米づくりの盛んな地域』の単元を途中まで進める ②食に迫る様々な問題と、食に対する人のこだわり（想い）を知る ⇒『食の問題をとらえそれを解決するための理想的な献立を広めよう』というプロジェクトの方向性を知る。 ③社会科の授業から、いくつかの食の問題を知り、ワークシートに書き溜める 米作りの盛んな地域　…　米の消費量の減少問題 水産業の盛んな地域　…　漁業生産量の減少問題 これからの食糧生産　…　食料自給率の問題、食の安全の問題、食品ロス問題 ④家庭科の授業から、食の問題を知り、ワークシートに書き溜める 食べて元気に　…　栄養素の種類 教科と PBL のつながりを意識し、社会科や家庭科の各単元をもとに、食への理解を深めた。 ⑤自分でも食に関する問題を調べ、クラスで共有する。 ７つの『こ食』、文化としての日本食、生活習慣病など ⑥自分が取り組みたい問題を選ぶ。 ⑦選んだ問題ごとにグループをつくる（３人程度）。 ⑧問題について情報を集め、理解を深める。（ミニ情報収集、まとめ） ※適宜、外部の人（専門家）に質問する。 この時、外部の人の想いや願いに触れられるとよい。
課題設定	⑨グループで、自分達が選んだ食の問題を解決するような献立が、実際の食卓にでてくるようにするための課題を定める
情報収集・整理	⑩課題を解決するための情報（課題を解決するための献立）を集める。 （１）課題を解決するような食材や工夫が取り入れられている （２）広める＝普段のおうちの食卓に出せるような献立である
まとめ・表現	⑪グループでまとめる（一人一食、合計最低３食） 《まとめる（発表する）際の項目》 （１）グループの課題 （２）献立の内容 （３）課題に対する献立の有用性 ⑫中間発表をする ※ここでの主な指摘は、児童が考えた献立が食の問題に貢献するかどうかではなく、その献立が実際に食卓に出せるものかどうかという点。 栄養教諭の先生、普段お家のために献立を考えている学校応援団から審査役とﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸをもらった。
分析・振り返り問題発見	⑬お家の人や観客側の児童からもらったアドバイスをもとに、自分たちの献立に足りない点（新たな問題）を分析する。 ※お家の人が何を考えて献立を立てているのかという想いや願いに触れさせる。
課題設定	⑭自分たちの献立に足りない点（新たな問題）に対する課題を設定する。
情報収集	⑮課題を解決するための情報を集める 献立を考える際の視点はサイクル①と同じ。
まとめ・表現	⑯グループでまとめる。 ⑰スライドと動画にまとめる。 ⑱クラスに発表する。 ⑲Google クラスルームで配信 発表の様子は保護者にもﾘｱﾙﾀｲﾑで配信した。
分析・振り返り	⑳自分たちの活動を振り返る。

評価方法

形成的評価	・振り返りシートの記述（自己評価）、中間発表の内容、グループ活動の様子
総括的評価	・最終的な成果物、発表の様子、プロジェクト全体の振り返り（自己評価）

【各教科と関連付けた実践例】

カリマネ単元

生活「きれいにさかせよう」

「もうすぐ２年生」

算数「おおきいかず」

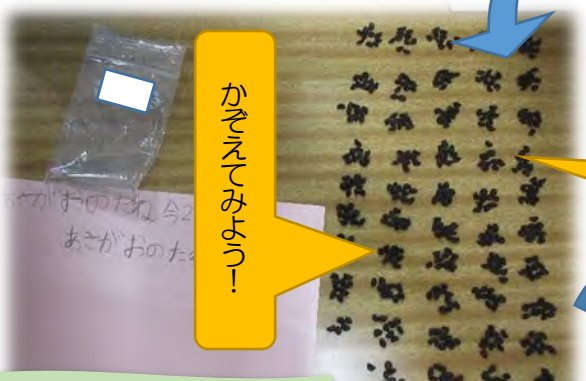
１年　あさがおの種がとれたよ！

お家のも咲いたよ！

生活「きれいにさかせよう」

たねがたくさんできたよ

たくさんあるね！



かぞえてみよう！

算数「おおきいかず」

来年の１年生に種をプレゼントしよう

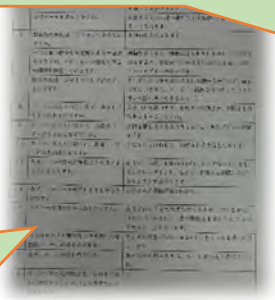
生活「もうすぐ２年生」

成果	自分で育てたあさがおの種を、何個取れたか算数で数えた。自分たちが入学時に種をもらったことを思い出し、自分の種をプレゼントしたいと考え、ＩＣＴを活用して、プレゼント用の封筒を作成した。子供たちが必要感をもちながら活動することができた。
課題	学習の時期が離れていたので、見通しをもって、もう少し計画的にカリマネできるとさらによい。

３年　お店の店長になろう！

「普段行っているスーパーにはどんな工夫があるのかな？」

「スーパーの店長に質問してみよう」



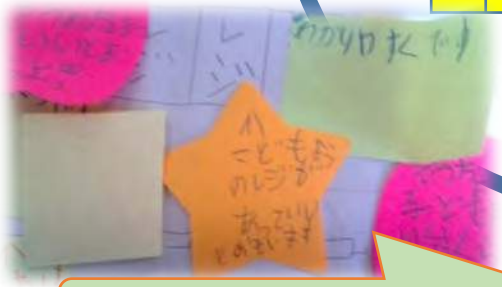
カリマネ単元
国語「ポスターを作ろう」
社会「わたしたちのくらしとお店の仕事」

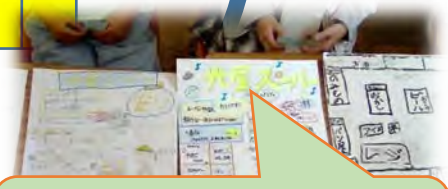
問題発見

課題設定
情報収集
まとめ・表現

スーパーの配置を考えよう

レジを真ん中にしたらどうだろう？





知らせるためにポスターで宣伝する必要があるね！

「もっとこうしたらどうかな？」

自分のスーパーにはこんないいところがあるよ！

成果	オリジナルのスーパーが作れる事で全員が意欲的に取り組めた。また、ポスターを一人一つ作成したため、自分のスーパーはどんな工夫があったのか個人で振り返る事ができた。
課題	コロナ禍で実際に店長に話を聞いたり、スーパーの細かな工夫を見たりすることができなかったため、文字からの情報しかなく、新たな問題を見つけることが難しかった。

４年　埼玉県の魅力度ランキングを上げよう！

教師「今年の埼玉県の魅力度ランキングは３７位でした。」

カリマネ単元

社会「県内の特色ある地域」

国語「世界にほこる和紙」

「調べて話そう　生活調査隊」

問題発見

おもしろい CM ってどうやって作るのかな。

埼玉県の魅力が伝わる CM を作りたい！

課題設定
情報収集
まとめ・表現

埼玉県の魅力って何だろう。

CM のアイディアを絵コンテにまとめてみよう。

成果	問題がリアル且つ活動が楽しいため、子供たちが主体的に取り組んでいた。 子供たちが自然と情報交換を行っていて協働力の育成にもつながっていた。
課題	発表が校内にとどまってしまったため、実際に魅力度ランキングに反映することが難しかった。

６年　日本文化を発信しよう！

ペルー駐在の方の話

「日本文化を紹介する仕事を手伝って！」

問題発見

カリマネ単元

国語「『鳥獣戯画』を読む」

「調べた情報の用い方」

「日本文化を発信しよう」

「古典芸能の世界」

「狂言　柿山伏」

社会「今に伝わる室町文化」

「日本とつながりの深い国々」

柿山伏について知ろう

友達に紹介してみよう

図工で墨絵を実践してみよう

課題設定
情報収集
まとめ・表現

ペルーに発信！

成果	目的・相手意識がはっきりしているため、積極的に取り組めた。様々な時期、内容をカリマネすることができたので、１年間を通じた取り組みとなった。
課題	コロナ禍だからこその取り組みだが、持続可能な取り組みではない。

たけのこ学級　　「たけのこ みんなで でかけよう」～東西南北～

みんなで〇〇がしたいなぁ。

①「買い物がしたい」「公園に行きたい」（東）

②「お弁当を買って食べたい」

「新曽北小に行きたい」（北）

③「神社に行きたい」

「公園で鬼ごっこがしたい」（西）

④「昔遊びがしたい」「たこあげがしたい」（南）

生活単元学習「みんなで なかよく でかけよう」

自立活動「なかよく活動しよう」

「コミュニケーション」

日常生活の指導「安全なくらし」

国語「いつ・どこで・なにをする」

算数「大きな数（お金を使って）」

「代金・おつりの計算」「時刻と時間」

社会「地図の見方」「わたしたちの戸田」

食育「選んで食べよう」

生活「植物を育てよう」「昔遊び」

「プログラミング」

図工「クリスマスリース作り」「たこ作り」

問題発見

スーパーはどこにあるのかな？この信号を右だね。（プログラミングカー）

右と左の狛犬って同じ？ちがう？

課題設定
情報収集
まとめ・表現

おつりはいくらかな？

お弁当を選ぶとき大事なことは？

お参りの仕方は？

３００円で買えるかな。全部食べることができるかな？

成果	児童の思いや願いを実現しながら、生き生きと活動することができた。生活単元学習で必要な力を他教科と関連づけて学習し、体験活動を通して身に付けることができた。
課題	自分の思いや願いを実現する経験を重ね、さらに、みんなのため相手のために、自分ができる活動へと、つながるようにしていきたい。

(2)セサミストリート・カリキュラムの効果的な導入による、「夢をえがき、計画を立て、行動する」児童の育成や多様性への理解の推進

①中堅教諭による示範授業

本校は平成２９年よりセサミストリート・カリキュラムのパイロット校として授業実践を行っているが、新たに赴任した先生もセサミの授業がイメージできるよう、年度初めに示範授業を行っている。令和２年度は密を避けるため体育館で授業を行い、学校運営協議会の皆様にも参観していただいた。

セサミストリート・カリキュラムで大切にしているキーワードとして、

- **思いついたことは何でも表現してよい**
- **NO は言わない**
- **ハートトーク**
- **夢をえがき、計画を立て、行動する**

があり、これらの理念は他教科にも活かされている。

【示範授業の様子】

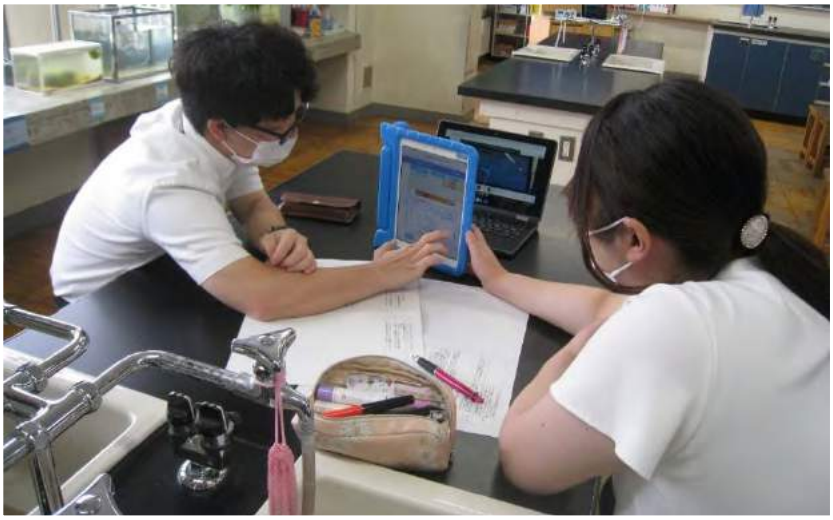
②為田氏によるセサミ研修

年に数回、フューチャーインスティテュート株式会社代表取締役であり、教育 ICT リサーチ主宰の為田裕行氏を招聘し、セサミストリート・カリキュラムに関する理論研修や研究協議を行っている。

夏季休業中の研修会では、「コロナ禍で対話的な学びが制限される中、どのように意見交流をすれば話合いが深まるか？」という質問が出された。

そこで、ICT を活用した意見交流の方法を教えていただき、実際に体験することで指導の幅を広げることができた。

【理論研修の様子】



【研究協議の様子】

③年間指導計画の作成

セサミストリート・カリキュラムは、生活科や総合的な学習の時間を中心として、４つのカテゴリー、１２のテーマから各学校で内容を選択し、年間９時間実施している。

カテゴリー	テーマ
目標と選択	1.夢をえがく
	2.目標をたてる
方法と手段	3.計画をたてる
	4.行動する
	5.問題を解決する
	6.コラボレーション
価値の理解	7.お金の理解
	8.物事の価値
	9.人の価値観
多様性とインクルージョン	10.社会的スキル
	11.多様性の理解
	12.インクルージョンの実現

各学年で９時間選択する

以下の例のように各教科等に位置付けて実施することも考えられる。

※例は「目標と選択」の「夢をえがく」の場合。

【生活科】

・内容（9）において、自分の成長を振り返り、これからの成長への願いをもつ段階において教材を活用し、願いを具体化する。

【特別の教科　道徳】

・内容項目 A（5）においてセサミ教材をもとに話し合い、自分の生活にどのように生かしていくのかを各自がまとめる。

【総合的な学習の時間】

・キャリア教育に関連する探究課題の単元において、オリエンテーションとして位置付けたり、情報収集の一部として位置付けたりする。

【学級活動】

・学級活動（3）ア 現在や将来に希望や目標をもって生きる意欲や態度の形成の教材として「夢をえがく」を活用して話し合い、一人一人の児童が意思決定を行い、実践に取り組む。

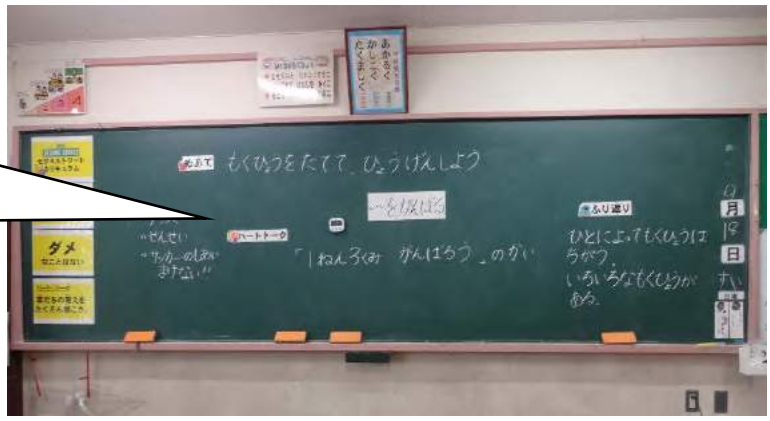
④低学年の実践（学級活動との関連）

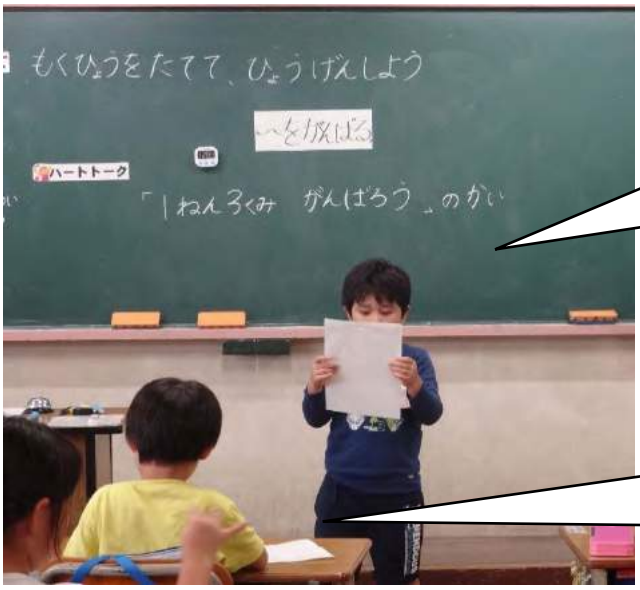
カテゴリー	テーマ
目標と選択	2.目標をたてる

ねらい：目標を立て、表現する。

クッキーモンスターの
もくひょうは
なんだったかな？

人によって、いろいろな
もくひょうがあるね。





【学級活動に活かす】
ぼくは、〇〇をがんばるぞ。

みんなにもくひょうをきいて
もらうと、やる気がでるね。

成果：学級活動と関連付けることで、より具体的な意思決定につながり、
実践への意欲を高めることができた。

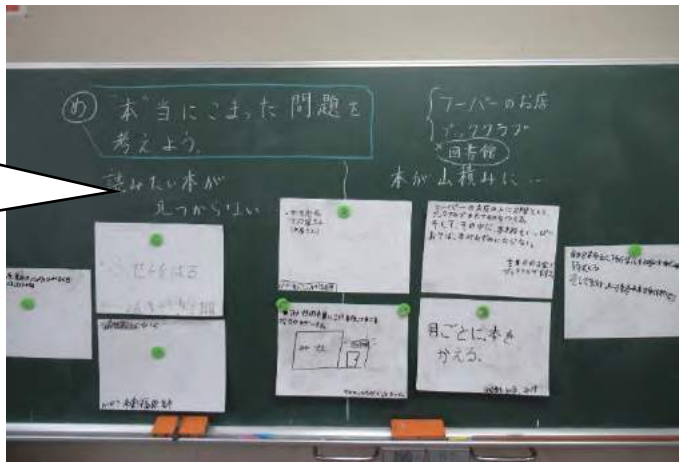
⑤中学年の実践（算数科との関連）

カテゴリー	テーマ
方法と手段	5．問題を解決する

ねらい：固定観念に捕らわれず、複数の解決策を考える。

問題を解決するためには
どのようなアイディアが
あるかな？

たくさんの解決策を考えて、
その中から選ぶ方が、問題が
解決しそうだね。



【算数の学習に活かす】
どうやったら正三角形ができるかな？いろいろな方法で考えてみよう。

成果：算数の学習と関連付けることで、多面的な見方・考え方を活かして問題解決を図ろうとする姿が見られた。

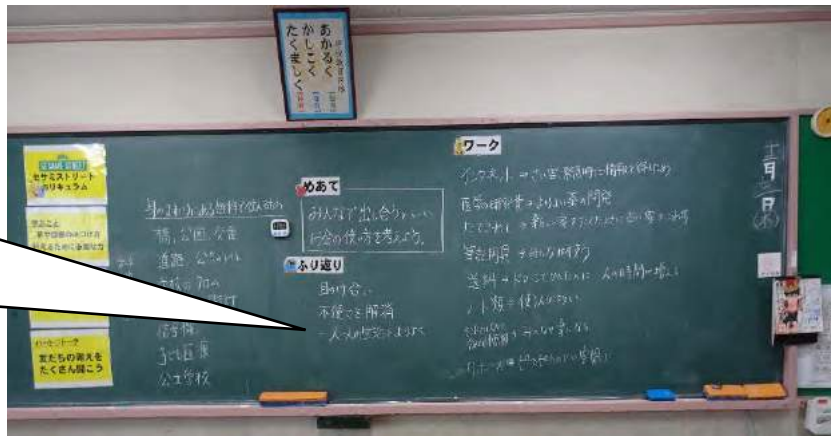
⑥高学年の実践（社会科との関連）

カテゴリー	テーマ
価値の理解	7．お金の理解

ねらい：税金など、社会のために使われているお金について理解する。

お金を払わずに受けているサービスにはどんなものがあるかな？

みんなが使うものやサービスは、みんなでお金を出し合った方がいいんだね。



【社会の学習に活かす】
税金にはいろいろな種類があって、私たちの生活を支えているんだね。

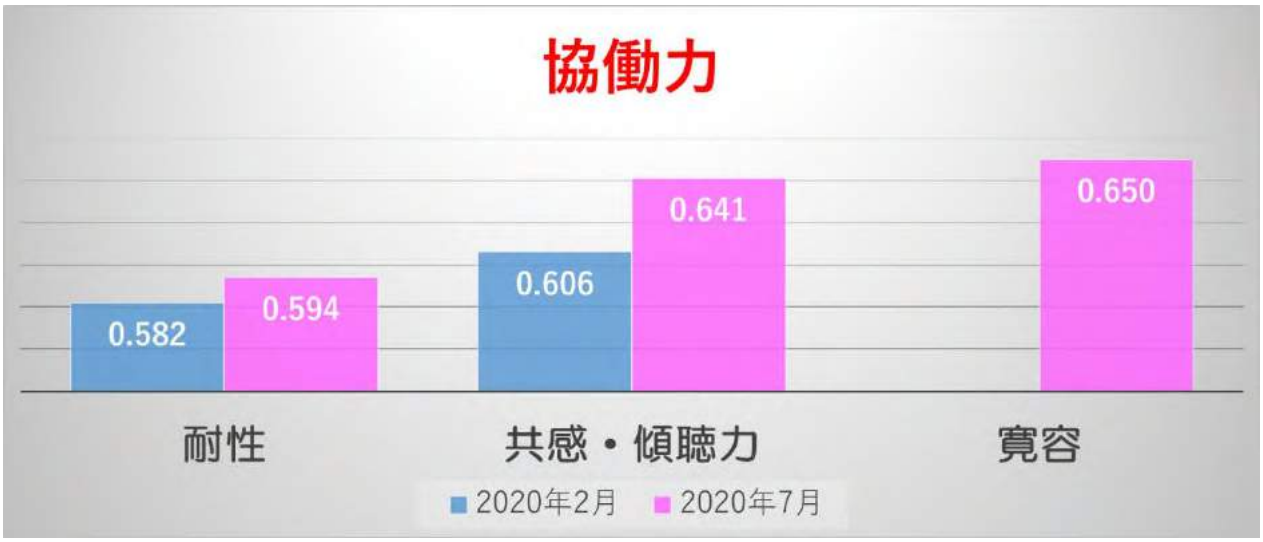
成果：租税教室と関連付けることで、知識の習得にとどまらず、よりよい税の使い方について考えを深めることができた。

5　成果と課題

(1)Ai GROW の結果から

戸田市では、民間のベンチャー企業と提携し、AI を利用して個人の資質・能力を解析する Ai GROW という評価ツールを活用している。

以下、2020 年 2 月と 2020 年 7 月の測定結果（学校全体の平均値）を比較している。



３つの資質･能力のうち､『学びに向かう力』(創造性＋自己効力で測定）については大きな伸びが見られなかったが､『問題解決力』及び『協働力』の構成要素については以上のような伸びが見られた。

（※「寛容」については 2020 年 7 月のみ測定のため比較対象なし）

特に､『協働力』を構成する「共感・傾聴力」については、最も大きな伸びを示した。

(2)埼玉県学力・学習状況調査　質問紙調査（６年）の結果から

もう一つの視点として、令和２年７月に実施した埼玉県学力・学習状況調査の質問紙調査（６年）の結果から、セサミストリート・カリキュラムの理念に類似する質問項目を抽出し、市や県の平均値と比較した。

特に、「計画を立てる」ことについて高い結果となった。

(3)教職員や児童の姿から

①日頃の授業の中でカリキュラム・マネジメントを意識している実践が多く見られた。「教職員一人一人によるカリキュラム・マネジメント」の意識の高まりが感じられた。

②「夢をえがき、計画を立て、行動する」という理念をはじめ、「間違いも正解もない」「お互いを尊重して受け入れる」「考えたことは全て発言してよい」「考えが変わって良い」というセサミの考え方が、他の授業でも生かされている。

(4)今後に向けて

①３つの資質・能力について系統的に指導していけるよう、各学年における目指す児童像を明確にする。

②Ai GROW や質問紙調査以外の評価方法についても研究を深め、日々の授業改善に生かせるルーブリックを作成する。

③セサミストリート・カリキュラムについて、他教科や学校行事と適切に関連付けたカリキュラム・マネジメントを行うことで、教育効果の最大化を図る。

おわりに

2 年間にわたるこれまでの取組は、変化の激しい現代社会をたくましく生き抜けるよう、目の前の子供たちに育むべき資質・能力は「何か」を明らかにすること、また「どうすれば」育むことができるのかを全ての教職員で検討し、実施・評価してきたことに尽きる。また、本市でカリキュラム・マネジメントを充実させるためには、GIGA スクール構想の下、ICT をフル活用した教育実践や、本市の強みである産官学の知のリソースを効果的に活用することを核として、進めていくことが不可欠であることが改めて明らかとなった。

「Ⅰ　カリキュラム・マネジメントの進め方」では、七つの視点から具体的に各校でカリキュラム・マネジメントを進める際に、留意すべき視点及びポイントを示している。本手引書をもとに、まずは、各校で取り組まなければならないことを明らかにしていくことが大切である。また、3 校の実践校での取組は、七つの視点を具体化した事例となっている。実際に、カリキュラム・マネジメントを推進していく上で参考にしていただきたい。

本手引書が今後の各校のカリキュラム・マネジメントを推進するための一助となることを願う。